
魔法少女リリカルなのはA'S Little Guardian ~ 小さな守護者 ~

聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA・S Little Guardian
nゝ小さな守護者ゝ

【Nコード】

N04920

【作者名】

聖

【あらすじ】

―少女は一人だった。ここが何処なのかわからない…脳裏に浮かぶのは最後の光景。

そう…大好きな母さんの―

―少女は気付けば見たことのない景色の中にいた。仕事の途中で眩い光に包まれたかと思えば、目の前が真っ暗になって…目を開ける

と…其処は―

それは在るはずの無かった偶然。そして数奇な運命の始まり

- 偶然が必然へと変わる時、少女達は出会う -

これは、二人の魔導士と二人の少女の物語。

魔法少女リリカルなのは A・S Little Guardian
nゝ小さな守護者ゝ

始まります。

リリなの cross オリキャラ

魔法少女リリカルなのはの創作物です。創作物は初めてなので内心（知識や技術で）不安で一杯ですが、頑張って書いていきたいと思っています。こんな私の作品ですが、気が向いたらどうぞお付き合ってください。感想等も頂けたら幸いです。内容はオリキャラものになります。（苦手な方も居ると思いますが）技術は皆様の小説を参考に磨いていきたいと思っています。

初めての作品故、至らない点が多々見受けられる可能性が大ですが、最後までめげずに細々と書き綴っていったらいいなと思っています。

オリジナルキャラクター & a m p ・デバイス紹介（前書き）

キャラをわかりやすくするために＋キャラも揃ってきたので紹介します

オリジナルキャラクター & amp; デバイス紹介

【MEIN】

・静草 はるか（シズクサ ハルカ）

性別：女

年齢：18（見た目は小学生）

髪：ロングヘア、黒

漢字表記だと『静草 春香。』海鳴市に転移してきた少女。明るく心優しい素直な性格。ドジ、天然、バカ、残念、不幸で身を固める不憫な少女。困っている人は放っておけないお人好しでいざという時の行動力は、周りを驚かせるほど。かなりの泣き虫だが芯には強い心を秘めている。高い魔力資質を持つにはある理由が…

インテリジェントデバイス：アストラディア

はるかのかのデバイス。先端に十字架をあしらった杖型のデバイスで非常に高い魔力資質を持つはるかのかの魔力を受け止め切ることができるよう強固に作られている。管制人格はとて厳しく真面目な性格だが何処か腹黒い様子。待機状態はネックレス。

・件の少女

性別：女

年齢：9歳

髪：ショートヘア・黒（戦闘時は白）

ロストロギア・エイジ・コクーンを守る少女。冷静で大人しい性格。穏やかなタイプで責任感がとても強く、あることをキツカケにロストロギアを守ることを決意し、管理局と敵対することとなる。守るために誰かを傷付けなければならない現状に心を痛める心優しい少女。なのはやはるか達と同等、或いはそれ以上の魔力資質を秘めている。

デバイス：？？？

データやメモリーを失ったロストロギアがデバイスとして変化した少女のデバイス。主人想いのデバイスで少女の唯一の話し相手で心の拠り所。現状、形状は明らかになっていない。待機状態はヘアピン。

【UNKNOWN】

・禄宵 さやの（ロクシヨウ サヤノ）

性別：女

年齢：12

髪・ロングヘア・黒

出身世界：ミッドチルダ

漢字表記は『禄宵 鞘乃。』スクープをこよなく愛する少女。大人びた性格で冷静沈着。スタイルは剣士。卓越された剣術を扱い、高い戦闘能力を持つ。剣士らしい繊細な戦闘スタイルを好む。

アームドデバイス：リベリオン

『反逆の剣』と称される西洋剣型のデバイス。カートリッジシステムが搭載されている他、特殊な機能も併せ持つ。待機状態はブレスレット。

・早実 かりん（ハヤミ カリン）

性別：女

年齢：12

髪：ミドルツインテール・エメラルドグリーン

出身世界：ミッドチルダ

漢字表記だと『早実 花梨。』関西弁が特徴的な少女。明るく快活な性格で戦闘スタイルは大剣使い。自身の身の丈以上のデバイスを振り回す豪快な戦術を好む。

アームドデバイス：アクセレイド・ザンバー

『襲速の斬馬』と称される、大剣型のデバイス。その巨大さを生かした、攻守一体のザンバーで、カートリッジ装填システムも四対式とかなり豪快。それに見合う強度と圧倒的破壊力を誇る。また、加速装置を搭載し、高速戦闘が可能となっている。

・忍足 オシタリ
逢魔 オウマ

性別：男

年齢：20代前半

髪：ロングヘア・黒

出身世界：不明

正体不明の男。保持する戦闘能力、目的、所持デバイスなど全てが謎に包まれている。無邪気(?)なさやのとかりんの二人にからかわれることが多い悩み多き苦勞人。少女のことを知っているようだが…？

オリジナルキャラクター & a m p ・デバイス紹介（後書き）

進行具合によって紹介もある程度更新されていく予定です

prologue

あれ…？此処は何処だろう…？何だか真っ暗で何も見えないや…と、
言うか何が起こったんだっけ？

確か仕事を頼まれて届け先に向かっていた所だったと思う。それで
街の景色を眺めながら歩いていたら…そうそう！！何かが遠くでピ
カッって光ったんだった。あれ何だったんだらう。もしかして爆弾
とか？みんな無事かなあ…

ってそうじゃなかった！？早く届け先に向かわないと！！

…真っ暗なままだけど…

ハッ！？ひょっとして私仕事中に寝ちゃったんじゃない？

だとすれば早く起きないと！！て…ことはこれは夢か。

なら話は簡単だ。

私はゆっくりと瞼を開ける。

「…まだ夢の中かな？」

目の前に広がった世界は見覚えの無いものだった。どうやらまだ夢
の中らしい。

「マスター、現実を見て下さい」

「ひゃあ！？つて…」

突然の声に情けない声を上げてしまったが、直ぐにそれが知っている声だと気付く。

「…アストラディア？もう、びつくりさせないでよ……と、言うか、何で起動してるの？いや…それより」

自分の右手に目をやると杖が握られていた。先端に十字架をあしらったその姿は紛れもなくアストラディアである。ただ、少しデザインが変わっていて…そして何より

「なんか小さいような？」

「それはマスターも同じです」

「・・・は？」

アストラディアの言葉を受けて、私は自分の姿を眺めてみる。下を向くと地面には水溜まりがあり、水面に自分の姿が映った。

そう、何だか妙にちんまりしてしまった自分が…

「…え？うえええええええーっ！？」

何だこれは！？とてつもないちんまり度だ！！手足は短いし胸もぺったんこになっちゃっている。

「胸は元からでは？」

「う…！？ち、違うもん！！ちよつとはあつたもん！！こ…こんな
にぺったんこじゃないもん！！」

しかし何が起こったのかわからないが、本当にぺったんこ…じゃな
くてちんまりだ。小学生位だろうか？くすん、本当は１８なのに…

「…静草はるか…１８歳」

「どうしたんですか？いきなり自分の名前と年齢など述べて」

とりあえず…どうしよう…

…寒い…

「…母さん…」

私は肌を刺すような寒さに目を覚ました。ゆっくりとしか体が動か
ないが、辺りを見回してみる。

どの位此处に倒れていたのだろう…間接が固まって動かない。

辛うじて首だけは動くようだが、見渡す景色は全く見覚えの無いも
のだ。

「…どう…どう？」

状況が全く掴めない。

自分が何故こんな場所に倒れているのか…

頭に焼き付いて離れないのは闇夜に浮かぶ二つの眼光。

「母さん…どこ？母さん！！」

見渡しても母の姿は無かった。それは当然か…意識が途切れるまで居た、自分の家と此処は全く違う場所だ。季節は冬ではないはずなのに、ここは一面が真っ白な雪景色なのだ。

「うう…母さん…」

現在、独りであることを知った途端、ぽろぽろと涙が溢れてきた。冷たい雪の上に涙が零れ落ちる。風が吹くと、濡れた頬が冷たかった。

声を上げて泣きたかったが、ぐつと堪える。

「・・・泣いてるだけじゃ…ダメだよね」

私はぐしぐしと腕で涙を拭き取ると、立ち上がる。間接はもう問題ないらしい。

何時までも泣いているわけにはいかない。とにかく、動かなければ。

私は深呼吸をすると自分の名前を言ってみる。家柄上、これだけでも自己暗示位にはなるだろう。

「…私は——」

第一話：始まりの月

（海鳴市・公園）

1月1日。闇の書の事件を解決したなのは達は再び訪れた平穏な日々を過ごしていた。今日はフェイト達と一緒に初詣に行く約束である。

「にやはは、嬉しいけど恥ずかしいね、この格好」

『高町なのは』は桃色の振袖を着ていた。神社に着けば目立つことは無いだろうが、街灯の明かりだけが暗闇を照らすこの公園ではなんだか浮いてしまっている気がする。

「よくお似合いですよ。マスター」

首から下げたレイジングハートがなのはの姿を褒める。

「うん。ありがとう、レイジングハート」

なのはは笑顔で応える。

この場所なのはにとってもレイジングハートにとっても思い出の場所だ。

そう、彼女が初めて魔導士となった日。その夜に『ユーノ スクライア』と話した場所。彼女がレイジングハートのマスターになった日の公園である。

「何だか懐かしいね」

「イエスマイマスター」

レイジングハートが肯定の言葉を述べる。

「なのはー!!」

と、金髪でツインテールの少女が手を振りながら遠くから走ってきた。

なのはの大親友で、なのはと同じく魔導士の少女だ。

「あー!! フェイトちゃん!!」

なのはも手を振り返す。

「あけましておめでとう! なのは」

「あけましておめでとう! フェイトちゃん」

新年のお決まりの挨拶。だが、彼女達にとっては初めての挨拶だ。

「・・・くすっ、あははははは!!」

二人は顔を見合わせて笑い合う。何気ない新年の挨拶。だけど大切に、それが出来るということはとても嬉しいことだ。特に彼女達にとってはその嬉しさも一入だろう。

「フェイトちゃん、すっごく振袖似合ってるよ!! 可愛いね!!」

フェイトは黒に金の刺繍が入った振袖を着ていた。彼女のパーソナルカラーである。

「ありがとう…なのはこそ…似合ってるよ？」

フェイトは頬を赤らめる。

「にやはは、お母さんが張り切っちゃって」
苦笑気味なのはにフェイトも同じく苦笑し

「こっちもリンディ提と…リンディさんが…」

「フェイトちゃん、まだ慣れないんだね？」

なのはの言葉にフェイトは小さく頷く。

「うん…まだ、ちょっと…アリサ達、ちょっと遅れるかも、だって」

「うん。こっちにもメール来たよ。メールが来たのがフェイトちゃんが来るちよつと前だから、もうそろそろ来るんじゃないかな？」

く海鳴市・市街く

「はへへ、お正月なんだ」

街には様々なお店が立ち並んでいた。

今はその殆どが休業の貼り紙を貼って、シャッターを閉めている。

「元旦のようですね。振袖を着た方が沢山ですし」

アストラディアの言葉を受けて『静草はるか』は改めて街並みを眺めてみる。と、確かに街を歩いている人達はお正月の衣装を纏った者が大半だった。

「…にしてもいきなりお正月って…」

目が覚めて一番始めにびっくりしたのは自分の姿。次にびっくりしたのはその景色だ。意識を失うまでは雪なんて一つも振ってなかったのに、目が覚めたら雪が降ってるところか辺り一面が銀世界だったのである。

とりあえず辺りを散策して見たはるかだったが、わかったことは此処が日本であることと、鳴海市という所だということと、そんな街は自分の知ってる日本には存在しないということだった。

詰まる所…

「それにしても異世界へ転移…私も来るとこまで来たなあ…ぶっ飛び過ぎてていまいち実感湧かないけど…」

誘拐されとかは経験済みだが転移は初めてなはるかちゃんである。

「だから、現実逃避は止めましょうよ。マスター？事態の深刻さがわかっているんですか？」

なんとなくアストラディアが溜め息を付いているんじゃないかと感じるはるかだが

「いくら私でもそれ位わかってるよ？書類は無くしちゃうし、ちなみにしちゃうし…胸はぺったんこになっちゃうし…」

一見ボケに聞こえなくもないが、静草はるかがどんな人間なのかをよく知るアストラディアにはこの言葉が『大真面目であること』は容易に推測できた。

そう、彼女は『残念な位の天然さん』なのだ。

「帰った後のこと考えてどうするんですか！！あと、最後のは元からです」

「あうー！…！？ごめんなさい…」

しっかり者のアストラディアには頭が上がらないはるかちゃんのだ。

と、突然はるかのお腹が鳴った。

「はわっ！？ううっ…」

途端に赤面してはるかは両手で顔を覆う。

「お腹が空いたんですか？まあ辺りを調べている内に日が変わってしまったみたいですね」

「アストは聖霊だからお腹空かないもんね…」

「…聖霊？私、デバイスですけど…？」

若干の沈黙。その後、アストラディアから不思議な返答が帰ってくる。

「・・・デバイスって何？アストは聖霊じゃ・・・」

「はっ！？そうでした！！聖霊でした！！・・・何てこと・・・私先程まで自分が聖霊であることを忘れていました・・・」

アストラディアの焦り様にはるか戸惑いながらも口を開く。

「そ・・・そうだよね・・・それで・・・デバイスって・・・？」

「・・・この世界に来て私が変質したモノの名称のようです・・・若干姿が変わっていたのを覚えていますか？」

はるかは頷き、答える。

「うん。大まかな所は変わらないけど、デザインは少し違ってたよね。あと、いつの間にかポケットに入ってたこれ・・・」

はるかはポケットから金属の塊を二つ程取り出す。円筒形のそれは長めの銃弾のようなものだ。

「カートリッジですね。魔力を込めてデバイスにセットするものです」

はるかは訝しげに首から下げたアストラディアを見る。

「何だか・・・色々知ってるね・・・アスト？」

「自動的に入って来ているようです。ある程度の知識ならインストール出来るかと」

それを聞いたはるかにはっこりと満面の笑みを浮かべる。

「なーんだ！！割と大丈夫そうだね！！」

「樂觀視しすぎですよ？マスター。この世界についてはもっと調べてみないと」

「あ…そっか…」

アストラディアの言葉にしゅんとするはるか。本当素直だなあと改めてアストラディアは実感させられる。

「…とりあえずあのお寺に行ってみるかな？」

「寺…？何故ですか？」

あからさまな疑問を投げかけて来るアストラディアにはるかは自信なさげに答える。

「…初祈願とか…無事に帰れますように…って」

「神頼み…信憑性の無い話ですね」

聖霊には言われたくない台詞だ。

「こ…こついうのは心の持ちようなの…！とにかく願うの…！」

あからさまな不安を感じながら、はるかは神社へ向かって行くのだ
った。

第二話：腹ぺこ少女（前書き）

仕事のため昨日は書けませんでした… 申し訳ありません…

仕事の日はなかなか更新出来ないかと思っています。

こんな私ですがこれからもよろしくお願いします!!

第二話：腹ぺこ少女

「八神はやて宅」

『八神はやて』は自宅にて、初詣の準備をしていた。もう直ぐなのは達が迎えに来ることになっている。

「えへへ〜楽しみやなあ〜」

「主はやて、そろそろお時間です。準備は整っていますか？」

部屋の扉を開けてシグナムが入ってきた。シグナムの出で立ち普段着に何時ものダウンジャケットというものだ。

「ちょっと待ってシグナム、振袖の着付けって思ったより難しいの〜!〜!」

はやての着付けを行うシャルが相当焦った声を上げる。

「なんや、シグナムもおめかししたらええのに」

「いえ…私は…遠慮しておきます。それに今からではとても間に合いませんから」

「む〜…それにシャルも…勿体無いよ?」

「私ははやてちゃんを抱っこしますし…それにシグナムも。だから動きやすい格好の方が良いと思ったの。ね…?シグナム」

シャマルのウィンクにシグナムが応じ

「シャマルの言う通りです。もしも我らが躓いたりでもしたら、主がお怪我をしてしまいます」

苦笑しながら弁明するシグナムだったが

「そっかあ。私に気を遣ってくれてたんやな。二人共、ありがとうな？」

内心、ホッと胸を撫で下ろす守護騎士二名。ただ、言っていることには嘘偽りは無いわけだが。

「はやて！！準備出来た？」

と、リビングの方から赤い振袖を着たヴィータが駆けてきた。

同じ守護騎士でも此方は此方でノリノリらしい。

「うん、丁度終わったとこ。準備おーけーや」

待ちきれない様子のヴィータにシグナムは呆れたように息を吐く。

「ヴィータ、私達は」

「わかってるよ！！何があってもはやてのことはあたしが守る！！」

ただの初詣で『何があるというのか』と思ってしまふはやてだが、その辺りの知識はヴィータ達は疎いらしい。はやては苦笑しながら、暖かな家族の風景を眺める。そうこうしている内にインターホンが

鳴る。どうやらなのは達が到着したらしい。

「はやてちゃん！お待たせ♪」

「なのはちゃんや!!は、はい今開けます」

海鳴市・神社

元旦の神社は人で埋め尽くされていた。初詣ともなると、これだけ人が集まるらしい。

[illegible]

「しょうがないよアリサちゃん。お正月だもん」

騒ぎ始めたアリサをすずかが宥める。

「確かに……仰山おるなあ」

「鈴を鳴らしに行くだけで埋もれちゃいそうだね……」

「じゃははは…」

圧巻されるのは、フェイト、はやてだったが、はやての傍らに居たヴィータが一言。

「よし、ここは鉄槌の騎士に任せとけ!!」

「ヴィーちゃん!？」

「ダメだよ！！ヴィータ！！」

「あかんよ！！ヴィータ！！」

即座に止めに入る三人。

「…まだ何をするかも言つてねーのに！？てか、その二人はどうせあたしがちつさいから簡単に人の波に飲まれるから危険だとも良いたいんだろ！？バカにすんなーっ！！」

「う…！？」

どうやら図星だったらしい。ただ、はやてが『私もそうやったんやけど…教えん方がええかな？』と呟いたのだが幸いにもヴィータには聞こえなかったようだ。

「チックショーっ！！」とヴィータの怒号が木霊する。

「落ちて着けヴィータ…辛いだろっがこればかりはな…」

「大丈夫よヴィータちゃん！！ヴィータちゃんにだって魅力はいっぱいあるわ！！」

「あかん！！何時の間にか話題が『ヴィータの尊厳』になつてもうてる！？」

わいわいがやがやと騒ぐ一行。アリサとすすかだけが啞然としている。

「鉄槌の騎士と鉄の伯爵をナメんなあゝっ!!」

・・・20分後。

「ぜー…はー…ぜー…はー…ど、どうってことねーな!」

肩で息をするヴィータ。実際には人の波に流されまくりだったのは言うまでもない。

「ヴィータちゃん…待ってれば順番回って来たのに…」

「え!?!早い者勝ちじゃないのか!?!」

「まあまあ…こうして私達の番になったんだし、お祈りして行こ?」

「テストロッサの言う通りだ。何やら元旦とは目出度きことらしい、ならばここは淑やかに新年祈願をするべきだろう。我ら守護騎士も例外ではない」

武人シグナムは両目を閉じ、ヴィータを諭す。ヴィータも烈火の将の言葉には流石に堪えたようで

「…わかったよ。はやてに嫌われたくないし…」

何かが違う気がしないでもないのだがこの際丸く収まるなら何でも良い。

なのは達は鈴を鳴らして新年祈願を始めることにする。

「ほんなら頑張ってくれたからヴィータからなんてどうや?」

「え…?」

キョトンとするヴィータ。なのは達もはやての言葉に頷き

「うん!」

「そうだね。ヴィータが一番乗りだ」

「さてさて? ヴィータは何をお祈りするんやろうなあ?」

「あ…うん…あたしは」

「にやはは…見事に被ったねえ?」

「でも一番の願いって言ったらみんな同じだよ?」

「せやな。やっぱりみんな一緒が一番や」

ヴィータを始め、なのは達の願いは皆、『これからもみんな一緒に居られますように』だった。皆が同じ願いを持っていたと思うと何だか嬉しく感じるなのは達だ。

「私はてっきりシグナムなら『今年こそテストロッサとの決着を』位言うと思うとったんやけどなー?」

茶化すようにモノマネをしたはやてだったが、思いの他食いつきが良かったらしく

「なっ！？あ、主！？」

珍しくシグナムがうろたえていた。

「あははっ似てる似てるはやてちゃん！！」

シグナムは笑っているシャルルの肩を背後からがっしりと掴み

「…似てるのか？シャルル」

「ひゃあっ！？」

そんなやり取りも以前は見られなかったものである。

なのは達が和やかに談笑していると、フェレットと子犬が二匹、石段を登って走ってきた。

即ち、フェレットが『ユーノ スクライア』、子犬二匹が『アルフ』に『ザファイラ』である。

また、ユーノは実は人間、アルフはフェイトの使い魔、ザファイラは盾の守護獣と三匹もとい一人と二匹にはそれぞれ秘密があるのだ。

『なのはー！！』

『フェイトー！！』

因みにこの声はアリサとすずかには聞こえていない。魔法による通信なのだ。なのはに駆け寄っていくユーノだったが、途中でアリサに抱きかかえられる。

「ユーノ……！なのはを追って来るなんて偉いぞ」

「キューー！？キューー！！キュキューっ！？」

ユーノに頼ずりをするアリサ。明らかに助けを求めているユーノだが、まあ何時ものことなので、なのはもフェイトも苦笑いするしかない。

『にやはは……一応説明はしたはずなんだけど……』

『頑張つてね。ユーノ』

アルフは無事フェイトの所へ到着し、フェイトに抱きかかえられているが、ザフィーラはすずかに捕まったようだ。

ザフィーラからは特に抵抗は見られない。盾の守護獣はどっしりと構えている。

『帰宅までの辛抱だ。ユーノ スクライア』

「きゅっ……」

ガクリと動かなくなるユーノ。ザフィーラの言葉がトドメになったようだ。

「ユーノくん……ん？」

「どうしたの？なのは？」

なのはの視線の先には一人の少女が居た。黒い長髪で可愛い女の子だ。但し

「あの人、なんだかふらふらしてない？」

「うん、確かに…って!？」

次の瞬間、少女は力尽きた。

「倒れちゃったよ!？」

地面に倒れ伏した少女を見て、なのはが叫ぶ。

フェイトは素早く駆け寄り意識の確認を取る。

「大丈夫ですか!?!しっかりして下さい!?!」

「何があつたんや!？」

「シャル!?!」

叫ぶシグナムにシャルは頷き

「治療魔法ね!?!とにかく人目に付かない所で!?!」

きゅるるるる

「・・・ほえ？」

突然の音にぼかんとするなのは。

「…今の音は？」

フェイトも困惑しているようだ。

「…わかった。こいつのお腹の音だ」

ヴィータが少女を指差しながら言う。

なのは、フェイト、はやての三人は顔を見合わせる。

「じゃあ…」

「単に…」

「お腹が減っただけ…？」

きゅるるるる

と、少女がゆつくりと口を開いた。

「…お…お腹が減って…もうダメですう…」

それだけ言うとガクリと意識を無くす少女。

「君っ！？大丈夫なの！？君っ！！」

出会いは…突然訪れるものなのであった。

第二話：腹ぺこ少女（後書き）

いよいよ自分の作ったキャラがストーリーに絡んでくると嬉しい反面緊張もしますね（上手く書けるかなー）

明日も恐らく更新出来ると思います。なるべく早く更新出来るよう、尽力して参ります！！

第三話：新しい友達（前書き）

忘れない内に書いてしまった方が良いでしょうね

と言っことで書きます

第三話：新しい友達

「八神はやて宅」

初詣を終えたなのは達は突然倒れた腹ぺこ少女を放っておくわけにもいかなかったため、少女をはやての家で休ませることにした。

「シャルさん…」

なのははソファーから立ち上がるとはやての私室から出て来たシャルに不安そうに声をかける。横に座っていたフェイトもほぼ同時に立ち上がっていた。

「大丈夫。本当に空腹みたい。それよりも」

柔らかな笑みを見せるシャルだったが、直ぐに真剣な表情になる。

「注目すべきは彼女の魔力資質ね。率直に言って…内包された魔力量は人間の許容出来る量を遥かに超えているわ」

「ふむ…我らが接触した時に感じたものは恐らくそれか…」

シグナムが顎に手を当てて言う。

「魔導士なのか…？」

ヴィータがシャルに問い掛けるがシャルは難しい顔をし

「断定は出来ないけどデバイスらしきものも所持しているみたいね」

「シグナム、ここは」

フェイトの言わんとしている事を悟ったのかシグナムは頷き

「ああ、どちらにせよクロノ執務官に報告すべきだろうな」

「…はれ？私…？」

気が付くとはるかは見知らぬ部屋のベッドに寝ていた。

此処は何処だろう…？確か神社にたどり着いたは良いけど空腹が臨界点突破をした模様で、ぶっ倒れてしまった筈だ。

そういえば女の子が駆け寄ってきて、私に声を掛けていた気もする。視界がぼやけていてよく顔は見えなかったが、金髪でツインテールの子だ。

と、ガチャリと音がし、誰かが部屋に入ってきた。人影は女の子で長いツインテールのようだ。

そうそう、確かこんな感じの…

「・・・へ？」

「・・・あ」

「フェイトちゃん？って目が覚めたの!？」

次いで短いツインテールの女の子も入ってきた。こちらは茶髪で何だかびっくりしたかと思っただけにこっちに駆け寄ってきた。

「あの…私…」

「良かったあー！みんな心配してたんだよ？」

「もう…なのは。びっくりしてるよ？」

「あ…いや…私は…」

はるかが戸惑っていると更に人が入ってきた。なんかもうゾロゾロと。

「おー？起きたんか！！」

「気分はどうですか？」

何時の間にかすごい密集率になっていた。

「起きたならシグナムに感謝しろよ？倒れたお前を此処までずっとおぶって連れてきてくれたんだからな？あとシヤマルにもだ。お前の状態を診てくれてたんだからな」

赤い髪のおさげの女の子がこっちを見て言ってくる。

「はっはい！！えーと…」

「にやはは、後ろで髪を縛っているのがシグナムさんでこっちがシヤマルさんだよ」

私があたふたしていると、私の直ぐ近くに居た女の子が名前を教え
てくれた。

「こつこの度は多大な御迷惑をおかけしてしまつて申し訳ありません
でした！！そして運んで頂いて看病までして頂きありがとうございます
います！！」

ぺこりと頭を下げるはるか。シグナムはあからさまに緊張して固ま
っているはるかの頭にぽんと右手を乗せる。

「改めて、『シグナム』だ。そんなに緊張するな」

「『シヤマル』です。とにかく元気そうで良かったわ」

どうやら優しい人達らしい。はるかはホッと胸を撫で下ろす。

「私は『高町　なのは』なのはだよ！！」

「私は『フェイト　テストロッサ』突然君が倒れた時は本当にびっ
くりしたんだよ？」

「『八神はやて』です、よろしくな？」

「あたしは『ヴィータ』だ。まあ無事で良かった」

全員から自己紹介される。はっ！？私まだ自分の名前言っていない！？

「私は『静草　はるか』です。改めて助けて頂きありがとうございます
ました！！」

「宜しくね!!はるかちゃん」

なのはがにつこりと微笑みながら手を差し出してくる。握手ということだろう。フェイトもなのはの横に並ぶと同じく握手を求めてきた。

「宜しく。はるか」

私は両手で二人と同時に握手をする。

「はい!!こちらこそ宜しくお願いします!!」

私は、どうやら人当たりだけは良いらしい。

と、シグナムさんが私の胸元を指差している。はて?何だろう?

「…一つ聞くが…それは君のデバイスか?」

「ではいす?」

私が首を傾げてそう言つと、場が沈黙した。あれ?私何かいけないこと言っちゃった?

「お前、管理局の魔導士じゃないのか?」

ヴィータがはるかに問い掛けてくる。が

「かんりきよく?まどうし?あの…何ですか?それ?魔術師なら知ってますけど…」

私が答えるとまた沈黙。

「まさか…なのはみたいなタイプ…？」

フェイトが話しかけてくる。

「管理局じゃないなら何でデバイスを持ってた？お前のそれ、どう見てもデバイスだろ？」

ヴィータも私の胸元を指差して問い掛けてくる。胸元…ひょっとして？

「それ…ってこの首から下げてるこれのことですか？これはアストラディアと言って…えーと…なんて説明したら良いのかな…」はるかにはしばらく考え込んでいたのだが

「アストラディア、お願い」

「ダメマスター」

「…何か仰いましたか？アストラディアさん？」

「いえ、何も。はじめまして皆さん、私はマスターのデバイス、アストラディアと言います」

その言葉に誰よりも驚いたのははるかで

「デバイスって…アストは聖れ」

「この世界ではデバイスだと言ったではないですか。ヘボマスター」

「む？…この世界？静草は転移してきたのか？」

アストラディアに言いたい放題言われているが…それは置いて

「…多分…そうですね…気が付いたらこの世界に…」

「転移位なら時空管理局ならなんとかなるんじゃないの？シグナム」
ヴィータにそう言われたシグナムだが

「さて…な。軽率には考えられないのは確かだが」

「その通りだ。いくら時空管理局と言ってもそう易々と個人の居る時空を発見出来る程万能じゃない」

話をしていると深い青色の髪の少年が部屋に入ってきた。

「時空管理局の『クロノ ハラオウン』だ。詳しく話を聞かせてもらいたい。まずはアースラに…」

ぐ

「ひゃっ！？」

「にやはは…そういえばはるかちゃんお腹空いてたんだよね…？」

はるか は赤面しながらこくりと頷く。

「…軽食位なら用意しよう。エイミィ、管理局のデータベース

を調べておいてくれ」

「はいはい。任せといてよー!!」

「私達も行くよ、クロノ」

「ああ。君達にも聞いてもらいたいと思っていた所だ」

何だかどんどん話が進んでるけど…と言うか話についていけないし…それより

「あの…アースラって…?」

第三話：新しい友達（後書き）

だんだんと動いてきました。これからどうなっていくのか自分でも楽しみです

次はもう一人の登場かな…

第四話：アースラにて（前書き）

デバイスの方の台詞もわかるものは英語で書いてみようと思います。

それではつたない文章ですが、第四話をお楽しみ下さい。

第四話：アースラにて

く日本海上空く

「この辺りですか？例のロストロギアが来るポイントとは」

元旦の夜空には時空管理局の空戦魔導士部隊の姿があった。

「らしいな。何とか先回りが出来たようだが…」

「それにしても、あのロストロギアが起動することはないって話でしたけど…？」

魔導士の青年は隊長である中年の男に訪ねる。

「極めて低かったただけだ。今日位はのんびり出来る筈だったんだけどよ…」

彼らは管理局の中でも精鋭部隊に当たる。ロストロギアの回収にはそれなりに力のある部隊が選ばれるらしい。

「隊長は日本出身でしたよね…」

隊長はどうやら家族と過ごす予定も立てていたらしい。

「…余計なことは忘れる。相手が何者かは知らんが仲間が数人、撃退されているんだぞ」

青年からは返答が無い。全く、返答はしっかりしろと教えた筈だが。

「おい？聞いてるのか？」

「…隊長、この辺りって封鎖した筈ですよね…？」

「ああ。ってまさか！？」

青年の持っている探知ツールには確かな反応があった。つまりは…

「ビンゴか！！よし、直ぐに向か」

その時、風を斬る音が聞こえた。

素早く振り向くと、そこには小さな女の子が居た。歳の頃にして小学生位の。

静寂の中で少女は言葉を紡ぐ。

「…時空管理局…」

直後、少女のヘアピンが眩い輝きを放つ。

「っ！？まさかそれがロス」

「…セット…アップ…」

「The・Active（起動）」

「アースラ」

静草 はるかが案内されたのは巨大な船の中だった。どうやら此処がアースラらしい。先導するクロノが此方に振り返る。

「そういえば君の名前を聞いていなかったな」

「あ…『静草 はるか』です」

はるかはぺこりと会釈をするにつこりと笑う。

「ふむ。はるか、一応聞くが…君は本当に魔導士ではないんだな？」

「あ、はい」

クロノの問い掛けにはるかは答える。クロノは「そうか」と一言だけ言うともた歩き出す。ただちよつと赤くなっていた気がするが何故だろうか？

「天然で笑顔を振りまくタイプだな。こいつ」

「ヴィータちゃん！！ダメだよそんなこと言ったら！！」

「…天然じゃねーけどお前に言われてもな」

「ええっ！？」

割とショックを受けるなのは。フェイトがなのはの肩にポンと手を置く。

「相変わらずだな…君達は」

クロノは呆れたように言うと軽く咳払いをする。

「失礼します。艦長、静草はるかをお連れして参りました」

「どうぞ。入って下さい」

「失礼します」

「し、失礼します!!」

艦長らしき女性の声がし、自動扉が開いた。

くアースラ・艦長室く

艦長室に入ると、何故か畳が敷かれていた。畳の上にはお茶が用意されており、女性がお茶を立てている。

「あらあら。今日はまた一層大人数ね？はじめまして静草はるかさん。アースラの艦長の『リンディ ハラオウン』です」

リンディ艦長の挨拶を受けて私も慌てて挨拶をする。

「あっはじめまして!! 静草はりゅ!?」

慌てすぎて舌を噛んだ。私を見てリンディ艦長が『くすつ』と笑う。

うつ…恥ずかしい…

「ごめんなさい。笑ってしまっ」

「いえ…お見苦しい所をお見せしました…」

痛みに堪えながら私は答える。リンディ艦長はにっこりと微笑むと

「まあそんなに緊張なさらずに、とりあえず座ってお茶などいかがですか？」

私は言われるままに座る。と、座った所であることに気付いた。

「あれ？ハラオウン…？って」

私はクロノさんの顔を見る。クロノさんは私の言わんとしていることがわかったようで何も言わずに頷く。

「く…クロノさんのお姉様ですか！？」

瞬間、がっくりと体勢を崩すクロノさん。あれ？

「あら嬉しいわ」でもね、はるかさん」

「母さんだ…僕の」

「え？…ええーっ！？」

私は思わず声を上げる。

「ヴィータ…」

「だ、だってよーシグナムぶくす」

ヴィータちゃんが必死に笑いを堪えている。は、恥ずかしい!! 今日
の私すつごく恥ずかしいよ!?

「ご…ごめんなさい…私…やっぱり今日は出直し」

立ち上がるうとする私をリンディ艦長が止める。

「大丈夫よ。はるかさん。よく間違えられるから」

「艦長…」

クロノさんがリンディ艦長を白い目で見ていた。

「なんてね?冗談よ冗談」

「冗談!?じゃあやっぱり気にして!?やっぱり私」

「あ!!そっちじゃなくてね!?!」

「あはははははははっ!!もうダメだ堪えらんねーっ!!」

「ヴィータ…!!笑ったらかん…よ!!」

そう言うはやてだが、彼女も彼女で笑いを堪えている。ヴィータに
至っては最早転げ回っていた。

「と…とりあえずお茶でも飲んで落ち着いて。ね?」

リンディ艦長が私の前にお茶を置く。

「…頂きます…」

リンディ艦長は慣れた手付きでお茶を立てる、と

「っ！？」

え？え？これは一体…？角砂糖！？あつ入れた！？え！？二個！？いや三個！！三個だ！！そしてトドメと言わんばかりにミルクを大量に！！

彼女はそれを口へと運ぶ。そして…飲む。

「…あれは初めて見た時にはびっくりするよね」

「うん…衝撃的だった…」

なのはとフェイトがひそひそ話をする。

リンディ艦長は『ふう』と一息付くと私の顔をじつと見据える。

「さて？そろそろお話、聞かせて頂けるかしら？」

「あ…はい…」

私はこれまでの経緯を全て話すことにした。アストラディアには頼らず。

きつとこの人達なら信用出来ると思う。

この先に何が待っているのか正直不安だけど…

く日本海海上く

「…お疲れ様、どうだったかな…？私」

「That's Very good My Master（上出来ですよ。マスター）」

私の周りには人が数名浮かんでいた。一月の海は急激に体温を奪うから、そのままにして置くと死んでしまうかもしれない。

「…先に仕掛けてきたのはこの人達だし…」

少し前から私はこのような人達から追われている。時空管理局とかいう所の魔導士という人達らしい。

厳密には追われているのは彼らがロストログアと呼ぶこの子なのだが。

「こつちも問題ないみたい。この人達の仲間が来る前に此処から離脱しないとね…」

「Yes My Master（はい、マスター）」

「…大丈夫…君は私が守るよ…壊させもしない…私はもう二度と…奪わせはしない…」

もう絶対に失いたくないから…

第四話：アースラにて（後書き）

遂に二人目の登場です。

はるかの方も大分キャラが出せてきました。早とちりに天然発言、なのは達と絡むのも新鮮ですね。

相変わらずな私の作品ですが良かったら次回もお付き合いして頂けると嬉しいです。

では。

第五話：戦火再び（前書き）

バリアジャケットの説明は難しいですねー
…

第五話：戦火再び

「アースラ・艦長室」

「成る程…あなたのことは大体わかったわ」

私はこれまでのことを全て説明した。

この世界の人間ではないこと。

仕事中に眩い光に包まれて、気が付いたらこの世界に居たこと。

元の世界でも魔法やら異能の力には触れていたこと。

アストラディアは聖霊というもので本来はデバイスというものではなく、この世界に來た時に変質したらしいこと。

それらの事を粗方話し終えると私は冷めてしまっていたお茶を一口啜る。

「はるかちゃんのお仕事ってお手伝いみたいなことかな？」

「え？…一応そんな感じ…かな」

まああながち間違っていないわけだし。因みに私は未だ、本来の歳を言い出せずにいた。此処は何だか若々しい子ばかりで何だか言いづらい…まあ良いよね？ たった九歳位…

人生という長い道のりの中なら たった九年など差にもならない…は

ず。

「私もよくお手伝いしてるんだよ？私のお父さんとお母さんは翠屋
っていうお店をやってるの。ケーキもとっても美味しいんだよ！！」

なのはちゃんが嬉しそうに言う。ケーキ…うつ、そう言えばまだ何
も食べてない。

「ケーキ…是非行ってみたいです！！」

「大歓迎だよ！！」

「…盛り上がっている所すまないが…話を進めても良いか？」

咳払いをしてクロノさんが話しかけてくる。あ、そういえば話の途
中だった。

「ごめんなさい…それで…えーと…何でしたっけ？」

「君の措置についてだ。とりあえず暫くの間は元の世界に戻るのは
難しいだろうしね」

クロノさんの言葉にリンディ艦長も頷く。

「私達としてもあなたの意思を尊重したいの。はるかさんは…」

次の瞬間、けたたましい音が鳴り響いた。

「ごっごめんなさい！！まさかこんなすごい音が出るなんて…」

私の言葉を即座にクロノさんが否定する。

「これは警報だ！！緊急事態ってことだよ！！」

『クロノくん！！大変だよ！！』

モニターに女性の姿が映る。オペレーターだろうか？

「エイミィさん！！状況の報告を！！」

リンディ艦長が立ち上がり、モニターに近寄っていく。

『例のロストロギアを回収に行った空戦魔導士部隊が全滅しました！！場所は日本海です！！』

その言葉を受けてエイミィと呼ばれたオペレーターさんに向かってクロノさんが叫ぶ。

「全滅！？あの部隊にはA Aランク魔導士だって所属していた筈だろ！？確か部隊長は」

『確かにA Aランク…でも全滅は事実なの！！幸い…発見が早かったから命には別状ないみたいだけど…』

「単体で魔導士部隊を殲滅出来る程の者…推定A A A以上か…魔力資質も相当の者だろう…」

『それも…ロストロギアの力を差し引いて…だよな…間違いなく…！！』

エイミイさんの言葉になのはちゃんが反応する。

「どうして言い切れるんですか!？」

それに答えたのはクロノさんだった。

「そのロストロギアの特性だよ…件のロストロギアは、全く魔力を持たないんだ」

「魔力を持たないのに…ロストロギアなの？」

「ああ。厳密には起動するまでは『最も安全なロストロギア』ということになる。名称は『エイジ・コクーン』…遙かなる世代を超えて尚且つ繭の形状を保つ、超古代文明の遺産さ。ただ、エイジ・コクーンにはある伝承が存在する。起動する確率は1%にも満たない代物だが、こいつは特定の魔力を注ぎ込むことで起動する。そして起動に伴い名称も変化する…名は『アカシック・レコード』」

クロノさんの言葉にフェイトちゃんが反応を示す。

「聞いたことがある…『アカシック・レコード』…根源の渦…人類の経験や宇宙の歴史…それら全てを記録する概念のこと…魔力を持たないのは…質量を持たないと言われているからだね？クロノ」

「ああ。その名を冠する程のロストロギアと言うわけなんだが…先程も言った通り起動するはずも無い…とすら言える物だ。途方もない確率だからね…だが、現に起動しているんだ…」

〈アースラ・通路〉

「さっきのロストロギア…全部がわかるってこと？未来も？」

なのはさんが走りながらクロノさんに問いかける。私達は今、アー
スラの艦船室に向かって走っていた。

なのはちゃんの言葉にクロノさんが頷く。

「そう言った力はあるはずだろうね」

「…でもそれっておかしいよ。だったら管理局の魔導士さん達が来
ることもわかっていたはずでしょ？わざわざ戦う必要は無いんじゃない
？」

「…確かに…情報から察すると戦闘は避ける筈だ。管理局の魔導士
が直接狙われたわけでは無い…追ってきたから応戦した…と考える
のが妥当だな」

シグナムさんが見解を述べる。

「誰もが君達のように穏和な考えを持っているわけではない。勝て
ることもわかっていたとすれば、向こうも先に手を打つはずだ」

「クロノ、でもそれなら…自分の身を守るために次々と魔導士を殲
滅していくと思うよ？何処にいるのかだってわかるはずなもの」

フェイトちゃんがクロノさんの意見に言及する。

「…仮に相手がロストロギアを悪用しようとしている者だとすれば
…何れ自分に害を及ぼすであろう我らの存在は邪魔なだけだ。寧ろ

撃退だけで済んでいることが可笑しいのでは？」

「うん。予め全部やっちまう方が手っ取り早いもんな。どうせ負けないってわかってるなら」

ヴィータちゃんがシグナムさんの意見に同意する。ああ、私完全に茅の外だ。

『アカシック・レコードの持ち主は未だ自発的には仕掛けて来ない…必ずウチの魔導士が追ってきってから戦闘してる…それって…つまりは…』

艦船室に入った所でクロノさんが言う。

「…アカシック・レコードの起動は不完全であり…何らかの問題が発生した…という可能性がある…？」

「頭堅いなー。要はそいつは何も予知出来てないかも知れないってことだろ？まあ予知出来てて今の状況ならそいつはよっぽどのバカだろうけどな」

ヴィータちゃんの意見を聞いて私もなんとなく状況が理解できた。

「…あの…私が口を挟むべきではないことだってことはわかっているんですけど…そのロストロギアって…？」

「ロストロギア。過去に何らかの誘因で消失した世界、または滅んだ古代文明の遺産のことだよ。その多くは現在の技術じゃ到達出来ないとても高度な技術で作られていて…使い方次第では世界…うっん、全次元すら滅ぼしかねない危険なものもあるんだ」

フェイトちゃんがりやすく説明してくれた。

「それを確保、管理することが僕達時空管理局の任務の一つでもあるんだ」

クロノさんも説明してくれた。部外者の私でもこれなら理解できる。

「全次元…それってまさか!？」

「…無論、君の居た次元も例外ではない…」

クロノさんの言葉に私は愕然とする。体が震え出す。私は震える唇で声を絞り出した。

「…その…アカシックなんとかっていうものの危険性は…?」

「…極めて高いよ…悪用されたら世界の…次元のバランスを丸ごと崩しかねない…間違いなく…終わりだ。何もかもね…」

クロノさんの言葉に私は声を失いかけるが、何とか堪える。

みんなが消える…?当然だ。全てが消えるんだから…

「…悪用するとすれば人格破綻者つてところですね…破滅願望の」

「割と察しが良いんだな?お前」

ヴィータちゃんに関心したように私に言ってくる。

「エイミィ、詳しいことがわかり次第」

「ちょっと待つて！？追撃した空戦魔導士部隊が交戦中！？」

「何ですつて！？エイミィさん！！被害状況は！？」

リンディ艦長が声を荒げる。

「被害状況…深刻です！！次々と撃墜されています！！」

「そんな！？このままじゃ…クロノくん！！」

「クロノ！！」

「クロノくん！！」

なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんの三人がクロノさんに詰め寄る。

「君達の気持ちはわかる…がダメだ…出撃の許可が下りていない…敵の能力が未知数すぎる…」

「そんな…見てるだけしかないなんて…」

なのはちゃんが顔を曇らせる。

「でもそれじゃあ…」

「何も変わらへんやないか！！」

フェイトちゃんもはやてちゃんも悔しさを抑えきれていない。それはそうだと思う。

「・・・そうですね、何も変わりません…!!」

私は意を決すると立ち上がる。皆さんは勿論啞然としていた。でも時間が無い。

「アスト、ゲート開いて」

「All right My Master（了解です、マスター）」

私の言葉にクロノさんがやっと我に返り、私を止めに入る。

「何処へ行く気だ！？まさかあの場所に行く」

「どいて下さい。管理局が動けないなら私が行きます。私は民間人ですからそっちにも止める権利はないはずです」

「はるかちゃん!？」

「はるか!？」

「はるかちゃん!？」

なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃんも私の行動に驚きを隠せないようだ。でも待つてなんていられない。

「…皆さん、とても困っているみたいなんで…放っておけないです。」

困っている人を助けるのに理由なんて必要ないですよ」

「だが…!!」

クロノさんは尚も私を止める気でない。まあ危険なのは確かなのだし、それは当然か。

「もう一度言います。どいて貰えますか…？クロノさん…!!」

「っ!？」

クロノさんが一瞬怯んだ。私はその隙を逃さない。素早くゲートにくぐるため走り出す。

「（止む終えないか!!ストラグルバインド!!）」

クロノは言葉には出さずにバインドを放つ、が

バインドは何も無い空間を捕らえたただだった。

「なっ!?!避けただと!?!」

驚愕しているクロノさんだが説明している時間はない。

私はゲートへ飛び込むと光に包まれていった。

何だ今のは？

僕はたった今まで此処にいた少女に対して驚きを隠せなかった。

バインドを知らない者が、言葉に出さずに放ったストラグルバインドを避ける？そんな事が可能だとすればそれは相当の…

「クロノくん！！」

なのはが僕に向かって駆けてくる。彼女は僕の側まで来ると「大丈夫？」と声を掛けてくれた。

「ああ…だが…今は…？」

それにあの時、僕が感じた悪寒は一体…？

「彼女は…静草はるかは何者なんだ…？」

（鳴海市・上空）

「…そう簡単には引き下がってくれないみたいだね…」

少女は時空管理局の空戦魔導士部隊と交戦していた。タイミングからしても先刻の部隊の増援と考えるのが妥当だろうと、彼女は奥歯を噛み締める。

「（どうして…放っておいてくれないのかな…）」

彼等がロストログアと呼ぶこの子…危険だっていうけどこの子が何をしたって言うんだ。何も知らないくせに身勝手過ぎる…

前衛は粗方倒したみたいだけど、後衛の魔導士が何やら連絡を取っ

ていた。どうやら仲間と繋がっているらしい。

「埒が空かない…纏めて潰すよ？君」

「All right My Master（了解しました。マスター）」

少女は魔法陣を展開する。

「穿て…虚無の雷…！！アカシック」

「Ultima・blast」

少女が攻撃を放つ前に黒い閃光が空から放たれる。夜空でもはつきりとわかる黒い魔力砲が。

「っ！？君っ！！」

「Aegis」

黒い魔力砲を防御魔法が防ぐ。かなりの威力だったらしく、震動が直に伝わった。

眩い光が消え去ると…少女の目の前には――

静草はるかには戦場の夜空にいた。先程放った一撃の感触から考えて、どうやら力に衰えは無さそうだが。

「…っごめんなさい！！調整が難しくて…！！」

正直、衰えが無いどころか予想以上の威力だった。どうしよう…無事かな…

眩しい程の光が消え去ると、そこには少女が佇んでいた。無事どころか傷一つ見当たらない。

「良かった…無事だね」

「あなた何…？管理局…？」

少女が私に問いかけてくる。白い髪の女の子だった。髪は一見ショートカットに見えるが、よく見ると後ろで束ねてある。やや下の辺りで灰色のリボンで束ねてあり、それが夜空に揺れていた。服装は…

「そ…その露出度はどうかと…！？」

少女の服装はとても露出度の高いものだった。頭には羽飾りが付いたカチューシャを付け、へその辺りまでの長さのジャケットに、胸からへその上までを覆う灰色の布。その上から更に両胸の上から交差させるようにベルトを締めている。両肩は完全に露出しており、二の腕辺りで鎖が伸びたベルトを締め、鎖を両腕に巻きつけていた。鎖の先端は腕首を覆う黒い手錠のようなものに繋がれている。下半身は灰色のミニスカートを穿いており、その周りにベルトを通して固定していた。腰の辺りからは翼のようなものが伸びていて、それが腰の両側面から膝の少し下位までを覆うように添えられていた。とは言え、後ろにマウントするようになっていくらしく、さらには透けてしまっていた。両足には側面から翼のようなパーツが伸びた靴を履いている。きれいな灰色の瞳。それでいて虚ろな目をしている。

「えーと…胸とか苦しくないの…？」

「…何なのあなた…？管理局とはまるで雰囲気が違うけど…」

少女はギュツと締め付けられた自分の胸を見ることすらなく、私に敵意の視線を向ける。まあそこまで無いが。見た目は今の私と変わらない位だし。

「私、管理局じゃないですから。ただの一般人です」「…要は一般協力者ね…」

「はい。出来れば穏便に済ませたいんですが…って！？」

「Vanity・Lancer」

突如として少女の背後の空間が裂け、無数の槍が私に向かって放たれる。

直撃コース！？まずっ！？

はるか全身に槍が襲い掛かる。無論彼女は一瞬で埋もれてしまった。その姿はまるで針の筵のようだ。とても生きているとは思えないのだが

「全く…危ないじゃないですか…？不意打ちなんて」

次の瞬間、声が響いた。それは紛れも無くはるかの声である。

「System All Green Barrier Jack

e t S e t U P : C o m p l e t e

突き刺さった槍が四方へと散らばり、消し飛ぶ。

次いで白いバリアジャケットを纏う少女が現れる。即ちそれは…

「…白々しいよ…それ。どうせ生きてるのはわかってる」

「そうですか？まあいいや…これで対等ですし」

はるかのかの姿は白を基調としたバリアジャケットだ。ジャケットの胸元には青いクリスタルが埋め込まれており、タイプは長袖。両肩には蝶のようなデザインの金の刺繍が施され、腕首の部分は同じくクリスタルが埋め込まれたパーツで覆われている。ロングスカートの側面はバツサリと切られたような形状で、そのままでは露出してしまふ両太股は、腰当てに取り付けられた黒いカバーで隠すように上から覆われていた。ロングスカートの形状は更に特殊で、スカート自体が独立した三つのパーツを組み合わせて形成されており、側面に二枚、正面に一枚がそれぞれ腰当てで取り付けられている。正面の布には大きな十字架が装飾されていた。それぞれの布の縁には肩と同じく金色の刺繍が施されており、スカートの後ろ部分は二枚を重ねるように留められている。ブーツにも同じく刺繍が入っていた。

「…厄介だし…ここで潰すかな…あなたは」

少女は冷たい声で言い放つ。

「そんな目で睨まれても…」

『静草はるか、聞こえるか！！』

と、突然私の頭の中に声が響いた。この声は…

「クロノさん!？」

声の主は『クロノ ハラオウン』だった。

『今すぐ戻ってくるんだ!! 初めに撃退された魔導士の一団から話を聞き出すことが出来た!! そいつとは戦ってはいけない!!』

第五話：戦火再び（後書き）

途中ですが切り。ただ、直ぐに続き書くので、早めに更新予定です

第六話：ユーノの災難（前書き）

今回はロストログアの能力の判明とユーノくん可哀想。

そんな話です

第六話：ユーノの災難

クロノさんの声は危機迫っていた。どうやら余程重大なことらしい。

「離脱しろってことですか!？」

「させない……!!」

『油断するな!!はるか!!』

「えっ!?!しまっ……!?!」

通信に氣を取られていた私は相手の接近に気付くのが遅れてしまった。咄嗟に後退するが、尚も少女は踏み込んでくる。

早く防御魔法を展開させなきゃ!!

「アストラディア!!」

咄嗟に叫ぶが、既に相手は私の懷に潜り込んでいる。

こんな至近距離で撃ち込まれたら……!?!?

「座標!!アースラ艦内!!転送!!」

その時、近くで誰かの声が聞こえた。

それが誰なのかを確認する前に私は眩い光に包まれる。懷まで迫っ

ていた少女はそれに気付くと直ぐさま飛び退いた。

勿論なのは達はその声の主に気付いている。

『ユーノくん!!』

『ユーノ!!』

『ユーノくんか!!』

「うん!!クロノがゲートを繋げてくれたんだ!!僕も直ぐにそっちに行く!!」

ユーノは夜空を見上げるが

「さっきの子…逃げたのか…?」

件の少女の姿は既にそこには無かった。

厄介なのを逃した。あの少女は此处で潰しておきたかったのに。

他の人達だけでも落としておくべきだったかな。でも長居はしたくなかったし。

追われる身なのだから戦闘はしないにこしたことはない。

「Master?」

「平気。少し指の間が裂けただけ…」

あの少女はどうやら私が無傷だと思っていたようだが、初めの魔力砲撃で私は僅かなダメージを負っていた。防御魔法を展開していながら、あの一撃は私の右手に確かな傷痕を残していたのだ。

正直、デタラメな破壊力だと思う。今までの相手とは格が違っていた。違っていたと言えば雰囲気もだが。「民間協力者か…あの子の他にもいるのかな…」

「I don't know it. Bat…」

「そうだね…どっちにしても私のやることは変わらない…君を守る。君が私の命を救ってくれたように…」

だって、大切な…家族なんだから…

「アースラ」

「もっ申し訳ありませんでした!!」

はるか頭を床に打ち付けてしまっんじゃないかと思う位深くと土下座していた。

相手はリンディ提督である。

「まあまあ、そんなに頭を下げなくても良いわよ。それに、追撃部隊の皆さんもあなたのおかげで無事だったわけですね？」

「私…皆さんが動けないなら自分が動くしかないと思って…それで

…」

「まあ…君は管理局の人間ではない…だが、常識的にあれば危険行為だ」

クロノの言葉にはるか顔は顔を上げる目尻には涙が溜まっており今にも泣き出しそうな顔だった。

「ですよ…もういつそ…煮るなり焼くなり好きに」

「…そんな顔をしないでくれ。言い出し辛いだろう…」

「…ふえ？何をですか…？」

はるかはきょとんと首を傾げる。

「君の処置だよ。艦長とも話合つて、上にも報告した結果…君を放っておくわけにはいかないという見解が返ってきた。はるか、君はどうしたい？」

「…出来るなら皆さんに協力したいです…！！」

はるかはしっかりとクロノの目を見て答える。凜とした瞳には一切の迷いは感じられない。

「…危険なことに巻き込んでしまうことになるんだが…それでもか？」

「それでもです。困っている皆さんを放っておけないですし…それに、自分の気持ちに嘘はつきたくないんです」

断言するはるか。クロノは頷くことで答える。

「上には仮申請を取ってある、囑託とは言え、以後は管理局の規則を守ってもらうぞ」

クロノが言い終わるとリンディははるかに歩み寄って、しっかりと向き合う。

「では静草はるかさん。本日付で、あなたを管理局の囑託魔導士に任命します」

「はい！！それで…囑託って何ですか？」

はるかが言い放つと全員が無言になった。

…あれ？

〈アースラ・食堂〉

クロノから詳しく説明するように任されたフェイト達とはりあえず食事でもしながら説明しようということとで食堂に来ていた。

「囑託魔導士っていうのは正式には管理局に所属しないで、今回のように依頼された仕事をこなす魔導士のことなんだ」私のはるかにわかりやすく説明をする。はるかは理解できた様子で

「成る程。フェイトちゃんありがとう！！って、フェイトさんが、先輩なんだし」

「にやはは、フェイトちゃんが良いと思うよ？ね？フェイトちゃん」
なのはにそう言われ、私は笑顔で頷く。

「うん。私達、プライベートではあんまり先輩後輩関係ってないんだ。それに私ははるかとも友達になりたい。前になのはが教えてくれたんだ。友達になるには『なまえでよぶ』だけで良いんだって」

「私も！！はるかちゃんと友達になりたい！！」

なのはも嬉しそうに言う。なのはの笑顔はとても優しい。

「私もや！！すずかちゃんとアリサちゃんも喜ぶと思うよ？」

はやても嬉しそうだ。私もアリサもすずかも喜んでくれると思う。

「勿論だよ！！私もみんなとお友達になりたいと思ってた、これからよろしくね！！」

はるかがにこつと笑いながら言った。良かった。はるかも喜んでくれたみたいだ。

と、ユーノが食堂に入ってきた。急いでいたみたいでまだフェレッツのままだ。

「ユーノくん！！」

『なのは！！あの子は』

すくつと椅子から立ち上がるなのは。と、はるかも立ち上がった？

はるかはそのままユーノに近付いていく。あ、嫌な予感…

「か…可愛いっ…!」

「キュッ!? キュー!?」

はるかはユーノを抱き締めると頬擦りを始めてしまった。ご愁傷様、ユーノ。

「なのはちゃん!! この子は? 管理局のペット?」

「あ…いや…ユーノくんは…」

なのはがオロオロと慌ててる。あれは確かに言い辛そうだ。助けてあげたいけど…難しそう…

「へえー? ユーノくんって言うんだね? よろしくユーノくん!! はるかだよ」

はるかはユーノを高く上げて挨拶をしている。ちらつとみんなを見てみると、みんな苦笑いだった。

『災難だねーユーノ』

「主はやて。『盾の守護獣。ザフィーラ』只今戻りました」

アルフとザフィーラが入ってきた。アリサとすずかは無事に送り届けることが出来たみたいだ。二人共子犬モードは解除している。

「おかえり。アルフ。大丈夫だった？」

私が声を掛けるとアルフは苦笑しながら答えた。

「ああ。ただ…あの子かね…家の庭を見た瞬間また思い出しかけてたよ…あたしにすずかを送らせてくれれば良かったのにさー」

「だって、アリサはアルフが大好きみたいだから…アルフだって…ね？」「そりゃあ…そうだけどさあ…」

アルフはポリポリと頬を掻く。まんざらでもないようだ。

と、話を終えたのかクロノが食堂に入ってきた。

「みんないるな？」

クロノはちらつと横目でユーノを見ると「まあ…頑張れ」と声を掛ける。

『どつという意味だよ!?!』

ユーノは愕然とし、叫ぶ。クロノは無視して私達のいるテーブルまで来た。

「件のロストログア…エイジ・コクーンについてなんだが…回収任務の許可が下りるのはまだ先になりそうだ…」

「どつして!?!」

クロノの言葉に一番最初に反応したのはなのはだ。

「ロストロギア的能力だよ。交戦した魔導士の話では、あれの能力は管制人格に甚大な被害をもたらすらしい…簡潔に言えばデバイスの強制停止だ…」

「強制停止やて!？」

はやてが驚きの声を上げる。

「…クロノ、被害にあったデバイスは？」

私はクロノに尋ねる。クロノは目を閉じて首を横に振った。

「残念ながら…機能回復が未だに見込めない。皆死んだように停止したままだ。はるか、君を下がらせた理由もこれだ。あのまま戦いを続ければ…君のアストラディアも…」

「でもアストは平気でしたよ？」

はるかが首を傾げて疑問を口にする。それにはアストラディアが答えた。

「恐らくは起動前だったんですよ。一切システムには異常がありませんでしたし」

クロノもアストラディアの声に頷く。

「ああ。君が守った魔導士達のデバイスも問題ないようだしな。現状、対抗策はないが全力で対抗プログラムの開発を進めている所だ。

プログラムが完成するまでは出勤要請もないだろう。とりあえず今日の所は解散だ。なのはの方はご家族の方も心配するだろうしな」

「そうだね…結構遅くなっちゃったし…」

「クロノ、はるかはどうするの？」

私がそう言つとクロノははるかを見る。

「そうだな…とりあえずは僕達の家泊まるといい。それで良いか？」

「へ…？あつ、はい。お世話になります」

はるかはぺこりとお辞儀をする。どうやら私達の家泊まるみたいだ。

「いいなあ〜フェイトちゃん。じゃあ明日は私の家に泊まるといいよ！！はるかちゃん」

「ほんならその次は私の家やな！！ええ所やよ〜？」

みんなはるかに興味津々みたいだ。

「はるか、人気者だね」

「あはは…」

当のはるかは照れているのか頬をほんのりと赤く染めていた。「ユニくんはどうするの？」

『そうだね…やっぱりなのは家に』

「いや、君には無限書庫で調べてもらいたいことがあるそうだ。直ぐに向かってくれ」

『ええっ！？来たばかりなのに！？』

がつくりと肩を落とすユーノ。多分、フェレットじゃない自分を披露したかったんだと私は思った。

「期待しているよ。未来の司書長？」

『全く…そんな器じゃないって…』

そう言いながらもユーノは嬉しそうだった。

第六話：ユーノの災難（後書き）

何とか更新出来ましたね〜

これからははるかだけではなくのはやフェイトやはやて、ヴォルケンリッター達の視点も増えてくると思います。

次は少女の事情でしょうかね…

ではまた

第七話・迷子とロストロギア（前書き）

今回は件の少女とロストロギアの背景です。

ではどじろー

第七話：迷子とロストログア

12月某日

「意気込んでみたけれど…」

見知らぬ世界に来てから数時間。私は歩き続けていたが、どれだけ歩いても景色は変わらなかった。一面が雪景色であるここには建物も何も無くて、最悪な事に吹雪で前が見えない。

「…村も集落も無いし…氷で出来た陸地…って所かな…」

此処まで辺りが見えないとやはり不安になってくる。おまけに薄着だから寒くて仕方がない。体温が急激に奪われていくのがわかる。だんだんと目が霞んで視野が狭くなってきているのだ。

「…このままじゃ一日と保たない…かな…」

もしも私が大人だったとしたって変わらないとは思うが、自分の歩幅を呪いたくなる。

だけど私は決して『ダメだ』とは口にはしない。

「…あれ？」

と、意識が朦朧とする中、私は視界に何かの影を捉えた。

人…ではない。相手は屈んでおり、四足歩行だ。

「雪ばかりの所にいる四足歩行の生物…？それって…」

嫌な予感がする。背筋に確かな寒気が走り、膝を付きそうになった。影が走り出す。驚くべき速さだ。相手が大自然の脅威そのものであることを思い知らされる。

「っ！？あれから逃げるなんて…！？」

私は走り出す。逃げ切れる可能性は少ない…それでも走らなければ助からないのもわかっている。

相手の歩幅と脚力と私の歩幅と脚力には決定的な差があった。それもその筈だ。あれは極北の王者。対する私はただの小娘。私はじりじりと距離を詰められていく。

相手が私の背後まで迫ってきたことを感じ取った瞬間

「あっ…」

私は雪に足を取られ、地面に倒れ込んでしまった。足を挫いてしまったらしく、焦りもあり、上手く立つことが出来ない。

「っあっ！？」

直後、私は相手の前足に蹴り飛ばされ、宙を舞った。頭から地面に叩き付けられ、その勢いを殺せぬまま、二、三度地面をバウンドして転がる。

雪がクッションになってくれたとは言え、蹴り飛ばされたダメージ

と全身を打ち付けた痛みからか、体がまともに動かない。

「はあ…はあ…」

私は大の字の体勢で雪の上に体を預ける。呼吸は荒く、心臓の鼓動が速い。吹っ飛ばされただけでこのザマか…

私は自分の着衣が薄着、しかも浴衣であることを恨む。まあ仕方がないか…さっきまでは真夏の夜だったのだから。

腕さえ動けば護身用の小太刀を突き刺してやるのだが…

「痛っ…!？」

腕を動かそうとするだけで激痛が走った。私が痛みに耐えている内に、相手は私の目の前まで歩み寄ってくる。

私の前に現れたそれは…

「…まさか真夏に白熊に遭遇するなんて…思ってたよ…」

白い体毛に強靱な爪を持つ相手の正体は『獰猛な白熊』だった。

猛獣は私を服の上から引っ掻く。

力任せに引っ張られた服は意図も容易く引きちぎられ、ただでさえ低い私の防御力を更に低くさせた。胸元からお腹の辺りまで大きく露出した肌には引っ掻き傷が走っていた。勢いで地面に沈んだのか幸いにも傷は浅い。傷口からは血が滲んでいる。

顔から流れる汗には緊迫感を実感させられた。

猛獣は私が死ななかったことに腹を立てたのか、今度は私の胸を踏みつけてきた。そのまま体重をかけてくる。

「あつ！？あああああああつ！？」

内臓が圧迫され、猛烈な息苦しさが私を襲った。口からは血を吐き散らし、爪が胸板に食い込み、深く突き刺さっていく。

雪が柔らかいことに助けられたのか踏み潰されるとまではいかないが、突き刺さった場所から爪が引き抜かれれば私は失血死するだろう。それが食い散らかされるかの二択だ。最早助かる術はない。

深く食い込んだ爪は私を離すことなく、そのまま持ち上げ、更に叩き付ける。勢いで私の体は深く沈み、頭に鈍い衝撃が走った。どろりと赤い血が頬に流れてくる。

「・・・・・・・・」

痛みがあってももう声を出すことすら出来なかった。意識が遠ざかる。

「私、このまま…死ぬんだ…」

突然すぎる最後だが、理解できた。死なんて大抵は突然訪れるものだろう。

「もう一度…母さんに会いたかったな…戻ったって生きているかわからないけど…」

母さんは私に『逃げろ』と言っていた。きっとそれは…母さんじゃあれには適わないってこと…

相手の最後の一撃が来る。狙いは首。急所だ。どうやら喰らいつくらしい。

『ごめんなさい。母さん…私はここまでの女だったみたいです…そして…この期に及んで…』

「生きたいなんて思ってたります…」

「aegis」

瞬間、何が起ったのかわからなかった。

私の目の前には見たことがない文字が刻まれた何かがあり、それが相手の牙を遮っていた。

それは光り輝いており

まるで…

『魔法のような力に守られたようだった』

「…私…生きてる…？それにこれ…」

見れば地面も光り輝いている。円を描くように走っている光の線は私を中心に広がっており、先程までの寒さが嘘のように暖かった。

「温かい…それにすごく綺麗…」

「適合者と確認。あなたをマスターとして登録します」

「君は…誰…？」

「I'm Sorry Master. I can't it. because My data is lost (申し訳ありませんマスター。私にはそれは出来ません。私のデータは消えてしまったのです)」

「記憶喪失なのね…別に謝らなくても良いよ？それで…マスターとして私は何をしたら良いの？」

「Please after me "Set up" (私に続いてセットアップと言って下さい)」

よくはわからないけど…今はこの力に頼るしか無さそうだ。こんな所で無様に死ぬわけにはいかない。

「セット…アップ…？」

直後、私は眩い光に包まれる。

視界が開けた時には私の姿は、それまでの浴衣ではなくなっていた。まるで神話に出て来る天使のような姿だ。

グレーを基調とした衣服は肩とか太股が見えてしまっているのに全く寒くない。そういえばいつの間にか呼吸も安定している。あれだ

け深かった傷も綺麗さっぱりと無くなっていた。

次にどうすれば良いのかが頭の中に流れ込んでくる。

「…これが…魔法…」

私は左手を前に突き出す。

「V a n i t y ・ L a n c e r」

瞬間、灰色の槍が炸裂した。

目の前の白熊が一瞬で弾け飛び、肉塊に変わった。鮮血が飛び散り、影の主が消え去る。

私の頬や服にも血が飛び散った。

白かった体毛は赤く染まり、地面の雪に赤が広がる。

私は右腕の袖で頬の血を拭う。

「…君はすごいね…粉々になっちゃった…」

「T h a n k y o u M y M a s t e r」

「お礼を言うのは私の方だよ。助けに来てありがとう。私は」

「I know your name (私はあなたの名前を知っています)」

え…？

「私の名前を知ってるの？」

「Of course. because wait ever time ever. Nice to meet you My Master (勿論です。なぜならあなたをずっと待っていたのですから。マスター、あなたに会えて嬉しいです)」

「ずっと待つてくれたんだね…私も君に会えて嬉しいよ」

「Thank you」
ありがとうございます

さて、恩には恩で示さなきゃね。

「君にお礼をしなきゃね。何が良いかな？」

「Your provided wish anything Master (マスター、あなたが望むならば何でも)」

「…それじゃあ…君の願いを叶えるっていうのはどう？」

「No problem (問題ありません)」

「決定。それで、君の願いは？」

「I want to lost data for rest

oration・bat don't worry my Master（私の願いは失われたデータの復元です。ですが気にしないで下さい。マスター）」

「気にするよ、失った記憶は取り戻さなきゃ…私が協力するから…諦めないで…ね？」

「Thank you My Master・You are very kind（ありがとうございます。マスター。あなたはとても優しいですね）」

（現在・廃墟）

「……………」

どうやら私は夢を見ていたらしい。あの日の出会った時の夢だ。

「Master」

「うん、少しは眠れたみたい…もう動けそうだよ」

私は立ち上がると服の汚れをほろつ。

「もう戻れない所まで来ちゃったんだろうね…まあ、決まっていたことなんだろうけど…」

きっとこれは私に課せられた試練なんだ。ならば、乗り越えなければならぬ。

「と…先ずはおはよう。今日もお互い生きてるね」

「Yes・Good morning My Master」はい。おはようございます。マスター」

何気ない朝の挨拶。それがとても嬉しい。私はこの一時がすごく幸せだ。でも、ぐずぐずしていると管理局に見つかってしまいかも知れない。

「そろそろ行こう。追っ手が来ると厄介だからね…」

「All right My Master」はい。マスター」

私達は…立ち止まるわけにはいかないんだから…

第七話・迷子とロストログア（後書き）

未だに名前が出ない彼女ですが、実は名前を公開する場面は決めています。名前も謎って自分の中では新鮮ですなあ…

そんな私ですがこれからも宜しくお願いします

第八話・忍び寄る影（前書き）

遅くなりました…

第八話：忍び寄る影

く高町宅く

色々あった元旦も夜が明けて、明るくなり、なのはは自室のベッドでようやく目覚めた。

手探りで着信メロディーを鳴らす携帯を探し、ベッドから落としてしまった携帯を、なのはは拾う。

「うー…?」

携帯の液晶画面に映っているアドレスは『アリサ バニックス』のものだった。

どうやら昨日の事の詳しいことを此方に聞きに来たらしい。なのはは了承の返信をする。

「…よつし!」

なのはは立ち上がると携帯のアドレス表を呼び出し、電話をかける。

「あつフェイトちゃん?あのね——…」

くハラオウン宅く

なのはからの連絡を受けてフェイトは出掛ける支度をしていた。

余程疲れているのかベッドの上のはるかへぐつすり寝ている。

「うん。この分なら大丈夫そうだね？バルディッシュ」

バルディッシュが光ることで返答を返す。少し無口だが優しい、フエイトのデバイスである。

ジュエルシード事件では、最終決戦の地、『時の庭園』へ向かう為の勇気と、母としっかりと向き合うための勇気をくれたこともある。着替え等を済ませたフエイトは朝食を採りにリビングへと向かう。

と、何やらリビングでモニターを映しているエイミイの姿が目に入った。

「おはよう。エイミイ」

「お？おはようフエイトちゃん。早いねー？」

エイミイはフエイトに声を掛けられて、手を止め笑顔で振り返る。

「エイミイこそ？…何か調べもの？これ…エイジ・コクーンだね…？」

エイミイは頷き、フエイトの言葉を肯定する。

「そ。あの時、モニタリングが出来なかったでしょ？何か特殊な機能でもあるのかなって…」

はるかとロストロギアの持ち主が交戦したあの戦いはモニターには

映らなかった。フェイト達の中で相手の姿を確認しているのは交戦したはるかだけだ。近くで転移魔法を使ったユーノも直接の姿を確認出来たわけではない。

まあ、はるかもはるかで、はっきりと顔まで確認出来たわけではないとのことだが。

「まあそれも含めてなんだけど、情報が少なすぎるのが現状かな…」

「…目的もはっきりしてないし…あのロストロギアのデータからすると…少し不可解だよね…」

エイミイは大きく背伸びをすると、肩を回して体を解す。

「そうなんだよねー…あのロストロギア、あれが安全って言われていた最大の理由…クロノくんはあの場で言ったら絶対混乱するからって言うてなかったけど、その事を考えると…ね…」

「その…理由って…?」

「…触れないんだ。あのロストロギアって」

触れない…?それって…

「…物理的に…ってこと?」

「うん。質量を持たないってことは形だっで見えないってことだよ? 確実に在ったとしても、そこにはないんじゃない、触れることも持ち出すことも出来ない。前提として、視認することすら出来ないんだから」

成る程。それでは確かに悪用なんて出来る者は普通いるはずはない。

「…でもそれじゃあそれが在るって証明出来ないよ？それにクロノが形状は繭だって…」

目に見えないなら存在を証明することは不可能に近いはずだ。

「いや…証明なら出来るんだよ。開発者が残した記録がそれを証明してるの。『繭の形で…在るけど、見えないし触れない』って。確実性をもたらしたのは発表の時に行われた公開起動実験。名だたる学者を集めての大々的な実験だったみたい。そして被験体の魔力を注ぎ込むことでエイジ・コクーンは起動した…」

フェイトはゴクリと息を飲む。

「…それって…」

「そう…一つの文明の終わりと共にエイジ・コクーンの使用は証明された…何億という人達の命と引換に…ね」

エイミィは頷き、応える。その声はとても重いものだった。

「惨すぎる…そんな…ことっ…！」

フェイトは奥歯を噛みしめる。そんなことが許されていいはずはない。ましてや、罪の清算すらしないなんて…！！

「しかも…被験者は開発者のお孫さんで…たった九歳の小さな女の子だったの…その日はお祭りだったらしくって…みんな、楽しい時間を過ごすはずだった…記録は予め、起動前に別次元へ転送され、

その記録に在る通りに一つの世界が消滅した…まるで予言みたいに…時刻すら寸分の狂いも無く…あまつさえ記録の転送先は中央管理局…」

エイミイは怒りを押し殺すような声で語る。

当然だとフェイトは思った。管理局は何も出来なかったのだ。未然に防ぐことすら…

「自分の研究の成果を証明するためだけに世界一つを…間違ひなく人格破綻者だ…」

「『無能な時空管理局よ。私の研究成果は定刻通りに証明される。貴様達には誰も救えないだろう。誰一人…救われはしない』…記録に在った管理局へのメッセージだよ…ロストログア関連の事件はこんなものばかり…」

エイミイは深くため息をつく。フェイトは暫く思案していたのだが

「エイミイ、クロノの言つてた特定の魔力って…」

「そ。その被験者の子の魔力だよ。『多重魔力』って呼ばれてる普通有り得ない魔力」

「『デュアルアルカナ』…か…普通、魔力は一人に一つのはず…異なる魔力が一つの体に複数存在するなんて聞いたことが無いよ…第一、許容量の問題もあるし…」

「まあ…そうなんだよね…とりあえず、今回の相手も多重魔力所持者と見て間違ひないんじゃないかな？」

「…エイジ・コクーンが完全に発動したら…この世界も…同じように消えてしまうんだよね…」

「…そう…だから本当は悠長にしてる暇なんてないはずなんだけどね…動けないんじゃないし…相手もロストしちゃったし…」

どちらにせよ、あのシステムへの対策が講じられない限りは動きようがないのだ。悔しいがこれが現実である。

今までは直ぐに動けたけれど…それだけでも幸運だったのかもしれないとフェイトは感じた。

「さて…と、私は寝るよ」事件が起こってから一睡もしてないんだ…」

エイミィは眠そうに目をこすりながら、自室へと入っていった。

「…あ、いけない！！はやく朝ごはん食べて買い物行かないと！！」

フェイトは急いでトーストを用意する。なのはの立てた計画を狂わせるわけにはいかない。

く???く

「やれやれ…此处は暗いな…」

メガネの少女は病院の廊下を歩いていた。いや、正確には元病院か。既に病院としては機能していない場所だ。まるで廃墟である。

「まあ暗いし確かに不気味やなあ…せやけど、カメラなんて持ってどないするん？」

隣を歩くロングヘアーの少女はメガネ少女の手にあるカメラを見ながら尋ねる。

「決まってるだろう。スクープだよスクープ！―廃墟に来たんだから心靈写真の一枚や二枚、写せてもおかしくは無かろう？」

ロングヘアーの少女はげんなりしてため息をつく。

「さやのんなら自分の力で心靈写真つばいもん位撮れるやん？」

「わかっていないな…早実…この『禄宵 さやの』、人は欺いても偽造だけは絶対にせんよ。私が欲しいのはリアルなのだから！―」

要はノリにノってるわけですね、と『早実 かりん』は深くため息をつく。

「…でも、ウチとあんたを同時に呼びつけるつちゅーことはそうまでも成し遂げたい目的が此処にあるつちゅーことやろ？」

さやのはかりんの言葉にふむと思案する。

「若しくは『鍵』だな。まあヤツの考えていることはよくわからんが…リアルを激写できるならなんでもいいぞ？私は」

「結局はそこなんやねー…でも、ウチも似たようなもんや。結局の所、目的が果たせれば何がどうなろうと構わへんのやからな」

「ある意味私のより問題あるんじゃないか？それ。かりん嬢は割と歪んでいるんだな…」

「『反逆者』に言われとう無いわ！！」

さやのはキョトンとしていたが、やがてポンと手を叩くと

「おお。確かにこれは一本取られたな。返す言葉も無いな？リベリオン」

さやのは自分の愛機へと話しかける。

『Yes My Master（そうですね。マスター）』

リベリオンと呼ばれたデバイスはさやのの言葉を肯定する。

「に、しても…呼びつけた当の本人が居ないっちゅーのはどうかと思っくんやけど…」

『Master』

「ん？どうしたん？アクセレイド」

かりんは何かに応じた愛機へと尋ねる。が、アクセレイドからの返答を聞く前にそれは姿を現した。

「恐らくは僕に反応したんだろう。だが失礼だな。早実、僕は君達に来る二時間前から此処に来ている」

「なんや、忍足くんやったんか。脅かさんといてーな」

「時間は守るタイプか？忍足」

「・・・いい加減…その軽さ…直せないのか？君達」

忍足はこめかみに青筋を立てて言う。

「せやけどウチらはこれで普通やしな？」

「第一、忍足が暗いんだよ」

「もう良い。本題に入る」

忍足は即刻諦めた。こいつらとまともに話すのは無駄な時間を過ごすだけ…と。

「本題…胸が躍るなあ？その響き」

さやのは凶悪な笑みを浮かべる。

「まだ何も言つとらんのに、さやのんは気が早いなあ？」

かりんは悪戯っぽく笑うが、その笑みもやはり狂気に満ちていた。

「エイジ・コクーンの所持者がこの病院に潜伏しているようだ。先ずは管理局を泳がせておくが…何れ君達にも動いてもらう」

「ああ、例のあの子か。確かに一大スクープのチャンスだな。それは」

「泳がせておく…それまで保つんかねー？その子」

かりんが疑問を口にするが忍足は『愚問だ』と断言する。

「あのロストログアのシステムの解析は短期間では不可能だ。管理局が出て来ようが彼女の優勢は揺らがない。彼女が目覚めると同時に管理局を呼び込む。転送の準備をしておけ」

「なんや、ウチらはおあずけなん？」

「不用意な行動は命取りになりかねん。期を待て」

「…わかったよ…」

かりんはむくれながらも渋々了承する。

さて、どう乗り切るかじっくりと見物させてもらおうとしようか？

第八話・忍び寄る影（後書き）

キャラ増員です。本当はもう少し書きたいですが眠いのでこれで…

第九話：歓迎会（前書き）

今回は日常編です

懐かしい名前が結構出て来てます（笑）

第九話：歓迎会

〔海鳴市〕

1月1日、AM11:30。

少女は廃墟で息を潜めていた。

『先程から何かの気配を感じる』

タイミングや状況から考えれば例の管理局の可能性が高い。

けれど不可解だ。侵入者は一向に近付いてくる気配がない。

規模にしても小隊にも満たない。僅か数名…恐らく三名といった所。今までのやつらは最低でも七名は居たはずである。

「畏…か、或いは管理局じゃないか…」

『Master…？（どうしますか？）』

「大丈夫…此処の構造は把握してる…隙を見て逃げるよ?。」

『All right（了解）』

少女達は未だ知らない…

影で蠢く者達の存在を…

〈時空管理局・本局〉

時空管理局・本局。

時空管理局の本拠地であり中枢。ロストログアの情報を受けた『クロノ ハラウン』は自身のデバイスの状態を万全にするためにこの場所に来ていた。

「『S2U』…君だけで済めば良いが…」

メンテナンスを受ける自身のストレージデバイス『S2U』を見ながら、懐から一枚のカード型のデバイスを取り出す。

そう、即ち『デュランダル』

闇の書の事件の際、『ギル グレアム提督』、『リーゼアリア』、『リーゼロッテ』等から託された氷結の杖である。

強力なデバイスであるが故に、安易な使用は躊躇われる代物だ。

「これを使うような事態は避けたいがな…」

クロノとしてもデュランダルは使いたくはない。まあ、緊急事態の場合はそんなことは言っではいけないのだが…

「それじゃあクロノ執務官のデバイスは私が責任を持ってメンテナンスしておきますね？」

デバイスのメンテナンスプログラムを起動させた『マリエル アテ

ンザ』はクロノに振り向く。

「ああ、任せたよ。マリエル。その内なのは達のデバイスのメンテナンスも頼みに来る」

「なのはちゃん達のデバイスと言うと…『レイジングハート・エクセリオン』に『バルディッシュ・アサルト』、それに『シュベルトクロイツ』や『ヴォルケンリッター』達の『レヴァンティン』、『グラーファイゼン』、『クラールヴィント』…計六機ですね？お任せ下さい！！」

「いや、七機だ」

クロノの否定の言葉にマリエルは首を傾げる。

「『静草 はるか』のデバイスだよ。名は『アストラディア』寧ろ本命はこつちでね…色々調べて貰いたい」

「…『Astradea』…『愛しの星』なんてロマンティックな名前ですねえ…？」

（海鳴市・高町なのは宅）

朝食を済ませたなのはは自宅でフェイト達を待っていた。

なのはの両親、『高町 士郎』と『高町 桃子』は駅前で翠屋という喫茶店を経営している。士郎が経営とマスターを務め、桃子は菓子職人を務めているのだ。因みに家族構成は五人。なのはには上に大学生の兄、『高町 恭也』と高校生の姉、『高町 美由紀』という兄姉がいる。なのはにとってはとても身近で見習っている存在で

あり、自慢の兄、姉である。

「これで良しつと」

なのははご機嫌で計画の準備を進める。

キッチンに並べられているのは小麦粉、卵、バニラエッセンス、生クリーム、ミルク、砂糖、苺だ。

これは翠屋のクリスマスの材料の残りである。事情を説明すると両親は喜んで材料を提供してくれた。

あとはフェイト達が来るのを待つだけである。

と、早くもインターホンが鳴った。

「「こんにちはー!!」」

「いらつしゃーい」

なのははドアを開けてフェイト達を出迎える。

メンバーはフェイト、はやて、アリサ、すずか、それに…

「あの…私はいつまで目隠しをしてたら良いんですか？」

はるかだ。

「もう良いよ。今外すから」

フェイトがはるかを目隠しを取る。はるかはやっと開けた視界の眩しさに一度ぐっと目を瞑るが、やがてゆっくりと開く。

「あ、なのはちゃん、おはよ…じゃなくてこんにちは…!」

…流石に今のは誤魔化しにすらならない。

「ほえ？」

なのはは首を傾げる。はて？今はお昼のはずなのだが…

「あついや、私こういう所が天然って言われるの!!はい!!」

はるかははるかで何だか焦りながら両手をぱたと左右に振っているが、なのはは詳しくは詮索しないことにした。

はるかは気付かれないようにホッと胸を撫で下ろす。

「あれ？はやてちゃん、ヴィータちゃん達は？」

なのはが尋ねるとはやては苦笑しながら

「あゝ…私は一緒に来たらええって言ったんやけどな…?」

どうやら一緒には来ていないらしい。

「そっか…」

しょんぼりするなのはだが、はやては魔法で通信を送る。

『せやけど一緒に来てないわけやないんよ？あの木の陰』

『木の陰…？あつ』

はやての視線を辿ると、木の陰にぴよこつと赤い髪のおさげが見えた。ああ、成る程、陰ながら主を見守っているとは流石は守護騎士だとなのはは納得する。

因みにフェイトは既に気付いていたようで、ちらちらとヴォルケンリッター達の方を見ていた。

「にやはは…とりあえず上がって上がって…！」

「「おじやましまゝすゝ」」

なのははみんなを招き入れる。なのはは私室までみんなを案内した。

「ささつ座つて…！」

フェイト達は各々床やベッドに座る。はるかだけが緊張しているのかおずおずと未だ座れずにいたので、なのはははるかの両肩に手を置くと

「はい。はるかちゃんも座ろ？」

「…うん」

につこりと優しく微笑むなのはにはるかは少しだけ緊張が解けたようだ。はるかもなのはの横に座った。

「それでは！！只今より『はるかちゃん歓迎会』を始めたいと思います！！」

「ふえ！？か…歓迎会！？」

「「わあ~~~~~」」

パチパチとはるか以外全員で拍手をし、歓迎会が始まる。

「司会是我、『フェイト テスタロッサ』が務めさせていただきます！！」

「「わあ~~~~~」」

パチパチとまた拍手が起こる。

「あつあのっ！！歓迎会って…？」

はるかだけが一人オロオロとしている。それもそのはず。実はこの歓迎会、はるかにだけ伝わっていなかったのだ。

つまりサプライズイベントである。

「なのはが企画したのよ？はるかに喜んでほしいって」

アリサがはるかに説明をする。

「うん！！サプライズだよ。はるかちゃん」

なのはは傍らに座るはるかの手を取って満面の笑みを見せる。

「お正月とはるかちゃんのことと二度おめでたいからなあ？」

はやての言葉にはるかちゃんは戸惑いを見せる。なのは達はそれに気付くと

『それに、お仕事はお仕事。プライベートはプライベートだもん
(だよ)(や)』

『…そうですね…!! ようしっ!!』

「ありがとうございます!! 私…感激ですうーっ!!」

吹っ切れたら吹っ切れたで今度は感動の涙を流し始めるはるか。

「あれ? はるかちゃん!？」

「私っ!! 私いっっ!!」

純情なはるかちゃんはひたすら嬉し泣きの涙を流し続ける。

十分後。

「それでは初めにそれぞれ自己紹介をしたいと思います。それじゃあなのはから順番に」

「はい!!」高町　なのは『聖洋小学校三年生です!!これからいっぱい思い出作りたいなあって思ってます!! よろしくね!! はるかちゃん!!』

「次はあたしね?」アリサ　バニクス『なのは達の同級生よ? よろしく、はるか!!』

「同じく同級生の『月村　すすか』です。よろしくね？はるかちゃん」

「『八神　はやて』や。まだ学校には行つとらへんけど、何れはなのはちゃん達と同じ学校に行きたいと思つとる。足も回復に向かつてることやし。でもこんなに早く友達が増えるなんてすつごく嬉しいよ！！これからよろしく、はるかちゃん！！」

「『フェイト　テストロッサ』です。なのは達と同じ聖洋小学校の三年生。１２月からだからまだ通い始めて間もないんだけどね…私も友達が出来るのは嬉しいよ。よろしく、はるか」

最後ははるかの番だ。

「『静草　はるか』です。この街には来たばかりで…右も左もわからないけど、こんなに友達が出来たならとりあえず頑張つていけるかな…なんて思つたり…あの…仲良くしてくれたら嬉しいです！！」

ぺこりと頭を下げるはるか。対するなのは達は

「『もちろん！！』」

と、声を揃えて言った。

はるかは満面の笑顔で感謝の気持ちを述べる。

「ありがとう…！！みんな！！」

フェイトは再び司会に戻る。

「続いて質問タイムです。親睦を深めるためにどんどん質問していきましようー!」

その言葉を皮切りに、はるかへの質問が始まる。

「はい! はるかっぺ前は何処にいたの?」

いきなり答え辛い質問だった。

「えーと…(何て言ったら良いのかな…)」

『大丈夫だよ。アリサもすずかも魔法のことも管理局のことも少しだけなら知ってる。勿論、私がこの世界の出身じゃないことも』

『そうなんだ…ってっ!?! ええっ!?! フェイトちゃんってこの世界の出身じゃないの!?!』

『あれ…? 言ってなかったかな? 私は異世界ミッドチルダの出身なんだ』

『そうだったんだ…なら大丈夫かな…?』

「…私、転移してきたみたいで…この世界の出身じゃないの…」

はるかへの返答にアリサはふむと頷く。

「フェイトと同じね」

「うん。まあフェイトちゃんとも違う世界の出身なんだけどね…」

「ようは管理局絡みね。じゃあはるかも魔導士なの？」

アリサの問いかけにはるかは頷く。

「うん。正確には魔導士になったのは昨日だね。囑託っていうやつ」

「なのはちゃん達と同じなんだね」

さすがが話題に乗ってきたようで話しかけてくる。

「元の世界に戻ろうにも、その世界を見つけるのも大変らしくって…時間かかりそうだから…」

苦笑しながら答えるはるか。

「でも…転移してきたって言うなら…いきなりいなくなっちゃってご家族の方心配しているんじゃない…」

さすがに心配そうに尋ねて来る。

はるかは「…そう…だね…」と、若干の間を空けて言った。

（はるかちゃん…？）

なのははるかの言葉に若干の違和感を感じた。

それはフェイトやはやても同じようだ。彼女達も少し気まずい顔をしている。

とは言え此処でそれを詮索してしまうと重い空気になってしまうので誰も詮索はしない。なのはとしても今日ははるかに楽しんでほしいのだ。

司会役のフェイトは話題を切り替える。

「それではここでみんなでケーキを作りたいと思います!!」

「わあ~~~~~!!」

一気に盛り上がる一同。はるかも満面の笑みでとても嬉しそうだ。

そしてキッチンに移動しケーキ作りが始まる。

「わあ!!はるかちゃん上手だね!!」

「そ、そうかな?」

なのはの言葉にはるかは照れながら答える。

「うん。確かに手慣れてる感じだ」

「こ…これは…ライバル出現…か?私」

なのはに同意するフェイト。はやては何故か小刻みに震えている。

「ライバルって…何の?」

純粹な疑問をぶつけるアリサ。

因みに陰では…

『シグナム、なんかすっげー楽しそう』

『駄目だぞ。ヴィータ。我らは何時如何なる時でも主の為に戦えるようにこうして待機しているのだから』

『でもシグナム、シャマルもなんかそわそわしてるけど？』

『楽しそう…はっ！？ちっ違うわよ？私も混ざりたいなんて思っていないんだから！？』

『思考がだだ漏れだ。シャマル』

『はうく！！』

どうしても参加したそうなシャマルさんであった。

第九話：歓迎会（後書き）

実ははるかには料理やお菓子作りが得意です。

後は掃除も得意ですが此方は地味な特技ですから披露する機会には恵まれないかも…

あと、マリエルとか懐かしいですねーな回でした

第十話：戒めの枷（前書き）

今回はギャグ成分多め？です

第十話：戒めの枷

「廃墟付近」

「…む？動きがあつたみたいだな。これは」

「向こうから動いたつちゅーわけか？まだ管理局のやつら来とらんのにどーするん？」

「偉く余裕だな…君達…」

さやの、かりん、忍足の三人は少女の潜伏場所を管理局に送った後、廃墟近くで待機をしていた。因みに忍足はこめかみに青筋を立て、小刻みに震えている。

その理由はと言えば…

「あつ！？しもたージョーカーやあー…」

「ふっ…やはりまだまだ勝負事に対する心構えが足りんな？油断している足元を掬われるぞ？」

「君達二人共な…！！何を呑気にババ抜きなどやっているんだ？」

どっちかと言うと全く緊張感が足りてなかった。

「違うぞ？私達はババ抜きを嗜んでいる」

「ババ抜きは習い事ではない」

一蹴する忍足だが

「ほら次々さやのんの番や」

「ほう？この私にまだ向かってくるとは見上げた根性だ」

「いや…最後の一枚になるまでやるやろ？普通」

「最後の一枚になる前に止める」

忍足の言葉に、かりんはじーっと忍足を見る。

「いや…最後の一枚になるまで」

「同じ言葉が聞きたいわけじゃないんだよ…！」

それを聞いたさやのは

「忍足、普通は最後の一枚になるま」

「まさか言い方の問題だと思ったのか？貴様」

忍足の言い方が変わったので流石にからかうのを止めるさやの。これ以上は危険であると体が告げている…多分。

「せやけど管理局の連中、本当に来るん？こんな何処の馬の骨ともわからん連中の情報で」

かりんは純粹な疑問を口にする。ところが忍足の返答は予想外のも

のだった。

「来ないだろうな」

一同、沈黙。その後

「「はあああああっ！！！！！！？」」

さやのとかりんが声を揃えて驚愕する。

「どういうことだ忍足！！なら私達は何を待っていると言っのた！？」

「そらないよ忍足くん！！ウチら待ちぼうけやないか！？」

まくし立ててくる二人を忍足は手を使って制する。

「落ち着け。密告しただけでは来ないと言っただけだ。貴様らにはこれから動いて貰う」

「…待つ必要はあったのか？これ」

「無論だ。向こうも良い感じに目が覚めてきた頃だろう」

忍足は眼前の廃病院を見上げる。

「それに、そろそろ襲撃者に痺れを切らす頃だろうからな…？」

彼の視線は屋上。そこには一人の少女が立って居た。

少女は無言。何も言わない。いや、恐らくは言えない。

「リンカーコアの反応が無い…ダミーってわけか？と言うことは本人を逃がすため…？要は時間稼ぎだったのだな？」

「でも忍足くん？その口振りだと…あの子の事よく知ってるん？」

かりんの言葉に忍足は歪んだ笑みを見せる。

「知っているとも。向こうは此方を知らないだろうがな。それよりも…来るぞ！！」

少女は躊躇い無く屋上から飛び降りて来る。

此方を迎撃するために。勿論先に踏み込んできたのは少女だ。

少女だったのだが

「まあどれだけ早くとも…リベリオンには意味が無いな」

さやのは、少女が地上に降り立つ前に、零距离まで接近していた。

一閃。

少女の上半身と下半身が音も無く分かれた。

空中分解した少女は必要な情報量を保つことが出来ずに虚空へと消え去った。

さやのは地上へと降り立つと

「血が出ないのはつまらないな。斬った感触も無い」

「Axel cutter」

さやのが地上に降りた次の瞬間、背後から迫る少女のダミープログラム。だが、瞬時に機械仕掛けの大剣がそれを斬り裂く。

「油断はあかんよ？さやのん」

地面に突き刺さった自身のデバイスの柄に立っているかのん。

先程の攻撃は彼女によるものである。

「…かりん嬢はやはり剣士と言うよりは大道芸の方が向いているな」

「さやのんのなんてズルいじゃん。反則もええ所や」

二人は言い合いながら、ダミーを斬り伏せていく。刃が振るわれる度、塵のようにダミーが消し飛んでいく。

「これじゃあまるで千人斬りやねー」

「全く、雑魚キャラをのしている気分だな…一人につき経験値5」

「ひつく！？ちゅーかレベル上げの穴場か何かなん？ここ！！」

さやのはダミーを一人一人消していきながら

「に…しても何て可愛い雑魚キャラだ…ああ、抱きしめたいっ

「!!」

「雑魚キャラ固定されちゃった!?そして実はと言うかやっぱり変態!?変態なん!?さやのん!?」

「そういつかりん嬢はアホか?今更そのことに気付くとは…」

かりんは驚愕しさやのに反論する。

「認めちゃうんだ!?ちゅーか誰がアホやねん!!」

「はっ!?しまった!!これでは極秘裏に進めていたかりん嬢に後ろから抱きついてあゝんなことやこゝんなこと作戦が!!」

「既に重症やあゝ!?そしてこれ私逃げないとあかんのとちゃう!」

「ええいつ!!こうなれば今実行するしか!!」

「って!?何本当に抱きついとるんや!!あつちよっ…そこはあかん!?」

と言うか激しく戦いの邪魔だった。

「ってあれ?忍足くんがおらへん!?」

さやのは未だにかりんに密着しながらも、ダミーを消し飛ばし言い放つ。

「きつと空気を読んでくれたのだな」

「んなわけあるかあーっ!!」

かりんは密着しているさやのを引き剥がすと怒号と共にアクセレイド・ザンバーでぶっ飛ばした。

ダミーと共に吹っ飛んでいくさやの。廃病院を貫通した彼女は偶然か必然か、視界の隅で状況を観察していた少女を確認した。

遠く離れた所で戦況を確認している者。

それは即ち

「見つけたっ」

さやのはデバイスの能力を使い、瞬時に少女の背後まで接近する。

少女は彼女が背後に立つまで全く気付けなかった。

「っ!?!しまっ」

「やあ? 本体。やっと捕まえた」

文字通り抱きつく。だが顔は見せないように配慮する。

「お楽しみしたい所だが、それは次の機会ということぞ?」

さやのは懷から小さめの筒を取り出すとそれを少女の首元に当て、針を撃ち込む。

何かを撃ち込まれた。少女がそう思った時にはもう遅い。

「何をし…あ…れ…？」

少女は力無くさやのに体を預け、意識を失った。

「強力な麻酔つてやつだ。今は眠って貰うぞ？『戒めの枷』…いや…もう眠っているか」

遅れて、かりんが到着する。

「あれ？終わったん？ほんなら帰る？」

「そうだな。しかし…」

本当にヤツは何を考えているんだか…

く海鳴市・高町なのは宅く

「それじゃあ今日のはるかちゃん是我的家に泊まるってことで…！」

なのは達はアリサとすずかを見送っていた。

「それじゃあまたね？みんな」

「はるか、今度は私の家に来てね？すっごく大きいんだから…！きつとびつくりするわよ？」

「うん…！是非お邪魔させてもらいます…！」

満面の笑みではるかは応える。

「それじゃあなのは、はやて、はるか、また明日」

「またねー！！フェイトちゃん！！」「また明日ー！！」

はやては大きく背伸びをする。

「ほんなら私も帰るよ。みんなが心配や」

苦笑しながら言うはやて。視線の先にはヴォルケンリッターが居り、何故かシャルだけが涙目だった。

「にやはは…またね！！はやてちゃん！！」

「ケーキ…お口に合うかわからないけど…」

心配そうに言うはるか。

「大丈夫。みんな喜ぶと思うよ！！おおきにな？なのはちゃん、はるかちゃん」

はやてはにつこりと笑うと自信満々にはるかに告げるのだった。

く帰り道く

フェイトは今日のことを色々と思い出しながら、ご機嫌で帰路に着いていた。

「なのはに出会ってから色々あったけど…やっぱり楽しいことばかりだ」

初めて出会った頃はお互いの信念の相違からぶつかってしまっただけ、今では友として、互いの背中を預け合える位にまでなった。悲しいこともあったけど、その分楽しいことも沢山あった。

きっと、これが成長していくっていうことなんだと思う。辛いことを乗り越えて強くなっていく…一緒に強くなっていく。私にとってかけがえのない日々だ。

例のあの子、ロストロギアを守るあの子はどうなんだろう？寂しかったりしないのかな…？

きっと、苦しい思いはしているんじゃないかと思う。なのはやっぱり事情が知りたいんだろうな。勿論、それは私だって同じだ。シグナム達とだって分かり合えたんだ。今回だってきっと…

「あー！！流れ星ー！！」

流れ星を見つけたら消える前に三回願い事を言えば叶うって話があったな。でも消えるのが早くてお願いなんて言えそうにないや。

「あれ…？」

フェイトは街灯の灯りに照らされる少女を見つけた。少女は静かに願いを捧げているように両手を組んでいた。

まるで流れ星に願い事をするように。

それだけなら声はかけなかったと思う。

けれど

すごく綺麗な子…まるでお姫様みたいだ。

フェイトは純粹にそう感じた。それだけ、彼女には存在感がある。ただ、服装だけがとても見窄らしかった。

そして

『とても悲しげな目をしている』

それは儚さそのものだった。それを感じさせる程、切ない思いがそこには在る。

「あの…」

気付けばフェイトは少女に声をかけていた。

少女はゆっくりと振り向く。近くで見るとより一層綺麗な子だった。だと言っのに

『瞳だけがとても虚ろだった』

「…何か…？」

「えっ！？あ…大丈夫なのかなって…」

「……何が？」

少女は暫くフェイトを眺めていたが、やがて口を開く。

それは至極当然な疑問だった。

「あ…その…寒くないのかな…って…」

違う。そうじゃない。そうじゃないのに…思うように言葉が出てこない。

でも何がだろう？大丈夫って…何のことなんだろう？

自分で言ってて何を聞いたかったのかわからなくなってきた。

「…ああ、寒くないかと言われれば…寒い」

あ、やっぱり寒いらしい。

「…だったらどうしてそんな格好を…？それにこんな寒い日にこんな所に居たら風邪ひいちゃうよ？」

少女の格好はまるつきり薄着だった。衣服はそこら中が破けて、肩や太股が露出している。汚れた布のようなそれは彼女には不釣り合いな衣服と化していた。

「…それもそうね…服はこれしか持ってないの。風邪をひくのはわかってるけど…どうしてもお願いしたかったから…」

「お願い…流れ星に…？」

「うん。強くなりたいって…それが私の今の一番の願いだから…」

少女はこくりと頷くと夜空を見上げる。

強くなりたい…か…それは私も思っていることだ。きっとみんなも…ともかく、このままではこの子は本当に風邪をひいてしまうだろうし、こんな格好で放っておくことは出来ない。

「あの…私の家近くなんだけど…服、貸すよ?」

「…でも…あなたに悪いし…」

「このまま放っておけないよ。私は『フェイト テスタロッサ。』君は?」

フェイトの問いに少女は答える。

「…『藤咲 なつき』…」

第十話：戒めの枷（後書き）

オリキャラはギャグの時は動かしやすいですねー（笑）

ではまた近い内に

第十一話・出会う者、語り合う者（前書き）

仕事忙しくて更新出来ませんでした。すみません

では、続きをどうぞ

第十一話：出会う者、語り合う者

〔海鳴市・ハラウン家〕

「…どの辺りが良いかな…？」

「…その…どれでも…貸してもらえただけでありがたいから…」

あれからフェイトは少女を私室へ招いていた。あの格好ではこの夜を凌げそうには無いし、困っている人を放っておけない。

「うーんと…それならなつきにはこれが似合うんじゃないかな？きつと」

フェイトは私服の中から一枚、取り出すとそれをなつきに差し出す。

「……………」

と、なつきはまじまじとそれを見つめ始めた。

「…嫌…かな？」

「っ！？」

フェイトの言葉になつきはハッとしたように驚く。

「うっん！全然嫌じゃない。寧ろ嬉しくて見つめてた。…その…とつても魅力的…」

普通の服だが…よくよく見てみるとなつきは興味深そうにそれを見つめているように見える。案外、本当に高貴な方なのかも知れない。まあ、そうするとあんな格好をしていたのがますます疑問なのだが。

「喜んで貰えたみたいで良かったゝあ、お風呂沸かしておいたよ」

「う…うん。ありがとう…フェイト…その…おこがましいのはわかっている…けど…出来たら…」

「………?」

「あの…し…下着も…貸してほしいの…」

顔を真っ赤にしながら、なつきはそう言った。

「ミッドチルダ・街」

「冬の風物詩と言えばコレよねー」大根に蒟蒻に卵にはんぺん、竹輪に油揚げ、がんも…そして昆布巻き…さてこれは何でしょう!」

「…コンビニエンスストアのおでんだろ?見ればわかる」

街には二人の少女が居た。一人はオレンジ色の髪で肩までのショートカット、卵を頬張るもう一人も髪は短いが此方はシュシュで横の髪を短めに束ねている。髪はピンク色だ。

「もーっ!!ノリ悪ふぎっ!!」

「喋るか食つかどっちかにしろ。大体、よくそんなの食えるな?お

前。レトルト食品とかも食ってたし」

「あんたが贅沢なだけよ！！レトルトだって美味しいやつは美味しいのよ？」

「わからなくも無いけど…お手軽すぎるのはちよつとな…料理は手間暇をかけてこそものだろ？」

確かに正論だが、レトルトに対する偏見も感じられる言葉だ。

「レトルトは料理が出来ない人達の救世主なのよ！！」

「随分範囲の狭い救世だな…大体、お前…本来の目的忘れてるんじゃないか？」

「だって仕方ないじゃない？反応が消えちゃったんだから。ま、必ず尻尾は掴んでやるつもりだけど！！」

「それで第97管理外世界に行けなくてやけ食いか…まあ私は一旦戻るけど」

「えっ！？せつかくエリスちゃんがやる気になってるのに戻っちゃうわけ！？」

ぞんざいに捨てられたエリスちゃんは驚きを露わにする。

「それはエリスの都合だろ？私には関係ないし…第一反応が戻らないとあの世界に行っても意味が無い」

「そんな…私とは遊びだったの！？」

少女は『バカ言っていないで仕事しろ』とだけ目で語る。

「冗談よ。冗談。もちやることはやるよん？期待は裏切らない女…それがエリスちゃんなのだ！！」

「…うん。まあ疲れてないけど疲れた感じがするしやっぱり帰る」

そう言うや否や背を向けて去っていかうとする少女だったが…ふと、その足がピタリと止まった。

「……どつたの？」

「……いや…何でもない」

そういえばあの囑託魔導士はあの世界にいたのだったか。つくづく嫌な因果ばかりだな…本当に…

（海鳴市・ハラオウン家）

「うん。これで大丈夫だね」

私の目の前には一人の少女が居る。名前は『フェイト テスタロッサ』というらしい。長い髪をツインテールにしている女の子だ。

「…何から何まで…ありがとう…」

私は素直に自分の気持ちを伝える。出来ればお礼がしたいが、生憎、出来そうにもない。

「あ、今日は泊まっていくといいよ?」

「…ううん…そこまでして貰ったら悪いもの…これで充分助けて貰ったから」

「でもまた外に出たら風邪ひいちゃうよ?」

「…そつか…そうだよね…じゃあお言葉に甘えるかな…」

その夜、私はずっと起きていることにした。勿論疲れてはいたが…この穏やかな微笑みを持つこの子を…私の抱えていることに巻き込むわけにはいかない。そう思うとおちおち寝てもいられないと思うたからだ。

『Master』

「っ!?!…ごめん…もしかして眠ってた?」

『you are very tired Master.』(とてもお疲れのようですね)』

「…でもまたあの人達が襲ってくるかも知れないからね…この子のこと…守らなきゃ…これは私の弱さが招いたこと…だから私に責任がある」

この温もりは切り捨てなければならぬのだ。それが温もりであるからこそ…私はそれに触れてはいけない。

「疑問は幾つかあるんだけどね…」

あの人達は私を襲ってきたくせに、戦闘不能になった私を見逃した。目的が私じゃなく、この子だとしても私から奪っていかなかったのも疑問だ。となると何か、細工をされた可能性が高いように思える。

「どっちにしても状況は最悪だね…」

管理局に謎の三人組…一人で相手するには流石に限界があるが…

「…でも負けない。もう…負けられない…!!」

外に出た瞬間から、本当の意味で頼れる人など一人もないのだから…

〈同時刻・高町なのは私室〉

暗闇の中、なのはは件の少女のことを考えていた。多分…同い年だと思う。周りの人で実際に交戦したのははるかちゃんだけけど…

私は隣で寝ているはるかちゃんの顔を見つめる。

と、突然はるかちゃんがぱちりと目を開いた。

「起こしちゃった!？」

慌てる私を見てはるかちゃんはくすつと笑った。

「うっん。起きてただけ」

そう言ってくれて私はホッと一安心する。

「なんだか眠れなくて…多分、同じ理由で…なのはちゃんはその子のこと…どう思う？」

「…直接はまだ会ってないから…なんとも言えないけど…はるかちゃんの話を聞く限りでは…出会った頃のフェイトちゃん達みたいかなって…」

「…みんな敵同士だったそうだね…フェイトちゃんから聞いたよ」

「…うん…でもちゃんと気持ち伝わったから…だからこうして仲良くなれた。今回もやっぱり私、お話聞かせてほしいの。その子にも…絶対…分かり合えるって信じてるから…」

私はやっぱり、今回も思いをぶつけると思う。何も知らずに戦うのは嫌だ。

「…私もそう思うよ。私…本当は戦うのも嫌なんだ…お話だけで解決出来たらどんなに良いだろうって…でも…それだけじゃどうにもならないことだってある…だから戦う時は戦わなきゃいけないんだよね…」

「そうだね。はるかちゃんってあまり戦ってるイメージは湧かないかな？」

私の言葉にはるかちゃんはキョトンとしたような顔になった。

「そ…そうかな？」

「うん。なんだろうね…？はるかちゃんといると心がポカポカしてあったかくなるの。きつとはるかちゃんならどんな人でもお話で

きるんじゃないかなって…」

「…どんな人でも…かあ…私、悪人さんでも話せばわかるって思ってるんだよね…だからお人好しすぎにも程があるってみんなに言われちゃうの…」

はるかちゃんは苦笑しながら言う。

「…はるかちゃんはやっぱり強いね。誰にでも手を差し伸べられることって…誰にでも出来ることじゃないもん」

「欲張りなだけだよ。私の戦う理由はね…誰にも傷付いて欲しくないうってことと、誰も傷付けたくないってこと…そして大切なものを守るためなんだ。あはは…あまあまだね。私」

皮肉気味に笑うはるかちゃんに私は真剣に尋ねてみることにした。

「…でも自分には甘くないよね？はるかちゃん」

「…え…？」

「誰も現場に行けなかったあの時、はるかちゃん、迷わなかったもん。迷わないで、危険な現場に向かった…身を呈して、現場の魔導士さん達を守るために…そのための努力が出来てるんだから大丈夫だよ！！はるかちゃんなら！！」

「なのはちゃん…」

「あ、でも私と同じで無茶しちゃう所あるみたいだからそこはお互い気を付けなきゃけど」

私の言葉にはるかちゃんは目に涙を溜めて頷く。

「うん…うんうん！！私頑張る！！頑張るよー！！」

「はるかちゃん！？今夜中だから大きな声はダメだよーっ！？ご近所迷惑なのーっ！！」

それぞれの夜が明ける…穏やかな一時は終わりを告げて、少女達は再び戦火へと誘われていく…

第十一話：出会う者、語り合う者（後書き）

前回と今回で遂に少女の名前が明らかになりました。

今回はそれぞれが1対1で話していたので書きやすかったですね。

ではまた

第十二話：早朝、公園にて（前書き）

バトル勃発です。

第十二話：早朝、公園にて

（公園）

早朝、フェイトの住むマンションから出た私だったが、この街を出ようとは思わなかった。

『姿を隠すなら人混みの中』とは先人はよく言ったものだと思う。幸い、現状では管理局には見つかっていない。

魔法…はとりあえず表向きには知られていないと推測する。

とは言え…実の所、私は人混みは苦手だったりする。そのため、一人になりたくて早朝の公園まで足を運んだというわけだ。

「これからどうするかな…」

正直、不安でたまらない。一人で外に出るような機会も無かった私には今の状況は酷だった。家柄、温室育ちなので催し事でもない限り出ることの許されなかった外の世界はまるで異界だ。

詰まる所、私のセカイは『お屋敷の中』で此処では無かったのだ。初めて見た一面の銀世界だって本で読んだから知っていただけ…私には知識はあっても経験が無い。恐らくだが同じ年の子達の半分も経験はないだろう。

「…勉強が出来たって…世界を知らなかったら意味が無いんだね…」
暫く物思いにふけていた私だったが、ふと…此方へ歩いてくる人影を見つけた。

黒いリボンで両の髪を留めた、ツインテールの女の子。茶髪で、年の頃は同じ位だと思われる。

私はとりあえず身を隠すことにした。今は誰とも会いたくない。

しかし、こんな時間から子供が公園に来るのは少々疑問だが…

「それじゃあ、今日も朝の練習頑張るかな」

私は少し距離を取って物陰から様子を観察して見る。何故かはわからないが、その練習というのが気になるのだ。

少女は首から提げていた赤い水晶体みたいな物をベンチに置く。

胸騒ぎがする…この先の光景は見てはいけけない。そんな予感がした。しかし気になって離れられない。

次の瞬間、そんな予感は…現実のものとなった…

「それじゃあシュートコントロールから始めるね」

私はレイジングハートをベンチに置くと、魔法陣を展開する。

「リリカルマジカル…!!」

意識を集中させ、指の先に魔力を集める。呼吸を整え、正確に、形

を形成させる。

「福音たる輝き…この手に来たれ！導きの下…鳴り響け！…デИБインシューター…シュートっ！！」

指先に溜めた魔力を放つ。魔力で空き缶を弾くと、それを落とさないように続けて弾いていく。

「コントロール…！！」

カウントはレイジングハートがやってくれる。私は空き缶を落とさないことに集中力を注ぎ込んでいく。

「アクセル！！」

カウントが進むと今度は徐々にスピードを上げていく。

と、突如、レイジングハートのカウントがストップした。

「あれ…？どうしたの…？レイジングハート？」

「Master」

私はレイジングハートの様子に首を傾げたが、程なくして空が光に包まれる。

透明な膜みたいなの…これは…！？

「これって広域結界！？」

私は突如発生した結界に戸惑う。そして、ザクザクと雪を踏みしめる音が聞こえてきた。

「誰なのっ!？」

音がした方へ振り返ると、一人の女の子が立っていた。

髪は雪のように白く染まっていて、綺麗で…だけど悲しげな目をした女の子。

『ひよつとして見られてたの!？レイジングハート!!』

『Yes．(そのようです)』

私は全く気付けなかったことに驚きを隠せず慌てていたのだが

「…さっきの…魔法？」

唐突に少女から聞き慣れた言葉が発せられる。

「…魔法を…知ってるの…？」

この状況下で魔法を知っている人物…可能性があるとすれば…それは…

「Master!!(マスター!!)」

レイジングハートの声にハッとすると、少女はもう目前まで迫ってきていた。

「あ…っ!？」

「Protection」

レイジングハートが咄嗟に障壁を張ってくれたおかげで、私は相手の攻撃を喰らわずに済んだ。

少女は一度、距離を取ると構えてくる。

「待つて!!あなたは…ひょっとして…エイジコクーンの守り人さんなの!？」

私は叫ぶが、相手は私の言葉に面食らったらしく

「エイジ…コクーン?何のこと…?」

少女は明らかに戸惑っているように見える。

「ロストログアの名前…って言ったらわかるかな…?とにかく危険なものなの!！」

「だから…?」

「えっ…?」

「だから…回収する…って?危険な力を行使してるのはあなた達だっ
って同じじゃないの?」

目の前の女の子は震えていた。奥歯をギリと噛み締めると私に敵意の眼差しを向けてくる。

「Master!!」

「っ！？ダメだよレイジングハート！！戦ったらレイジングハートが！？」

私はレイジングハートが言おうとしていることを悟る。

「please, believe me. (私を信じて下さい)」

「レイジングハート…」

「Call me My Master. (私を呼んで下さい。マスター)」

「…わかった…！！信じるよ！！レイジングハート！！」

今は私に出来ることをしよう。レイジングハートが私を信じてくれているんだ！！私もレイジングハートを信じるんだ！！戦えないって最初から決めつけてたら…もうそれ以上動けない…だったら！！

「レイジングハート・エクセリオン！！セットアップ！！」

「Stand by ready.」

決めつけたりしない！！諦めもしない！！

だって…私もレイジングハートも、あんなに悲しそうな目をした子

を放っておけるわけが無いんだから！！

私は光に包まれ、白いバリアジャケットを身に纏う。

少女は私の姿を一別すると目を閉じて

付けていたヘアピンを外すと両腕を胸の前までギュッと引き寄せ交差させる。

「…セットアップ」

「Driving start.（駆動開始）」

静かに紡がれた言葉。それに呼応し、少女はバリアジャケットを纏う。

全身を鎖で拘束しているかのようなバリアジャケット…歪で…なに纏っている翼は天使みたいで…でも、黒が混じって灰色をしている。

デバイスらしきものは見当たらない。

「まだ名前、言ってなかったね…私、高町なのは…！！時空管理局に協力してる囑託魔導士だよ！！あなたは？」

「…敵に答える名前なんか…無い！！」

「Feather Ballet」

少女が叫ぶと同時に翼が展開し、無数の魔力弾が撃ち出される。

数にして推定50はあるだろう…でも！！

『フェイトちゃんより50も少ないなら！！』

『Protection』

私は撃ち出された魔力弾を魔力障壁で防ぐ。

「…ガードが固い…！！？」

「話を聞いてってば！！」

黒煙が晴れて視界が戻ってくるのと同時に叫ぶ。が、

「っ！？」

相手は既に眼前まで迫ってきていた。

相手の手には相変わらずデバイスはない。

けれど

『攻撃が来る！！』

そう感じ取った私は靴のドライブフィンを展開させ、一気に距離を離す。

直後、空気が震えた。目に見えない斬撃が先程まで私が立っていた空間を切り裂く。

『この子、速い…少しでも隙を見せたら…簡単に懐に入られちゃう…！』

戦ったことの無い…タイプだと思う。長距離砲撃型の私に対してあの子は恐らく近距離特化型…武器の性質上大振りだったフェイトちゃんやヴィータちゃんとも違って、この子の攻撃は風を切るように出が早い。

でも…何だろう…？この変な感じ…

綺麗な目をした女の子…だけど…その目を見terると胸が苦しくなる…

「待つてほしいの！！目的を教えて！！どうしてその子を守っているの！？」

私がそう言つと少女がピタリと動きを止めた。彼女はしばらく無言で私を見上げていたけれど、やがて口を開いた。

「…目的を言つたら…見逃してくれるの…？」

それは、とても小さな声だったけど、寂しく、心に響いた。

「それは…」

悪用するような子じゃないのはわかる…誰かに強いられているような様子でも無い。

「…私、立ち止まれないから…」

「え…？」

彼女ははつきりとそう言うと私から距離を取る。

『Master・She have magic is incr
easing（マスター、彼女の持つ魔力が増大していきます）』

「決めに來たってこと！？それにこれってまさか！？」

「…堕ちろ…」

『System down fall.』

これは例のデバイスの強制停止システム！？

「っ！？レイジングハート！！」

私はレイジングハートに向かって叫ぶ。

「…No problem…Master.」

やっぱりレイジングハートには少なからず影響が出ている。このま
まじゃ！？

「ハーケンセイバー！！」

突如、黄色い光刃が少女へと突っ込んでいった。

それに…この声は…

「なのは！！距離を取って！！」

空を見上げると、友達が、フェイトちゃんが来てくれていた。

「っ！？増援！？」

『Aegis』

少女は障壁を張り光刃を防ぐ、が

『Saber・expload』

フェイトちゃんは光刃で防御を削り、足止めをしつつ、更に光刃を高速回転させ、爆破する。

込められた魔力の全てを爆散させた一撃は、少女の魔力障壁を粉々に粉碎した。

「くっ！？」

少女は吹き飛ばされながらも、空中で受け身を取り、体制を立て直す。

尚もフェイトの猛撃は続く。

『Thunder rage』

私はフェイトちゃんが足止めしてくれている間に充分な距離を取る。

「こいつ……っ！？バインド！？」

サンダーレイジの利点はバインドでロックした上で雷撃を撃ち込めること。

「サンダー!!」

故に、逃がさない!!

「レエーイジツ!!」

少女に雷撃が放たれる。

バインドでロックしているため、直撃する…はずだったのだが

『A e g i s ・ b a r r i e r 』

放たれた雷撃は球状の全体防御魔力障壁によって防がれてしまった。

でも、ダメージは残っているはずだ!!

「レイジングハート!! デイバインバスターいける?」

『A l l r i g h t M a s t e r (了解です。マスター) 』

あのシステムの範囲内からは抜け出せたようだ。

「守り人さん!! 私達…やっぱりお話聞かせてほしい!! 何も知らないままぶつかるのは嫌なんだ。だから…私達が勝ったら…お話を聞かせてね!!」

私の言葉にフェイトちゃんも頷く。

やっぱり、私は知りたい。あの子が戦う理由…もしかしたら力になれるかもしれない。もうフェイトちゃんは覚悟を決めて戦っているんだ。

きつとおんなじ気持ちだから…

私はこの思いを伝えたい！！

だから…この手の魔法に願いを込めて…

『あの子に届いて！！』

『divine buster』

「デイベイン！！」

私はレイジングハートに魔力をチャージする。レイジングハートから発せられる光がより一層強くなっていく。

「バスタアアアアアアーツ！！」

フルチャージショット…この一撃で！！

桜色の長距離魔力砲撃が放たれる。

極大の一撃はかつてフェイトのバリアジャケットを恐ろしく劣化させた程の威力だ。

その一撃は今度こそ少女の魔力障壁を粉碎した。

無論、直撃。桜色の砲撃は少女の体力を根刮ぎ奪っていく。

「っああああああっ!？」

直撃を受けた少女は悲鳴と共に光に包まれていく。

だが光が消えても少女は墜ちなかった。

バリアジャケットはボロボロに傷付き、髪の色は艶のある黒になっている。

「…ちょっとやりすぎた？」

私は不安に駆られ、彼女の安否を確認しようとしたのだが…

フェイトちゃんが驚きの表情で彼女を見ているのに気付く。

「…フェイトちゃん？」

私は心配になって声を掛けるが

「…な…つき…？」

ポツリと、フェイトちゃんと言う。

彼女もフェイトちゃんに気付いたらしく、

「…まさか…君…は…」

彼女は一瞬驚くが、意識が途切れたらしく力無く崩れ落ちた。

私はこのままでは落ちてしまうので受け止めようと思い、彼女の下へと急ぐ。

けれど

「「えっ!?!」」

次の瞬間、彼女が白い光に包まれた。

第十二話：早朝、公園にて（後書き）

今回、久々にバトルです。なのはやフェイトの魔法をみると改めてその強さがわかりますね。（サンダーレイジとか）

コメディも好きですがやっぱりバトルですね。

第十三話：薄れゆく景色の中で（前書き）

すみません遅くなりました…ではどうぞ。

第十三話：薄れゆく景色の中で

…私は、何をしてるんだろう…

何で攻撃を仕掛けちゃったのかな…逃げようと思えば逃げられたかも知れないのに…

結果がこれ…か…無様だな…これじゃ守れない…

守るための力が欲しかった。大切なものを守るための…

戦えるのは…この子のおかげ…でもそうじゃなくって…純粹に自分の力で…守ってあげたかったんだ…

決められてばかりだった私だけ…

それは…私のホントウの気持ちだったはずだから…

だけど…その為には誰かを傷付けなければいけない…本当は誰も傷付けたくなんてない…けれど…それが必要なら…やるしかないんだ。

『safety release drive vanishing mode.（安全装置解除。バニシングモード起動します）』

私となのはの前で彼女の姿が変化する。

全身に巻かれていた鎖が千切れ、体に紋様が刻まれていく。両腕に紫色のリングが装着され、バリアジャケットも赤みがかった紫色に染まっていく。

そのおぞましい姿は…

「敵意の…表れ…？」

そう感じ取った時、私はこの相手を純粹に怖いと思った。

だから…反応が遅れて…

「フエイトちゃん！！」

「っ！？」

危機迫ったなのはの叫び声でやっと私は状況に気付く。

相手は既に砲撃体勢に入っていた。

『Target delete（目標を消去します）』

私は障壁を張ろうとしたが…

その時、相手の光の消えた目がチラリとなのはを見るのを私は見逃さなかった。

「違う！？なのは！！狙われてるのは…！！」
『Vanishing blast』

彼女の腕がなのはに向けられる。それにこれは…！？

「長距離…砲撃！？レイジングハートツ！！」

『protection』

なのはに向かって赤紫色の魔力が放たれる。

「なのは！！」

私はなのはの下へ急ぐ。けれど、間に合わない。

一直線に放たれた魔力はなのはの魔力障壁に突き刺さる。直後、轟音と共に閃光を撒き散らした。

「なのはああああーっ！？」

黒煙で姿は見えない。けれど

「大…丈夫！！なんとか…平気」

私はなのはの側まで行くと、ホッと胸を撫で下ろす。

「フェイトちゃん…あれは…あの子どうなっちゃったの…？」

「落ち着いて。多分…ロストログアの自己防衛システムだと思う…主が意識を失ったから…起動したんだ」

「それって…あの子を守るために…？」

「…わからないけど…危険なのは確かだよ。自己防衛システムは敵と認識した相手には容赦しない…だから非殺傷スタン設定も働いてないはずだ…」

あれ…？でも…

「なのは、どうしてあの行動があの子を守るためなんじゃないかって思ったの？」

「え？んと…さっきの攻撃を受けた時にね、ちょっとあのロストロギアの意味を感じたんだ。私達を拒絶してる…あの子に近付かないで…って…」

…少しわかる気がする…私もそうだった。あの頃は周りが見えてなくて…誰の言葉も耳に入らなかった。

あの子は多分…以前の私と同じ…

私達は赤紫色の魔力を放つ彼女を見つめる。

向こうは勿論やる気だ。

「とにかく…今はあの子を止めよう…バルディッシュ、やれるよね？」

『Yes sir』

「うん！！いけるよね？レイジングハート！！」

『all right Master』

愛機の頼れる声に私もなのはも微笑み

「レイジングハート！！」

「バルディツシュ!!」

『load cartridge』

「私が中距離から撃つ…なのはは援護を!!」

「わかった!! フェイトちゃん!! 気を付けて!!」

「うん…!! なのはも気を付けて!!」

まだあのシステムが働いてるなら接近戦は挑めない…少し厳しいけど…二人でなら!!

く時空管理局・L級巡航船・ブリッジく

「はへえー…寒いのによくやるねー…あの子達」

少女達はモニターから戦闘を見守っていた。

「寒さは関係ないだろ…? 襲われたんだから正当防衛なんだろうが…まあここからは…」

少女は悪戯っぽく笑うとパートナーを見て

「あらーん? 助けに行くのかなーん? ルシア」

「これ以上囑託魔導士だけに任せておけないからな…それに私の仕事だ。これは」

「かくして心優しいルシアちゃんのか弱い二人を助けに行くのです」

「…黙らないと細切れにするよ?」

明らかに不満な眼差しを向ける同朋にエリスは距離を取り

「じょ…冗談だって!! いったらっしやい、ルシア」

く海鳴市・上空く

なのはとフェイトによる共同戦線が始まる。

フェイトは中距離地点まで接近すると、バルディッシュを構える。

「撃ち抜け!! 雷迅!!」

『photon lancer』

「ファイア!!」

フェイトは雷を纏うスフィアを4つ作ると、それを槍にして撃ち出す。

雷の槍は少女に向かって飛んでいくが、少女は連続転移をするような動きでこれをかわす。

そこへ

『Divine shooter』

「シューーッ!!」

桜色の魔力弾が突撃する。

空を翔る光弾はやはりかわされてしまいが、なのはのデイベインシューターは誘導型である。

なのはは光弾をコントロールし相手の背後から攻撃を仕掛けた。

結果…

『All hit（全弾 命中しました）』

デイベインシューターは背後から直撃。桜色の光が拡散する。が…

「そう簡単には…いかないよね…」

相手は依然として其処に佇んでいる。

「ほぼ無傷…流石ロストロギアだ…」

「ならデイベインバスターで!!」

『Shooting mode setup』

なのははレイジングハートをシューティングモードに変え、構える。
其処へ…

「その必要はない」

突如、声が聞こえ、なのはの横を緋色の光が突き抜ける。

「えっ!？」

『アースラン所の例の囑託魔導士達だな。巻き込まれたく無かったら離れてろ。特に黄色い髪のお前』

『これって念話!？』

『待つて!! 接近戦は!？』

『ふん…些末な問題だな。まあ黙って見てればわかる』

緋色の魔導士はギリギリまで接近する。

『System fall down』

「悪いが無駄だ…!! フランヴェルグ!!」

緋色の魔導士は鞘からデバイスを引き抜く。

刀身が波打つような形状をした特徴的な剣だ。

『Ignition（発火）』

「はあああーっ!!」

炎を纏った刃が少女へ襲いかかる。刃は障壁に阻まれるが

『Saber break（刀身粉碎）』

突如、刀身が無数に砕け

「ラッシュエッジ!!」

砕けた刃が一斉に襲いかかる。

『barrier custom』

相手は即座に強度の高い障壁を張り、これも防ぎきる。

なのはとフェイトは突然の介入にポカンとしていたのだが…

「え…? ええーっ!? なんで普通に動けるのあの人!!」

「これは一体…どうなって…!?!」

戸惑うなのは達だが、そんなことはお構いなしで緋色の魔導士は追撃を仕掛ける。

彼女はくすりと笑う。

直後、相手がバインドで拘束され

「逃さない!! これで…!!」

緋色の魔導士がフランヴェルグを振り下ろそうとしたその時、

「待つて！？斬っちゃだめえっ！！」

「待つて下さい！！その子はっ！！」

なのはとフェイトが同時に叫ぶ。と、緋色の魔導士の剣がピタリと止まる。

彼女は訝しげな表情を浮かべなのは達を見ると

「…お前ら何を言つて…これだけの好機を前に待て…だと？」

「でもっ！！まだお話聞いてないし！！」

「はあ？お話？あのさ…お前ら…っ！？」

緋色の魔導士は即座に相手の変化に反応する。彼女は充分に距離を取ると剣を構え直す。

『Mode release change user control mode（モード解除。使用者操作形態へ移行します）』

見れば少女は意識を取り戻していた。バリアジャケットも元の色へ戻っている。

「…結界解除…この空域を離脱するよ…君…」

『All right』

少女は魔法陣を展開させる。発動される魔法は無論

「転移魔法!!ちっ!!」

緋色の魔導士は舌打ちするが、追撃はしない。この距離からだと間に合わないのはわかっているようだ。

少女は虚空へと消えていき、見えなくなった。

「…はあ…やれやれだな…」

緋色の魔導士は小さな溜め息を付くとなのは達の側まで来る。

「あの…ごめんなさい…」

なのはは頭を下げる。

「謝んなくても良いけどさ…」

「あの…あなたは…?」

フェイトは緋色の魔導士に尋ねる。

「時空管理局の執務官、『ルシア フレイヤ』だ」

「管理局の…」

「執務官さん!?!」

「ああ…」

ルシアはデバイスを仕舞うとふうと息を付く。

と、通信が入りモニターが映し出された。

『あけおめ♪アースラン所の囑託魔導士ちゃん達♪』

「にやつ！？念話！？」

『いやーサプライズ大成功！！と、あたしはエリスっていうの。これからよろしくね。まあ念話で話すだけってのもあれだし、詳しい話はアースラで…しようかにゃ？』

第十三話：薄れゆく景色の中で（後書き）

とりあえずこの話はAパートに当たります。次のBパートは今から書き始めます

お気に入り登録されている方々、読んで下さりありがとうございます！！

良かったらこれからもお付き合いして下さいと嬉しいです！！

ではまた

第十四話：覚醒（前書き）

Bパートです。バトルバトルバトルですな

第十四話：覚醒

く????

「それで？あの娘はどういった御様子ですか？」

この世界の何処とも知れぬ場所、若しくは次元の狭間、其処には巨大な城が立っていた。玉座に座るドレス姿のブロンドの髪の女は楽しそうに部下に尋ねる。

『はっ！！未だ覚醒には至っていませんが、順調に事は進んでいると思われます。ただ、まだ時間がかかるかと…』

男の返答に「そう」と微笑みながら、彼女は手の中でワイングラスを弄ぶ。

『セシリア様…これからどうされるのですか？』

セシリアと呼ばれた女は「うーん」と唸ると足を組み、やがて愉しそうに微笑んだ。

「それでは少々強引ですが壊して構いません。後で私好みに調整すれば問題ありませんから。位置は特定してありますので、迅速に対応して下さいね？」

セシリアは決して目を開かない。彼女は常に目を閉じているのだ。

「了解。管理局は…どうします？」

「興味無し…と言いたい所ではありますが、この二人の囑託魔導士には興味がありますね？」

セシリアの前にモニターが映し出される。其処には白いバリアジャケットと黒いバリアジャケットの少女が映っていた。即ち、なのはとフェイトだ。

「特に此方の白い魔導士、とても美味しそう…食べちゃいたい」

「うふふ」と恍惚の笑みを浮かべながら、何やら物騒なことを女は口にする。

『…では…？』

「ええ。出来れば情報を集めて下さいな？」

『了解。行動開始します』

セシリアは通信を切ると、空のワイングラスを目を閉じたまま眺める。

もう空のグラスは見飽きた。

そろそろ、鮮やかな朱い血を注ぎたいものだ。

〈山林地帯〉

転移座標も特定せずに跳んだ私は、自分が居る場所すら特定出来ずにいた。

今、管理局に追撃されれば間違いなく自分は墜ちるだろう。

「…とにかく…逃げないと…」

疲労しきった体は今にも崩れていきそうな錯覚さえさせる。

「いや、まあ管理局が追撃しなくても堕ちるんだけどな？」

不意に、そんな声が聞こえた。

「っ！？」

私は即座に振り向くが、何者かは既に目前まで迫ってきている。

「ここで壊して良いんだって。まるで『物』みたいな扱いだな？ なあ！…なつき嬢！…」

何者かは容赦なく私を蹴り飛ばす。

反応が遅れた私にはそれを避けることが出来ない。朦朧とする意識がさらに希薄になっていく。

蹴られた勢いと重力に身を任せて、私は地表へと墜ちていく。

「ダメだって。あれじゃあ防御魔法が発動してクッションになる。やるなら徹底的じゃないと…！！」

相手は二人組だった。

もう視界すら安定しない状態でわかったのは…私が特別な血筋だからだろうか？

もう一人が肩に担いだ巨大な剣を私に向かって構える。

と、次の瞬間

何か鈍い音が聞こえた。

肉を無理やり裂き、骨が砕ける音。音は二回に渡って聞こえ、二回目音はほんの少し遅れて聞こえた。

それが、自分の体が発した音だと遅れて気が付く。

先程まで相手が構えていた巨大な剣は相手の手元には無かった。

何故なら

『巨大な剣は、私の体の中心に深く突き刺さって貫通していたのだから』

「…壊れる」

『Barrier break and Accelerator Drive』

剣からはアームが伸びており、私の体はがちりと固定されていた。剣はそのまま加速し、一瞬で私を地表に叩き落とす。

勢い良く落下する私に、抗う術は無かった。

「…お前がバインド使えなくて本当に良かった。使えたらあれえげつないぞ…」

「流石に引きちぎったりせえへんよ。エグいし…まあ、後は死体を回収するだけやな」

声が聞こえる…体が麻痺しているのか、痛みはない。

剣は相変わらず体に刺さったままで、刀身まで地表に半分位突き刺さっていた。

私…生きてるのかな…？一体どうなって…

全身が真っ赤に染まっていて、恐らく血は致死量は流れている。

体がバラバラになってないのが不思議な位だ。

誰かが降りてくる。多分あの二人…

「…て…転移魔法…せめてこの子だけでも…」

髪止めに手を伸ばそうとしたが手が動かない。その代わりに、私の目が捉えたのは…

『無残に砕けて散らばった大切な存在だった』

「…あ…あ…あ…あああああああああ…!？」

その瞬間、私の中の何かが切れた。

〈回想〉

「かいほー？」

「ええ。あなたにはまだわからないかも知れないけれど…私達、藤咲の力です」

幼い私にはまだよくわからないお話。けれど、私は母さんの顔を見つめて言葉に耳を傾ける。

「良いですかつき、この力は確かに強い…特にあなたはその色がとても濃い…ですが決して然るべき時以外には使ってはなりませんよ…？」

しかるべき時…ってなんだろう？という時…？大人になったらわかるのかな？

「そうですね…大切なものを守る時…それが命を懸けてでも守らなければならぬものである時…人によって様々ですがなつきにもわかる時が何れ来ます…そして…あなたは代わりに大切なものを失うことになります…だから出来れば使わない方が良いのです。わかりましたね？」

私は母さんの顔をずっと見ている。なんとなくわかるから。それが大事なお話だつて。

だつて…

「ねえ、どうして母さんは泣いてるの？」

母さんがずっと悲しい顔で泣いているから…

今になってわかる。母さんは…苦しかったんだって…

私に辛い重荷を背負わせてしまつ自分を責めていたんだ。

それに気付いてあげられたら…

『何故泣いているのかなんて一番辛い質問をすることなんてしなかったのに…』

きつと…母さんの言葉に『はい』と返事を返せたはずだったのに…

〈山林地帯〉

「…近くで見るともつとエグいなこれ…」

「グロくないだけまだましや。あんだけやって…四肢が飛び散つてないなんて大した障壁やな。まあ回収しやすいから好都合。引き抜くで」

かりんはアクセレイドザンバーの柄を両手で持ち、少女の体から引き抜く。

が、

さやのが『何か』に気付き叫んだ。

「っ！？待てかりん！！」

「へ？」

時既に遅く、剣は少女の体から、『完全に引き抜かれていた。』

『ありがとう。お陰で自由になった』

そして突然響いた声に怯む間もなく、

かりんの体は数十メートル先の巨木へと叩き付けられていた。

「っ！？かりん！！」

『人の心配してる場合？』

追撃が来ると感じ取ったさやのは剣を構える。

と、見えたのは少女の後ろ姿だった。一瞬動揺するが、即座に鋭い痛みに気付く。

見れば、脇腹から血が滲んでいた。

「…斬られた後だと…！？っがっ！？」

何も無い場所で空気が爆発したようにさやのの体が横に吹き飛ぶ。まるで、蹴られたかのように。

『…壊したあのこと考えて無かったの?』

まるで此方の動きに付いてきていない。これでは拍子抜けだと、少女…なつきは嗤う。

恐らく仕組みすらわかってないだろう。

「くそっ!! やってくれるな!!」

さやのは吹き飛びながら、リベリオンの柄を両手で掴む。

「リベリオン!!」

自身のデバイスに呼びかけるさやのだったが

『風景停止』

ぽつりと、少女の念話が頭に響いてきた。

「なっ!?!」

『見た風景を一時的に止めるスキル…十の距離を零まで詰めることが出来る』

さやのの表情が凍り付く。

「看破されている!?! たった二度の戦闘だぞ!?!」

それはそうだ。二度は多い位なのだから。本来は一度で充分である。

だが、さやのは笑う。

「…だが、看破したとして…対抗出来るかというのは別の話だがな
！！」

『出来るけど…？』

なつきはさらりと言い放った。

『あなたより速ければ…良いんだもの』

だって…今は私の独壇場なんだから。

それを口にしないまま、なつきは…今自分が考えていることを嘲笑する。

甘さはいらない…迷いは要らない。

だから、情なんて要らない。

数秒の後、雌雄は決した。

倒れたのは二人。立っているのは一人。

どちらが勝ったかなと言うまでもない。

く山林地帯・上空く

「…目覚めたか…」

やはりあの二人では壊せても収めるまではいかなかったらしい。忍足はデータを呼び出すと思案し、

「調整が必要だな。あの二人は…彼女は問題ないだろう」

見下ろす地表には三人の少女が倒れている。

傷つき、倒れた者達と、傷つけ、疲れ果て眠る者が。

第十四話・覚醒（後書き）

次回はもう一人の主人公にスポットが当たることでしょう。

恐らく…

ではまた

第十五話：夢の中で（前書き）

今回ははるか抱えるものの片鱗が見えてくる

そんなお話です

第十五話：夢の中で

く???く

其処は、見渡す限りが荒れていた。

建物は倒壊しており、海は汚れ、雷鳴が轟いている。

「…はあ…今日はまた一段とすごいなあ」

そんな大地にポツンと…『私』は立っている。

「…これは…私の心みたいな風景なのかな…？」

自分で言っていてよくわからない所があるが…気にしても意味はない。
でも確かに私みたいな風景なのだ。

だって…とても夢のない光景だから…

いつだってそう…私はネガティブなことばかり考えてしまっただ。

とりあえず、歩いてみる。

「ひゃうつ!?!」

ものの数秒でコケた。全く、夢の中でさえドジなんだな…私。

「痛くはない…けど……」

何に躓いたのか気になった私は、振り向いて、言葉を失った…

私の目が捉えたのは茶色い髪の子…赤と黒が混じったりボンを付けて髪を束ねてツインテールにしている。赤い服を着て…ピクリとも動かない。

その女の子が着ているのは赤い服などでは無かった…赤く見えたのは…

人間の血液だった。

「…なのは…ちゃん…」

朱に染まった女の子…高町なのはは壊れた人形みたいに動かない。

なのはちゃんだけじゃない…

彼女の仲間が、至る所に散らばって倒れていた。

「フェイトちゃん…」

金色の髪は真つ赤に彩られている。

「はやてちゃん…」

ひしゃげた車椅子の近くで、瓦礫に埋もれていた…

「みんな…!？」

夢だとしても酷すぎる惨状だった。

そして、一番離れた場所に、瓦礫にもたれかかるように座り込んだ『あの子』が居た。

彼女だけは意識があり、血にまみれ傷だらけの体で私を睨んでいる。

ああ…彼女がやったんだ…

本当に酷い夢…明晰夢にしてももっとマシな夢があるだろうに…

仕方ないか…

『はるかには夢の無い子なんだから』

「…化け物みたいな奇行だね…」

私は彼女に話しかけてみる。

「…何を他人事みたいに言ってるの…!?!」

彼女は驚いていた。

「…え…?」

これだけのことをやった人物の言葉にしては可笑しい表情だ。

「なんでそんなことが出来るの…なんでこんな…」

「ちょっと待つて…!?!それじゃあまるで私が…」

「白々しい…あなたが一番の化け物じゃない…早く殺りなさいよ…
もうつずつずしてるんでしょ…？」

…化け…物…

私は初めて自分を見ている。

服の至る所が赤く染まっでいて…

両手は真っ赤だった…

「あ…あ…いや…こんなっ！？」

「ど…うして…？」

不意に後ろから声が聞こえた。

なのはちゃんの声だった。

「…な…のはちゃん…違う…私は…」

「信じていたのに…」

次いでフェイトちゃんの声が響く…

「酷いやん…はるかちゃん…」

違う…違うのはやてちゃん…！私はこんなこと…

「…こんなに酷いことしちゃうんだもん…要らないね…はるかちゃ

んなんて…」

なのはちゃんの顔は見えない…

「…あ…ああ…あ…」

体が全く動かない…

「そうだね…要らないね」

「せやね…要らへん」

フェイトちゃんもはやてちゃんも…私に近付いてくる。

「嫌…嫌あああああああああああつ!?!?」

「あああああああああああああつ!?!?」

私はガバツとベッドから起き上がる。

悪夢は終わったらしい…

すごい声を出してしまったのでなのはちゃんを起こしてしまったの
ではと思った私は、彼女の方を見るが、どうやら留守だったらしく、
彼女はいなかった。

「…良かった…」

しかし嫌な夢だった。ここまでネガティブな夢もそうはないだろう。

「…要らない…か…」

それはずっと小さな頃に言われた言葉だった…

口に出すだけでズキリと胸が痛くなる…

私は知ってしまったているから…理想と夢とは違っていて…

理想は持てても夢は持てない…それが私…

『私は自分を大切に出来ない』

「でも…」

この手の力が誰かの幸せの礎になれるのなら…

私はどんなにだって貪欲になれるんだ。

く????

あれからどれくらい時間が経ったのだろう…

目が覚めると私はベッドに寝ていて、体が暖かいのがわかった。

…最近、気付くと何処だかわからない場所に居る…

窓からは高層ビルが立ち並んでいるのが見えた。見た所、何処かのマンションの一室のようだ。

私の記憶は二人組を倒した所から無く、恐らくは倒れたのだと思われるが…掴まったのだとすれば…あれだけの扱いを受けた私が暖かい毛布で寝てるなんてことは有り得ないだろう。

ならば…誰が？

私は考え得る最悪の事態を想定する。

『まさか管理局に…！？』

私は上半身を起こそうとしたが、鋭い痛みがあり、動けなかった。

「目が覚めたんですね？」

苦痛に耐えていると、何時の間にか私を覗き込んでいる人物が居ることに気付いた。

驚く私を見て、女性はくすくすと笑う。

「良かった…その分なら大丈夫そうですね。あなた体中傷だらけで倒れていたんですよ？」

女性はにこにこしながら話しかけてくる。少し眩しい位の笑みで思わず顔を逸らしてしまった。それを見て女性はまったくくすくすと笑う。

「私はローザ。あなたは？」

『……………』

沈黙。暫くお互い無言のまま向き合う。

「…えっと…まだボーっとしちゃってるのかしら…」

何だか勘違いしてるようなので意識がはっきりしていることを伝えるために、口の動きで『ローザ』という発音を作る。

「…そうローザよ！…と言いますか…声掠れちゃってるの？」

ローザはまだ勘違いしているらしい。私は否定の意味で首を横に振る。

「…もしかして話せないの…？」

やっと伝わったらしい。私はこくりと頷く。

「そうだったの…んーと、じゃあ『念話』は大丈夫？」

ローザの口から反応せざるをおえない言葉が出る。

『なんで…念話のことを…？』

「念話は出来るみたいですね。あなたがデバイスらしきものを持っていたから…ひょっとしたら…って…」

『そうじゃない…あなたはどうして魔法のことを知ってるのって訊いてる…！…！』

ローザは面食らったようにこちらを見ていたが、直ぐに元の表情に戻る。

「魔法は知っていますよ。私は元はデバイスの開発に携わっていたんですから。時空管理局という所で」

『元…時空管理局の人間…!!』

私はその言葉で更に敵意を露わにする。

「待つて待つて!?!いきなり険しい表情してどうしちゃったの!?!」

『…う…』

私は相手の言葉に口ごもる。

相手は元、管理局…それにこの女に恨みがあるわけでもない…敵意を向けるのはどうかとも感じた。

「…何か、事情があるみたいね…」

『…彼は…何処?』

私は姿が見えないあの子の所在を確かめるべくローザに質問をする。

「…膨大な魔力量を示しているわ…今は修理中…だけど…データの破損が見られるの…」

『…それは元から…』

その失われたデータを復元するために…私達は行動を共にしていたのだから。

「そう…事情はわからないけれど…深く詮索するような野暮なこと
はしないから安心して。…ねえ？あなたさえ良ければ、受け取って
ほしいものがあるのだけれど？」

そう言うとローザは私の手を取り、丁寧な体を起こしてくれた。

「立てる…？」

『……………』

私は言葉を交わさずに自力で立ち、行動で示した。

〈時空管理局し級時空航行船アースラ〉

「…何故君が此处に居る？」

本局からアースラに帰還した『クロノ・ハラオウン』は帰ってきて
そうそう会いたくない人物に会ってしまうという災難に見まわられて
いた。

「人の顔を見るなり失礼なことを言うんだな。お前」

橙色の髪の少女、ルシアは億劫そうに溜め息をつく。

「まあまあ二人共、久しぶりに会ったんだから険悪なムードは止めに
しない？」

桃色の髪の少女、エリスは二人の仲裁に入るが場の雰囲気は至って

変わる気配が無い。

「大体、久々に会うつてのに第一声がそれなのかクロノ？まあ嬉しくはないけど」

「一言余計だ。ルシア」

苦笑いをするエリスだが何故か楽しんでいるようにも見えるのは気のせいだろうか。

「あの…」

そこへクロノを小さな声で呼ぶ少女が一人、声の主はなのはだ。

「君達も居るのか…朝から此処に来ているなんて何かあったのか？いや、そうとは思えないな」

「ああ…例のロストロギアと行動を共にしている少女…あいつと交戦したよ。初めに戦ってたのはその囑託魔導士だ…確か高町なのはって言ったっけ？」

「あ、はい！！高町なのはです！！」

「ふむ…なのは、詳しい話を聞かせてもらっよ？あとフェイト、君もだ」

「え…？」

クロノの言葉にきょとんとするフェイトだが…

「君はなのはを助けに来てたんだろ。大方察しは付くからね。しかし…無茶をする…下手をすれば君のバルディッシュも…」

「わかっています…でも…自分の気持ちには正直に…迷わず真っ直ぐでいたかったから…」

「…実に君らしい理由だな…まあ…今回は不可抗力だから仕方ないか…」

やれやれといったふうに苦笑するクロノ。

其処へひょっこりとはるかがやってきて

「皆さんおはようございまっぷ!？」

盛大にコケた。

「…君のドジも筋金入りだな…はるか」

「あうー…ごめんなさい…ダメですねー私、ほんとドジで…」

「えへへ」と苦笑いしながら顔を上げるはるか。クロノは手を差し出すとはるかを立たせてあげる。

「ああ、紹介しよう。彼女達は」

「しなくて良い。自己紹介位自分で出来る」

「昔は出来なかったけどねーあはははは」

「余計なことを言うな」とあからさまに不機嫌な視線をルシアはエリスに向ける。エリスはエリスでそんな友人の反応を楽しんでいたのだが、

「使妃さんにエリスさん!？」

そんな二人に異常な反応をはるかが示した。

「…シキ? 誰だそれ。私は『ルシア フレイヤ』だが?」

「あたしはエリス…だけど…あんた誰?」

「ええっ!?! ふっ二人共私のこと忘れちゃったんですか!?! それに…使妃さんじゃ…ない?」

『マスター』

アストラディアは何かに気付いたらしくはるかに呼び掛ける。

「私です!! はるかですよっ!!」

『マスターってば!!』

何だか全く耳に入っていないらしい。かなりショックが大きいようだ。

「はるか…知らないな」

「右に同^だずく〜」

「なんだよ同^だずくって」とツツコミを入れるルシアと「業界用語よ」

とちょっとズレたことを（わかっていて）ほざき始めるエリス。

「ほ…本当に…わからないんですか…」

『おいへボマスター』

「誰がへボマスターか！？ってアスト？」

はるかはやつとアストラディアが呼び掛けているのに気付く。

『やつと聞こえましたか駄マスター。恐らく、あの方達はミッドチルダの使妃さんとエリスさんだと思います。』

『駄マスター！？』

ガンと目尻に涙を浮かべるはるかだがアストラディアは無視して話を続ける。

『頭の軽いマスターでは説明仕切れないでしょうから、ここは私が説明しましょう』

頭が軽い…要は脳みそ空っぽだと…そう言いたいのか？駄聖霊とはるかは自分の愛機に不満げな視線を投げかける。

『その視線、心地良くてゾクツとします』

『お前本当に聖霊か？』

『ああ、言い忘れてましたけど少し力が戻ってきたらしく、顕現化出来るようになりましたんで、せっかいですから顕現しますね』

そう言うや否や、はるかの下から十字架状のアストラディアが離れ輝きを放ち出す。

「なっ何この光!？」

「これは…!？なのはっ!!高い魔力を感じる!!気を付け…」

光の中から姿を現したのは

『お初にお目にかかります、皆さん』

「…て…?」

「ふえ…?」

「な…!？」

「………?」

「おりよ?」

真っ白なフリルのドレスを身に纏う。金髪碧眼の少女だった。

「こっくらアスト!!みんなびっくりしてるじゃん!!」

「…アストって…」

なのはは腰を抜かしながら碧眼の少女を指差す。

『はい。私はアストラディア。星の聖霊にして聖女の杖であり拳たる者です。今はマスターのデバイスなどをやっています』

「…は…はるか…？これはどういう…？」

はるかに説明を求めるクロノ。エリスは啞然と、ルシアは興味なさげに見ている。

『ですから、マスターのデバイスですよ。聖十字教会が誇る、聖女・静草はるか』の

「聖女…だと？それに聖霊？待ってくれ…君達は…」

『その事も含めて私から説明しましょう。大事な事なので、出来れば全員集めて頂けますか？』

くあるマンションの一室

私が連れて来られたのはマンションの一室なのに科学者の研究室みたいな変な部屋だった。此处だけ壁やら床やらの材質がまるで違う。

「…さて、それがこの子の性能なのだけど、あなたはどう感じたかしら？」

私が渡されたのは形式番号と、能力、性能が記されたファイルだった。デバイスの開発に携わっていたこの女のことだから恐らくは何か参考になる意見が欲しいのだろう。ならば此处は率直に意見を言うべきか。

「…まず、風属性のデバイスにしてはその特性が活かされていない。ここに記された能力は力任せに使用するものばかりでこの戦闘スタイルじゃ十中八九自滅するし成功確率も極めて低い。そもそも風は力に非ず。風は肌で感じ取るものであり、読むものである。風に乗りて流麗に舞う。此ぞ即ち風の極意なり。…個人的な意見を言うならこんな所。言いにくいですけど最低の扱い方だと思います。このデータは」

「風は操るものではなく流れに乗るもの…やはりあなたに見せて正解だったわね」

「え…？」

ローザは安心したかのように穏やかな顔で、目の前のデバイスを見つめながら言う。

「この子の本質をわかってくれる者にやっと巡り会えたってことよ。お偉いさん方は力に固執するばかりでこの子の本質をわかってあげられなかった。操る側の視点でしか見られなかったのよ。私の開発したこの子は風のデバイス…つまりは風そのものだっていうのにな…」

私はローザの横顔から目の前のデバイスに視線を向ける。

「…自ずと一方的な上下関係が出来てしまっていたから…肝心な部分が抜け落ちていたのね…風と一体となるっていう…ことが…自在に操るなんて…風に逆らってるのと同じなのに」

「ええ。ところであなた、もう声は出せるのね？」

「一時的な副作用みたいなものだったようです。もう大丈夫」

大切なものを無くすって言葉のことだと思っていただけ、多分違う…きつと『歳相応の女の子らしい道のこと』だったんだ。きつとそれは…とても大切な瞬間を失うってことだと思っから…

だから母さんは使わないで欲しいと願ったんだと思う。

「名前…はこの際良いわね？あなたにこの子を受け取ってもらいたい。ずっと待っていたのよ。私もこの子も」

確かにこのデバイスは私の本来の戦闘スタイルに合っていると思うけれど…

「新しいボディーが必要なのはわかっていたから勝手に彼を組み込んだことについては何も言わない…けど、彼を直接戦わせるなんて…」

「それがその子の望みでも…かしら？」

ローザは真剣な眼差しで私に問いかける。

そういえばそうだ。初めて会ったあの時も…白い魔導士の女の子と戦った時も…二人組に襲われた時も…

彼は私を守ってくれたのではなかったか？

自らの意志で。

彼の望みは…守られることではなく私と一緒に戦うことなのではな

いか。共に…一体となつて…

「…一緒に…戦ってくれるの…？君」

私の問いに彼は返答をする。

彼の答えは…

とあるマンションの一室

「無事に渡せたわね」

研究室じみた部屋でローザは安堵の息を吐いた。自分の技術の全てを込めて作り上げた最高傑作。管理局に背いてでも守りたかった結晶。それが今、巡り会うべくして出会った少女と共に羽ばたいていた。

もう思い残すこともないだろう。

「願わくばあの子達が…私を滅ぼしてくださいように」

これが私という人間の最後の良心。託した最愛の我が子と、そのマスターへの…

私は間もなく闇に飲み込まれるだろう。抗う術は無い。

私という人間の二面性…それが今失われようとしている。

そして悪意しか残れないというのなら…せめて希望を持ちたかった…

「最後に抵抗させてもらったわよ。あなたはつまらない小細工と嗤うと思うけれど…これが精一杯…私は私が居た証を残すわ…私は消えるけれど…あの子達が残る…私の行動まであなたの思い通りにはならないわよ…セシリア…！！」

そして、『セシリア・ローザ』は消えた。後に残ったのは悪意の象徴たるマリス…

凶華に彩られた悪姫の嘲り嗤う響きだけだった。

第十五話：夢の中で（後書き）

はるかとなつき

互いになのは達と違う巡り会い方をした二人

一人は友人として

一人は敵として

温かな日常を手に入れた者と

より深い茨の道へと沈んでゆく者

互いに譲れない信念があるからこそ、少女達は再び出会う。

戦場の空で

第十六話：僅かな希望（前書き）

お久しぶりです。

第十六話：僅かな希望

「時空管理局し級次元航行船アースラ」

「と、言うことで、私のマスターはまごうことなき正真正銘の聖女なのです」

「いや…」と言うことでと言われてもな…俄には信じがたい話だ…」

アストラディアが説明したのは、彼女が所属する聖十字教会のことと、聖女という存在のことについてだった。

聖十字教会とはざっくり言うてしまえば、『聖具』と呼ばれる武器を用いた異端者専門の武装教会のことだ。其処では敬虔なるシスター達が日夜異端殲滅に奔走しているらしい。勿論表向きは普通の十字教の教会だが、それらよりもより深く神話に精通した教会ということになる。

そして聖女とは即ち、『救世主・メサイア』たる者のことで世界の危機を救うことが使命の信託者のことらしい。アストラディアは彼女専用の杖だそうだ。

「俄かには信じがたかったのは私達も同じようなものです。私達の世界にも魔法はありますが、あなた方の知る魔法とは形式も違いますし」

「そうなのか…?」

「ええ。先ず、前提として魔法とはとても貴重な力です。魔力を伴

った媒体とリンクすることによって、回路を形成することが出来る者が扱えるのが魔法。それに対し、極一般的なのはいわゆる魔術に近いものだろうか。魔術は奇跡を扱うわけではありませんからね。私に言わせてみれば模型を組み立てるようなもの。しっかりと手筈を組んでいれば完成します。そういうマニュアルの無い力を私達は魔法と呼んでいるのです」

アストラディアの説明にクロノは若干顔をひきつらせながら意見を述べる。

「それでは常識も通用しないような力ってことじゃないか…だがそんなものを扱っている様には見えないぞ？君のマスターは。どうなんだ？はるか」

「ほえ？」

話題の中心にいるべき当の本人はなんと呆けていた。これにはクロノも頭を抱えるしかない。

「…難しい話はさっぱり理解出来ませんが…あれでもマスターなんですよ」

「あれでもってなんだよう！？」

毒舌アストラディアにはるかには不服だと言わんばかりに反論する。アストラディアは無視して

「まあ、この世界に来てから設定をそちらの世界のものに合わせたようですから、運用している力に違いが感じられないのも無理はないでしょう」

「成る程ね…道理で違いがわからないわけだ…」

「ふむ」と思案するクロノだったがそこヘルシアが話しかけてきた。

「そつちの話は粗方済んだんだろ？なら今度は目前の問題の番だよな？」

「そうですね。私から語れることは大ざっぱにはこんな所ですし」

アストラディアも同意したらしく、皆、一斉になのはへ視線を向ける。

「…！？えーと…にやはは…」

苦笑するのはへ先ずはクロノが疑問を口にした。

「君は件の少女と交戦していたわけだが…君のことだろうからな…君から仕掛けたわけではないんだろ？」

「あ…うん。レイジングハートと練習していたら突然あの子が現れて…」

「…デバイスを所持している所と魔法を使用している所から管理局でなくとも管理局になんらかの関係がある人物だと思われたんだろ…うな…まあお前達がおっ始めたおかげで発見出来ただけだよ」

ルシアが見解を述べる。クロノやエリスも同意見のようだ。これまで接触の無かったなのはがこれ以外の理由で襲われる誘因は今のところ見当たらない。

「フェイトが駆け付けた時には既に戦闘は始まっていたのか？」

「……………」

クロノがフェイトに問いかけるがフェイトは何処か上の空と言った状態らしく

「フェイトちゃん？」

「えっ！？あ…」

「君にも話を聞きたいんだが…大丈夫か…？」

「大丈夫です…」

なのはは心配そうにフェイトを見つめる。フェイトはそれに笑顔で応えた。

「私が駆け付けた時にはもう戦闘は始まっていました…私はなのはを助けるのに必死で…」

「フェイトちゃんとは模擬戦をする約束だったから…お互いその練習をしようって…」

「それであの場に居合わせたわけか」

なのはの説明にクロノ達も納得したようだ。と、今度はなのはがルシアに問いかけてきた。

「あの…ルシアさん？」

「ん…？なんだ高町」

「ルシアさんのデバイス…どうしてあの力が発動してても動けたんですか？」

「ああ、それは」

「よつつつくぞ聞いてくれましたあつ！！」

「ふえ！？」

なのはの問いに応えたのはエリスだった。エリスは頭の上にクエスチオンマークを浮かべるのはなどお構いなしで語り始める。

「何を隠そうあのシステムに対抗するプログラムを開発したのはこの私！！エリスちゃんのだよ！！諸君！！」

エリスは呆気にとられるフェイト達そっちのけで力説し始めた。

「そもそも管理局の開発者達は万能性にこだわりすぎなのよねー？完璧主義って言うか？」

「いや…完璧じゃないと僕達は困」

「黙らっしやーらっぷー！！」

「「「（二回も黙れって言った！？）」「」「」

「もっと柔軟な発想を持たなきゃダメダメなの。てなわけで、このプログラムは一点特化型！！万能性なんてのは後付けで充分。大事なのは『今をどう活かすか』コレよ！！このプログラムは要はワクチンソフトなのよね。まあ医学的に言えば予防接種ってやつ？」

「予防接種？」

「うむ。簡単に言えば擬似的にあのシステムの負荷を生み出すのよ。ほんのちよつと。んで少しずつデバイスに抗体を付けさせるワケ。勿論あのシステムからの影響を受けないって点に関しては完璧を保証するぜ！！」

「現に私のデバイスは負荷を受けても問題なく動くことが出来た。効果は実証されている」

「私の持論ではデバイスは未知なる可能性を秘めているの。言わば進化の可能性ね。あなた達のデバイスがそうだったように…」

エリスはなのはとフェイトを見ながら意見を述べる。

「レイジングハートと…」

「バルディッシュが…」

「つまり、このワクチンソフトはデバイスを進化させるもの。だから私はこの子を『revolution・soft』と名付けることにしたのよ。長いから『ればそ』でも可」

「可能性か…だがそれだけでは実戦投入するには…」

「それは承知。でも、現状…これを打破出来るのはコレだけなのも事実よ…」

「…エリスはこんなんだが…仕事に関しては真面目なやつだ。手を抜くなんてことは有り得ないし、半端な覚悟で此処には立っていない」

「囑託魔導士ちゃん達…いや、レイジングハートとバルディッシュはどう？どの道今のままじゃ戦うには限界があるはずよ？」

エリスの問いかけにレイジングハートもバルディッシュも無言だったのだが

「…もう言うまでもなく決意は固まっているようですね？」

「わかるの！？アスト」

「私は今はデバイスですから…彼らの思いは伝わってきています。『そこに1パーセントでも可能性があるのなら…私達はマスターを守るためにその望みに懸けたい』…と」

「レイジングハート…」

「バルディッシュ…」

「責任は全部私が負う。だから私に懸けてくれないかな！！囑託魔導士ちゃん達も！！」

「…わかりました！！」

「私達も信じます!!」

『Thank you master』

「君達!？」

「ごめんなさいクロノくん!!でも…私もレイジングハートを信じていの!!」

「私も…バルディッシュを信じたい!!お願いクロノ!!」

「だが…しかし…」

渋るクロノをルシアはつつき耳元で話す。

「（お前も知ってるだろう?エリスのこと…あいつも繰り返したくないんだ…あんなこと…）」

クロノは思いつきり悩んでから「はあ」と息を吐いた。

「負けたよ。上に何とか掛け合ってみよう」

「ありがとうクロノくん!!」

「ありがとうクロノ!!」

『そうと決まれば行動は早い方が良いわね?』

次の瞬間、機を謀ったかのようにモニターが映った。そこに映っていたのは…

「母さ！？艦長！？」

「リンディさん！？」

「リンディ提督！？」

啞然とする一行に向けてリンディは語り出す。

『話は聞かせて貰いました。あなたの開発したソフトを対抗策の案の一つとして提出してみましよう』

「リンディさん！！」

嬉しそうななのは横でクロノは嘆息する。エリスは呆気に取られて口をぱくぱく開閉させていた。

『クロノ、エリスさんとルシアさんを艦長室へご案内して下さい。着任の報告もしなければなりませんからね？』

「了解しました。ルシア フレイヤ、エリス フェレスト、此方へ」

クロノの後を続いて二人も出て行く。残されたなのは、フェイト、はるか三人は顔を見合わせて黙り込んでいる。

暫く無言の時間が続いたのだが

「フェイトちゃん！！」

意を決したようになのはが口を開いた。

「っ！？どうしたの？なのは」

「えっと…すんごく聞きにくいことだし…話したくないかもなんだけど…フェイトちゃん、もしかしてあの子のこと知ってる…の？」

「えっ！？」

「…フェイトちゃんあの子のこと見て凄く驚いてたから…それに『なつき』って…」

フェイトは少しの間俯いていたのだが

「いやっあのね！！ちょこつと気になったただけなの！！それにフェイトちゃんさっきの話の時も何だか様子が…」

オロオロするなのは。フェイトは『くすっ』と笑ってなのはの手を取る。

「適わないな…なのはには」

フェイトは深呼吸をして、話を切り出した。

「確實ってわけじゃないんだけど…私、あの子を家に泊めた…」

「「えっ！？」」

「あつまだかも知れないってただだから！！」

驚愕するなのはとはるかにフェイトは慌てて言葉を付け加える。

「…じゃあ…なまえも…？」

なのはの問いにフェイトは頷く。

「名前は『藤咲 なつき』…でも魔力は感じなかったよ…」

「その子は今、何処に？」

はるかが問いかけるがフェイトはかぶりを振って

「わからないんだ…朝になったらいなくなってたから…」

「なつきちゃん…か…それで、フェイトちゃんはどつするの…ううん、『どうしたいの』だね？」

「私は…もう一度会って話したい…先ずはそれから…」

「だね…」

「ですね…」

「問題はどつやって会うかなんだけどね…」

くミッドチルダく

「止まれ！！君達、何処の所属だ？身分を証明するようなものを持しているのか？」

「・・・所属：ねえ：秘密ってのはダメだよなあ：んー説明も面倒だし…」

「何をブツブツ言っている！！身分証明が無いなら」

「うむ。やっぱり面倒だ。リベリオン」

『Barrier Jacket set up』

第十六話：僅かな希望（後書き）

火山に採掘に行ったりしてたらこんなことに…

狩りもほどほどにしないといけませんね…

十七話・現れる影【前編】（前書き）

久々過ぎですね…

十七話：現れる影【前編】

くミッドチルダく

「うーん…物足りない相手だったなあ…」

さやのは眼下の管理局の陸戦魔導士を踏みつけながらポツリと呟く。

「さやのくん、そっちはどうなくん？」

「おお、かりん。今終わった所だ。成果は上々だよ。なかなかの代物だなこのシステムは」

「あのロストログアのシステムをバックアップして擬似システムを作るなんて、忍足はんも怖いお人やねーほんま」

感心するかりんにさやのも同意し頷く。

「寧ろ末恐ろしいよ…あの男…本当に…何者なんだろうな…」

「せやけど、ここまでひたすら隠れてお仕事やったのに…ええの？
こんなあからさまに接触して」

確かにこれまでさやの達は一切管理局と関わらずに動いてきた。さやのは首を傾げながらも

「良いんだよ。多分」

「首傾げとるやん。全く納得しとらんのとちゃう？」

「まあな。何を考えているのやら…あの男は…」

「同時刻ミッドチルダ」

「ってことは毎日無限書庫に籠もりきりになんのか？」

「そうなるだろうね…」

ヴィータとユーノはミッドチルダの街を歩いていた。はやてを初め守護騎士達はデバイスの調整を受けるためにミッドまで足を運んでいたのだが、一足早く調整を終えたヴィータが局内をぶらぶらしていると、偶然ユーノに会い、丁度小腹も空いてきた頃だったので何か珍しい食べ物でも買ってくるかと二人で街に出掛けたわけだ。

「お前も大変だな…」

「調べるのは好きだしこういうのは慣れっこさ。そういえばなのは達は？」

「あいつらのデバイスは調整に時間がかかるらしいから別の日にするんだってさ。特にアストラディアはじっくり調べたいってマリエルが言ってた」

「初見のデバイスだしね…調整も今回が初だし」

「ああ、マスターが頼りねえけどな…ん？」

皮肉を言うヴィータだったが、何かを見つけたらしい。じっとその方向を見ている。

「どうしたの？ヴィータ」

「あそこに倒れてるの…ありゃあ…っ！？（管理局の人間じゃねえかつ！？あの二人組がやったのか！？）」

「ちよっヴィータ！？」

突然走り出したヴィータをユーノも追いかける。

やがて足を止めたヴィータの前には二人の人影がいた。

「おい…お前ら…何してやがる！！」

ヴィータの怒号に二人が振り向く。

「ん…？おや可愛い嬢ちゃんがこんな所に」

「言動も即座にカメラ取り出してはあはあ言ってる所もただの変質者や。さやのん」

なんだ…？こいつら…

「嬢ちゃんじゃねえ！！時空管理局だ！！」

「っ！？へえ？管理局…ねえ？」

っ！？こいつら…変だけど…いきなり殺気が…雰囲気も変わりやがった…！！

「…ユーノ…管理局とシグナム達に連絡を…こいつらヤバいし念話も妨害されちまつてる…!!」

「…わかった!! ヴィータも気を付けて!!」

「ああ。あたしだって守護騎士の一人だ。此処は『鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン』に任せとけ!!」

ユーノは頷くと走り出す。

『私はあの少年を追うよ。かりん、ここは任せた』

『おっけー。ここは任せとき』

「っ!?! させねえ!!」

ヴィータは瞬時にグラーフアイゼンを起動させ二人に振り下ろす。

鳴り響く轟音、しかしヴィータに手応えは無く

「…っ!?!」

「君、ヴィータやったっけ? パワータイプなん? 奇遇やね。ウチもパワータイプなんよ…?」

「っ!?! (いとも簡単にアイゼンを受け止めやがった!?)」

一瞬、目を見開くヴィータだが、彼女は即座に距離を取るとアイゼンを構え直す。

「申し遅れたわ。ウチはかりん。この子は愛機のアクセレイドや。以後よろしゅうな？」

自己紹介を終えるとかりんは即座に大剣を天に向かって掲げる。

その姿はどう見ても隙だらけだが

「（あの隙はどう見ても向かってこいっていう挑発だよな…ならここは）アイゼン！！」

『J a w o h l（了解）』

ヴィータは左手に赤く発光する鉄の球体を作り出し、それを高く放る

『S c h w a l b e f l i e g e n』

そしてグラーフアイゼンで球体を思いっきり打ち放つ。

シュワルベフリーゲンは牽制用追尾弾のことだ。対人戦に置いてがむしゃらに突っ込むことは非常に危険なことだ。よってこの牽制は重要な役割を持つ。

異なる軌道で放たれた3つの追尾弾がかりんへ向かっていくが

「いてこましたれ！！アクセレイド！！」

『G a i a w a v e』

振り下ろされたアクセレイドは大地へと突き刺さり、地表を抉りながら突き進む衝撃波を生み出す。2つの魔力は真っ向からぶつかり

合い眩い閃光を放つ。

やがて爆煙を上げて2つの力は鎮静するもヴィータは追撃の手を緩めず

「畳みかけるぞ！！アイゼン！！」

『R a k e t e n f o r m』

グラーファイゼンは応答し、ラケーテンフォルムへと変形する。ラケーテンフォルムはグラーファイゼンの突撃形態だ。ブースターと障壁を打ち砕くピックが新たに形成されており、その一撃はかつて幾度となくバルディッシュの攻撃を凌いできたレイジングハートの強固なプロテクションを粉々に砕き、あまつさえなのはバリアジヤケットを損傷させた程の力だ。その一振りを携え、ヴィータはかりんへと特攻する。グラーファイゼンのブースターに火が灯り、その勢いをさらに底上げし

爆煙の中から鉄槌の騎士が姿を現す。

「んなっ！？」

『p r o t e c t i o n』

かりんはアクセレイドに指令を送り即座に魔力障壁を展開する。

「おおおおおおおおおおおおおっ！！」

ヴィータがグラーファイゼンを振り下ろしかりんの障壁がこれを防ぐ。

だが

「ぶち抜けーっ!」

鉄槌の騎士と鉄の伯爵の本領はここからだった。

『Jawohl（了解）』

グラーファイゼンはマスターの信頼に応え、カートリッジをロードする。

そう…カートリッジシステム。魔力を込めたカートリッジを装填し、素早く魔力を補充すると同時に魔力を爆発的に高める機能だ。

即ち、消耗した魔力障壁に防げる道理はない。

「へにゃあーっ!」

かりんの障壁は粉々に碎かれ、彼女は間のぬけた声を上げてアクセレイドごと突き当たりの壁まで吹っ飛ばされていった。

くミッドチルダ市街上空

ヴィータと別れたユーノは仲間と合流すべく本局を目指していた。

だが、それは容易な事では無いらしい。何故なら…

「やれやれ…逃げ切れるわけも無いだろうに頑張るなあ君も」

「まだそうと決まったわけじゃないし、こんな所で落とされるわけにもいかない!!」

コーノはもう一人のアンノウンの少女に追われているのだ。

「そうは言っても君、空戦軌道は得意じゃ無さそうだぞ？先程からバインド位しかしてきていないし…私の攻撃を防ぐその障壁は大したものだが…」

「バインドは全部避けられてるけどね…（見透かされてるな…やっぱり…）」

「私は縛られるのより縛る方が好みでね？」

「何の話…？」

「君にはまだ早かった話かな…？いや、今にわかるさ」

『Drive（起動）』

刹那、信じられないことが起こる。

「なっ!？」

コーノの体は四方八方から無数の鎖で宙に縛られていた。

「バインドっ!？（それもこの数を瞬時にだっ!？）くそっ設置型か!!いや、でも…!？」

先程までバインドの反応は一切無かったはずだ。設置型にしてもこの数は流石に多すぎる。

「非常識かな？だがこれは現実だ。すまないね少年。理不尽な最後だがこちらも仕事でね……！！」

「（殺られるっ！？転移魔法もこれじゃあ間に合わない！？）」

さやのは不適に笑みを浮かべ、攻撃態勢に入る。が、彼女が柄に手をかけようとした直後

「飛竜一閃……！！」

紫色の閃光が、鎖を切り裂いた。

「……何？」

「これって……！！」

更に鎖が切り裂かれていき、バインドが跡形も無くなった頃、その人物は姿を現した。紫色の魔力光……其れ即ち

「……誰かな……？お楽しみ……じゃなかった、私の仕事の邪魔をするやつは……！！」

彼女は閉じていた目を見開き、静かに告げる。

「守護騎士が将、剣の騎士シグナム……そして炎の魔剣レヴァンティン」

「シグナム!!」

「無事だったようだな」

「通信妨害してりゃあ…そら気付かれて当然だわな…」

完全無欠の大勝利コースを邪魔されてげんなりするさやのだが、そこへさらにザフィーラがシグナム達と合流する。

「…おいおい…3対1は流石に部が悪いぞ…これは」

更にげんなりするさやの。

『ザフィーラ、スクライアを頼む』

『心得た。気を付けろ…シグナム』

『ああ…お前もな』

二人は通信を交わし、シグナムだけが場に残った。

「お？域な計らいってやつ？それとも私程度、一人で充分ってやつかい？」

「違うな…お前を甘く見ているわけではない…これは互いに信頼しているからこそ取れる行動だ。ザフィーラは盾の守護獣…お前に他に仲間がいようと…必ず守りきるだろう」

「成る程…悪くない関係だ。私らもそういう関係が築ければもう少し仕事も楽なのだろうが…」

「…仲間では無いのか？」

「建前としては…かな？どちらかと言えば腐れ縁…か？まあ共通している所は好戦的って点かな？そちらさんも話し合いで済むとは思ってないんだろう？」

シグナムは残念そうに短く溜め息をつく。

「やはり…こうなるか…目的は何だ？」

「さあ？私が知りたい位だ」

さやのはあっけらかんとした調子で答える。

「…一つ問いたい。若き剣士よ…お前の本心は…何処にある…？」

シグナムの言葉を受け、さやのは若干俯くが…

「何が言いたいのかな？管理局のお姉さん…！！」

即座に顔を上げるとその瞳には殺意が込められていた。

「…っ！？」

直後、さやのの姿が消える。シグナムは悪寒を感じ取ると、すぐさまレヴァンティンを構えた。既に懐に入られていたことを空気で感じ取っていたのだ。

瞬間、レヴァンティンとリベリオンが火花を散らす。

「こんな態勢で済まないがそちらさんが名乗って此方が名乗らないわけにもいかない。私は『禄宵 さやの』そして相棒のリベリオンだ」

「…惜しいな…その歳でこの太刀筋…同じ剣士ならばこのような形でなければ通じ合う所もあっただろうに…」

「どうかな？そちらは騎士流、対する此方は亜流だ。それでも通じ合えるものかねえ…？」

シグナムとさやのは互いの剣を弾き合って距離を取る。両者が剣を振るったのは同時だ。

「今は止む終えんか…ならば…剣の騎士シグナム…推して参る！！」

十七話：現れる影【前編】（後書き）

双方での戦闘が勃発です。ヴィータやシグナムの戦闘は今回が初めてですね。次の更新はまた何時になるやら…なるべく早くとは思っているのですがね…

それではまた…

第十八話：現れる影【後編】（前書き）

ドイツ語は難しいですね…

第十八話：現れる影【後編】

（海鳴海上上空）

「やああああああっ！！」

「はああああああっ！！」

ヴィータとシグナムがミッドで交戦している頃、海鳴でも激しいバトルが展開されていた。空を切り裂く金色の雷光と青空を染め上げる黒き極光

即ちフェイトとはるかである。

「撃ち抜け！！雷刃！！ファイア！！」

『Plasma lancer』

フェイトは発生させたスフィア（発射体）から槍状に硬化させた魔力弾を作り出し、それを放つ。

対するはるか

「っとと！！お返しです！！アルテマシュート！！」

『Ultima shoot』

彼女はプラズマランサーを避けると高速魔力弾を数発撃ち放つ。

フェイトは放たれた魔力弾の速度に一瞬驚くが、それでも全てを避ける。

そこへ

「アスト…コードガントレ!!」

『G a u n t l e f o r m』

アストラディアを杖から鉄甲形態へと変形させたはるかが特攻を仕掛ける。

「っ!!バルディッシュ!!」

『H a k e n f o r m』

フェイトはバルディッシュをハーケンフォームへと変形させて迎え撃つ。

「ハーケンセイバー!!」

彼女はハーケンフォームの刃をはるかに向かって飛ばす。光刃は誘導性能を持ち、ロックした対象に向かって軌道を変化させる。

はるかは臆することなく光刃へと己の右拳をぶつけた。

「くっ!!うあああああっ!!」

彼女は空いている左拳を光刃へと向けると掌に周辺の魔力を集め始め

「収束砲！？あの態勢から……！？」

どれだけの耐久性度を持っているのかと愕然とするフェイトだが待つてはくれなさそうだ。こうしている間にも、はるかの掌には極大の魔力スフィアが形成されつつある。

Ultimabast

「アルテマバースト……いっけえええええええええつ！！」

光刃がはるかの魔力を削らんとする時間を利用し、充分にチャージされた一撃が放たれんとするその刹那

Saberexploder

フェイトはセイバーエクスプロードのトリガーコードで瞬時に光刃を爆発させる。それが幸を成したのかアルテマバーストの照準がブレた。直後、黒き極太の魔力光が放たれる。フェイトは全力で回避に専念した。

結果、直撃を免れ、事なきを得る。よく見るとマントの右端が消し飛んでいた。直撃すれば一撃でノックアウトだったことは想像に容易である。

「魔力収束は高位スキルなんだけど……技術に乗っ取って使用しているみたいだし……はるかって本当に素人？そうは思えないな……」

「そう……ですか？……まあ過去に色々ありましたから……」

「空戦機動シザースやブレイクも飲み込みが早いし…はるかにはセン

スがあるのかな…？」

「どうせならもっと別の分野でセンスが欲しかったよ…」

フェイトの言葉を受けてはるかは苦笑しながら言う。

「でも…私もバルディッシュも…やられっぱなしでは終わってないよ？」

「……へ？」

次の瞬間、春香の両腕が正方形のバインドで宙に固定される。

「バインドって言うて…所謂拘束魔法。高威力の魔法を外さないように当てる時にも重宝するんだ」

「高威力…魔法…」

はるかは何か嫌な空気を肌で感じ取りごくりと息を飲む。

『Plasma smasher』

フェイトは左手の掌に魔力を溜め

「プラズマァーっ…！」

それをはるかに向けると

「スマッシュァーっ…！」

勢いよく放つ。

「ひゃあーっ!?!」

『マスター!?!早く防御魔法!?!早く!?!張って下さいってばあっ
!?!』

テンパったはるかへと、プラズマスマッシャーは容赦なく直撃するのだった。

「…彼女…あれ位でテンパってどうするんだ…」

クロノ ハラオウンは離れた場所で模擬戦の様子を眺めていた。初の模擬戦はどうかやらフェイトの勝利という形で決着が着いたようだ。

「…それで…君は例のアンノウンということの良いのか?」

クロノは背に広がる空に佇む人物に向かって尋ねる。

「……………(その物言いにその姿…この人は明確に管理局ってわかるね。アンノウン…まあそう呼ばれても仕方ないかな…)」

「どうやらそうみたいだね。君から僕達の前に現れるなんて…なのはの時もそうだったが、ここ最近はやけに積極的みたいなんだが…?」

「(…それもそう取られても仕方ないか…)あの時の選択は良くなかった…自分でもそう思う…けど」

『けど』…？

クロノは付け足された否定の言葉に疑問を覚える。

「（…あの時の選択が結果的に私に新しい道を示してくれたのだとしたら…この子の本当の気持ちに気付くきっかけになったのだとしたら…）間違っではないなかったかも知れない」

間違いではない？

どういうことだろうか？彼女にとってあの時の状況はなのはに仕掛けず、気付かれないように離脱するのが最良の筈である。理解が来ないとクロノは更に困惑する。

「どういう意味だ？…いや…僕達を敵視しているのなら教えてなどくれないか…」

「…ただ逃げ回るだけじゃ状況は何も変わらない…だから…切り開きに來たの…」

「…道は切り開くもの…か…君にも譲れない信念があるんだな」

「私と全力で戦って欲しい。勿論負ければ拘束してくれて構わない…」

「…正々堂々とこちらの戦力を削ぎに來たというわけか…」

「（ローザの持っていたデータが正しいのなら…この子の願いを叶えるのにはどうしてもあなた達と接触しないといけない…）私は…この子の願いを叶えてあげたいだけ…」

「ロストロギアの願い…？君は」

「デイスヴァニティ」

『0 jacket』

クロノが聞き返す間もなく、眼前の少女は光に包まれる。負を連想させる暗き光が迸り、灰色のバリアジャケットを身に纏った少女が姿を現す。

戦闘態勢への移行が完了したかに思えた少女だったが

「セイヴゼファイル」

更なるデバイスの名が呼ばれる。

『Zephyr jacket』

瞬間、少女は更に眩い光を纏い

『cross barrier jacket』

二機のデバイスの声が重なった。

クロノは目の前の光景に一層の緊張感を覚える。未知なるデバイスの存在：クロノの頬を一筋の汗が伝う。

現れたその姿は『漆黒』

ジャケットの形状はシンプルだが、細かな作りは複雑だ。

至る所にスリットがあり、肌は露出しているし、長い布を縦に刻んだようなスカートは、当然だが太もみを隠しきれていない。そもそも防御を前提として作られたバリアジャケットならばこうはならないだろうという形状を具現したような出で立ちだった。白く染まつた髪に赤い瞳…凶悪さと言うよりは優美さを思わせる眼差しだ。静草はるかの話ではとても虚ろな瞳ということだったが、今の彼女の瞳からは強い決意の意志を感じる。

「結局はこうなるのか…経験上避けられないとは薄々感じていたが…つまり君は『僕達と闘う意志』を固めたということなんだな？」

「…立ち向かわないと道が切り開けないと思った…それだけだ」

「…僕には君の拘束許可が出ている、素直に投降してくれるのなら悪いようにはしない。だが」

クロノは懷からカード型のデバイスを取り出すとそれを起動させる。

『氷結の杖・デュランダル』

最高最速の処理能力を持つストレージデバイス。一度放たれば相手は一瞬の内に氷のオブジェと化す。

少女はクロノがデュランダルを構えるのを見届けると、自身のパートナーを取り出す。

『武器』としてではなく、『刃』としてでもなく、『パートナー』を。共に闘うことを誓ってくれた相棒として。

少女、なつきはそれに応える。

風のデバイス、『セイヴゼフィルス』

その初陣は奇しくも強敵との戦闘となった。

「それはみんな言ってたよ…けど…私はまだ、拘束される気も投降する気もない…まだ…何も成し遂げてないんだから…」

〈海鳴市臨海公園〉

「だめだ…何度やっても繋がらないよフェイトちゃん…!」

「こつちもだ…クロノ…何かあったのかな…?心配だよ…」

「…ひょっとしてあの子…でしょうか?だとしたら…」

なのは、フェイト、はるか三人はクロノと一向に連絡が取れないことに違和感を感じていた。何か胸騒ぎがする…

「…ともかくクロノと合流してみよう。そうすればはっきりする…!」

「だね…!!行ってみよう!!フェイトちゃん!!はるかちゃん!!」

〈ミッドチルダ〉

ヴィータの猛攻は鉄槌の騎士の名に恥じぬ破壊力を叩き出していた。

引きちぎられ、宙を舞うバリアジャケットの欠片、飛び散る鮮血は路面に付着し、遅れて血溜まりが出来る。

「つくあ…!？」

ヴィータの一撃は誰が見ても決まっていた。

が

ヴィータの脇腹からワイヤーが伸びていた。ワイヤーは血を滴らせ、水滴のように糸を伝い地面に落ち続けている。

結論から言つて、アクセレイドは壁に叩き付けられはしたものの、傷一つ無かった。未だ健在している大剣の柄にはかりんが不敵な笑みを浮かべて足組みをし、座っている。ヴィータの脇腹を貫通しているワイヤーを指で弄びながら。

「いやゝほんまに惜しかったわあゝ？もう少しでノックアウトやった。鉄槌の騎士やったつけ？ええ突撃しよるなあ？」

「つるせえよ…この…余裕綽々な顔しやがって…」

かりんは『にいつ』と笑みを浮かべると苦悶の表情のヴィータを楽しそうに眺め手の中のワイヤーを動かす。

「つくあああつ!？」

「あはははははははははっ!!楽しくてたまらんわ!!ほら、もつと呻けよ騎士!!」

「デメエ…これ位であたしは倒れねーぞ…！！こんなの全然痛くねえ…全然痛くなんかねえ！！」

ヴィータはグラーファイゼンを握り締めると、肉が裂けるのも構わず体を動かす。

「手負いの兎が…さつさとウチに喰われちまえばええっちゅーとるんのがわからへんの？黙ってても挽き肉になるのが定めやる？ここはあつ…！」

かりんはヴィータからワイヤーを強引に引き抜くとアクセレイドの切っ先をヴィータへと向ける。

「往生せえやあつ…！特攻がお前だけの専売特許やと思ったら大間違いやぞおおおおおおおつ…！」

アクセレイドのブースターに火が灯り、切っ先に魔力が集まってく。爆発の如き熱風と共に、その体が弾けた。

そして轟音。

華奢な体が宙を舞い、魔力障壁を貫かれ、バリアジャケットが霧散する。インナーが露わになり、少女の体がガリガリと音を立て地を滑った。

ただし、その音を立てたのは突撃した筈のかりんである。

「『マニユーバACS…！？』これって…！」

ヴィータとかりんの間に入ると同時にかりんへと特攻を仕掛けたのは白の帽子に、白と黒を基調とした甲冑を纏う少女、優しき心と暖かな温もりを持つ、その少女は

「私の家族に酷いことしたら…許さへんよ!!」

名を『八神 はやて』と言う。

くミッドチルダ上空へ

一方、上空でも激しい闘いが繰り広げられていた。紫色の魔力光と緑色の魔力光が絡み合いながら、ぶつかり合い、上昇していく。空戦機動におけるシザースとブレイクだ。高速でぶつかり合うブレイクは零距离まで接近するため一撃が命取りに成りかねない威力を誇る。

シグナムは華麗な身のこなしから瞬時に攻撃に転ずる。

「一閃空牙!!」

彼女は相手の懷まで踏み込むと剣圧を放出する。研ぎ澄まされた剣圧は、それだけで立派な凶器となる。

「くっ!?!このっ!!」

『Defensor』

さやのは手のひらに魔力障壁を作り出すと剣圧を防ぐ。

しかし

「（甘いっ！！）レヴァンティン！！」

『J a w o h l ・ N a c h l a d e n（了解。装填）』

レヴァンティンはカートリッジをロードし、魔力を充填する。

「C V K 7 9 2 ！？」

さやのは驚愕すると同時に今度こそ魔力障壁を粉々に砕かれ、吹き飛ばされる。

彼女は海面すれまで急速落下したがギリギリでその場に留まる。

「…あの一瞬で後退しレヴァンティン自体の直撃を避けるとは…それに…何かおかしい…」

さやのの戦い方に何かしらの違和感を感じるシグナム。対するさやのは

「危ない危ない…ん？おお！！何だかちょっとセクシーになっている…！！」

さやののバリアジャケットはシグナムの剣圧を受けて、へその辺りの生地が裂けて、肌が露出していた。

「前から露出が少ないなあと感じていたからこれは良いとして…やはり防御力が低いのがネックだな…」

「何をぶつぶつと言っている？」

さやのの行動を怪訝とした目で見るシグナムだが、さやのはあっけらかんとした調子で

「いやあーお姉さんセクシーだなーって、スタイルも抜群だし、管理局なんかやってないでモデルになったら？儲かるよ？」

「悪いがかつて忠誠を誓い、今は我らを家族と言って頂ける主がいるのでな。それに主の友人や、好敵手と呼べる者もいる…この幸せを手放そうとは思わん」

「…家族か…まあ円満なら問題ないさ。ただ、それが時に重石となるケースもあるんだが…」

「…お前は…？」

「リベリオン」

『Clusterform』

シグナムが聞き返すのを待たずに少女のデバイスが変形する。

納刀した状態から鞘が縦横に広がり、鞘の内側に無数のビットが取り付けられていた。

「特とご覧あれ？機械仕掛けの花が織り成す死の舞踏を…！！」

直後、全てのビットがシグナムに向けて一斉に放たれる。

「っ！！（自在の軌道での全方位攻撃…！！前方のみなら捌き切れ

ないことも無いが…）レヴァンティン！！」

『Schlangeform』

レヴァンティンは即座に刃を細かく分離させるとそれを蛇のようにしならせる。レヴァンティンの刀身はシグナムを守るように渦を巻き、四方八方から放たれる魔力弾を弾いていく。

「変幻自在とは正にこの事か…まさか四面楚歌状態すら通じないとは…騎士とは器用なものだな？んー…だがまあ何時まで持つかな？」

シグナムはレヴァンティンの刀身を使って攻撃を弾いている。この状から反撃に転ずるためには、何か爆発的な広範囲魔法でビットを根刮ぎ破壊しない限りは難しいはずだ。

「持久戦か…はたまた予想外の打開策を繰り出すか…どちらにせよ私は撃ち続けるだけかねえ？」

「…随分と余裕のようだが…私はこのまま停滞状態を続けるつもりは無いぞ…！！」

『Explosion（爆発）』

シグナムは一瞬で刀身を繋ぎ直すと、即座にカートリッジをロードし、刀身に炎を纏わせる。そして剣圧だけで、周囲のビットを全て薙払う。

「ちよっ！？その身のこなしは反則じゃないか！？」

『さやのんさやのん！！』

鞘乃はシグナムの行動に驚愕するも、相方からの突然の通信に応じる。

『何だ？そっちは終わったのか？』

『逆っ！！逆ううっ！！ヤバいのが出てきたんよ！！なんか夜天の主とか言う女の子なんやけど魔力量が異常っていうか！？ともかくヤバいんよ！？』

『…あーそらあ恐らくこの騎士はん達の主やね。ほんなら一度合流しましょか？』

『ウチの方言真似すんな！！うー、ともかく了解や！！でも振り切れるかわからへんのやけど…』

『何、リベリオンを使うよ。それじゃあ戦闘中だから…じゃあな』

「主はやて…それにヴィータか」

「わかるのかい？状況把握能力に秀でているな。流石は将だね」

シグナムの言葉に鞘乃は感心したらしい。

「…それもある。だが何より私は主達を信じているからな」

「羨ましいね。その真っ直ぐさ…ひねくれ者には眩しく見えるよ。なあ、かりん？」

後ろに向かって言葉を投げかける鞘乃にシグナムは眉をひそめるが

「んー？いきなり何の話？」

刹那、大剣に乗った少女が姿を現す。

「なっ！？この短時間でどうやって!？」

さしものシグナムもこれには驚愕を露わにする。

「さうてね？ま、手品みたいなもんさ」

『シグナムっ！？いきなり女の子が消えて!？』

『落ち着いて下さい。主はやて。その少女ならば私の目の前に…』

『っ！？あの距離をどうやって!？』

『わかりません…ですが、幻覚ではありません。これは事実かと…』

『それが本当ならシグナムが大変やないか!!ってダメやヴィータ!!そんな体で加速なんてしたら!!…』

ヴィータは負傷しているのか…この者…侮れんな…

『合流は出来たけど…どないするん？』

『アレを使う。思ったより厳しそうだし、ここは一気に仕留めておきたいしな。大体、これからのことを考えればどうやったって何れはバレるんだし』

『どっちが主？』

『私が引き受けよう。私はどちらかと言えば受け身よりは』

『あーわかった。わかったからその先は言っな。ほんならちやっちやとやるで？』

「…さて、役者は揃わないが好都合だし、此方は攻めさせてもらうよ？騎士の将さん！！」

「来るか…！！だが例え数で負けていようと…」

「いや、一人だ」

「…まさか！？」

即座に返される言葉…その意味がシグナムにはわかってしまった。わかってしまったからこそ反応が遅れ…

「「ユニゾン・イン！！」」

直後、二人の声が重なって響いた。

第十八話：現れる影【後編】（後書き）

更新遅くて申し訳ありません…

第十九話：決着（前書き）

やっと更新です…

第十九話：決着

やはり彼に仕掛けたのは正解だったようだ。これまでに交戦した三人は応戦はしてくるだろうが、やむを得ずという感じのタイプだった気がする。戦闘を最低限のみに避けられるのなら出来れば巻き込みたくない。

『あの白い魔導士の子』には申し訳ないことしてしまったから今更なのかも知れないけど…

思えば、私は表面上は冷静でも何か根底的な所で冷静ではなかったのだろう。『あの時』の私は管理局へ確かな憎しみを抱いていた。

憎しみで戦つてはいけないということはわかつてはいたのに…である。

どうすれば良いか方向性も決まっていなかったため、何か苛立ちの捌け口が欲しかったのだろう。そうでもしなければメンタルを保てない位追い詰められていたのだと今になって気付く。

私の戦いが終わるとすればそれはあの白い魔導士によってだろうか…それとも…（あの金色の髪の…）

まあ…何時までも考え事なんてしてられないので、戦闘に頭を切り替えることにする。

『いきなり懷に飛び込むなんて…随分無茶してたなあ…私』

本来のスタンスを取り戻した私にとっては『以前の戦闘スタイル』

は愚かしいものである。

よって、初手で取るべき行動は

「ヴァニテイ、刃を……！」

『了解。牽制刃投射します』

私は右手の指と指の間に短刀を出現させ、それを黒い魔導士に向けて飛ばす。手裏剣を投げるように手首のスナップを利かせ短刀に加速を付ける。

放たれた短刀は4つ共避けられ、或いは捌かれ直撃には至らなかった。

但し、私は彼の怪訝な表情を見逃さない。

『……タイプツヴァイ』

『『了解。双剣形態』』

私は相手に避けられたまま飛び続けている短刀を剣の状態に変換させる。短刀二本で一セット。よって現れる剣は2つだ。

彼も短刀の変化に気付いたらしく、咄嗟に防護魔法を展開させたようだ。

けれど遅い……！！

私は双剣に魔力を繋げ、相手の背後から攻撃を仕掛ける。

「甘い!!」

黒い魔導士は防護魔法で背後から迫る双剣を防ぐ。

魔力が付加されているとは言え、支えの無い剣は防げるし、その間に仕掛けてくる私にも対応できると踏んだからこそその行動。

現に、彼にはそれだけの力量があるのだろう。

だが

「なんっ!？」

その支えの無い筈の双剣を防いだ瞬間、私本体が『其処に現れる』
なんて誰が想像出来ようか？

私が行ったことからくりは至極簡単なのだが、この一瞬で見破ることは難しいだろう。

寧ろ、そんな時間は与えない。

「確実に通す…!!」

『了解。システム0起動』

システムの起動と同時に相手の防護魔法が解除される。

何が起こったのかわからないと言った表情の彼に私は無慈悲なまでに鮮烈な一撃を叩きつけた。

剣の腹で。

「じっ！？」

横殴りの殴打はかなりの効果があったようで腹部を狙ったこともあり、一瞬で相手の動きを止めることが出来た。

が、

「…ティンガーっ！！」

突如出現した魔力の槍が私の頬を掠める。チリっという肌の焼ける音が聞こえ、遅れて血が流れて来た。流石は管理局の精鋭…一筋縄ではないか。

黒い魔導士は落下しながらも体勢を整える。

とは言え、ダメージはかなり与えた筈だろう。普段、魔法で防げる分、生身へのダメージは幾分か有効だと思う。

「この位の傷で熱くなっちゃダメだよ。デイスヴァニティ…この程度…これから幾らでも受ける傷なんだから…」

寧ろ私の場合、心へのダメージの方が遥かに大きいのだし…

「でも驚いた。お兄さんやっぱり強いんだね…出来ればあれで決めたかったんだけど…」

「伊達に執務官をしている訳ではないからね。寧ろ、ここで倒れる訳にはいかない」

「…それはそうだね…親の七光りなんて思われるわけにはいかないだろうし…」

「っ！？僕はそんな風に思ったことは…！！待て…何故君がそんなことを知っている…！？」

「読ませて貰ったから…誤解されそうだから言っておくけど…別にあなたを揺さぶろうなんて意図は無いよ？ただ本心が訊きたかっただけ」

けれど別の意図はあったりする。私の狙いは彼に『私は相手の記憶を読むことが出来る』という事実を認識させること。ご覧の通りだが、私は高出力の収束砲が撃てるわけでも無ければ、一発逆転の大威力魔法が使えるわけでもない。寧ろ攻撃魔法に関しては乏しいとさえ言える。

恐らく、私は弱い。彼らの中の誰よりも…当然だ。たかが二人の刺客に完膚無きまでに打ちのめされて

『あまつさえ命を落としてしまった』

そしてあるうことが自身の切り札を晒すという失態。退魔の一族とあるう者が聞いて呆れる。もっと無垢でありたかったと後悔する位だ。

おまけにあの切り札の使用はペナルティが大きすぎる。使えても後2～3回が限度…

『セイヴゼフィルスの防御能力を使うにはまだ早すぎる』

まだ早い…これから先、今以上の困難など五万と有り得る。ここで使うのは得策では無い。

と、ネガティブなことばかり脳内で羅列したが、かと言って勝算が無いわけでは無い。

「…念のため言うけど…勝利は確信しない方が良いと思う…」

そう、彼が勝利を確信した時、その時こそ

私の勝利は確定する。

…正直、僕はこの子に負けるとは思えなかった。攻撃は低威力。十分に障壁で防げるレベルだ。あの魔力無効のような効果も二度は通しない。魔力で編み込まれたバリアジャケットが解除されなかった所を見ると、恐らくだが効果範囲は狭い。刃に触れている部分…それも一瞬と言った所か。それならば、魔力が無効にされようと、攻撃を素手で防げば、デバイス自体での殴打で充分昏倒させられる自信がある。

だが一つ、疑問が残る。

『あれだけ多様していたあの広範囲魔力無効の能力を何故使って来ない？』

あれへの対応システムが無いことは僕の記憶を読んだのなら知らな

いはずは無い。

『まさか…ハツタリか…？』

だとすれば彼女には記憶を読むなんて能力は無いということになる…僕の情報に関しては管理局の人間から聞き出した可能性も考えられる。

それこそが彼女の狙いだとしたら…？

揺さぶる気はないなどと言いながら充分に揺さぶりをかけているじゃないか…この子は…

なら何故能力を使わない？ 思えば『静草 はるか』と戦っていた時も使って来なかった…らしい。となると何かカラクリがあるのか。条件が揃って、初めて起動するような…

僕が思考を巡らせていると、彼女に動きがあった。彼女は僕から一瞬視線を逸らすと

「…念のため言うけど…勝利は確信しない方が良いと思う…」

ポツリと…そう言った。

…まさか…

「…助言ありがとう。でも不可解なまでに親切なのは逆に不信がらせる」

能力の起動条件は暗示…勝利が確信出来る程の魔力攻撃による誘発…

そう思わせるのが狙いだ。ならば能力起動の条件は別にある！！悪いが僕は相手の言うことを鵜呑みにする程純粹ではない。

「ステインガーレイド…エクスキューションシフト！！」

僕は無数のステインガーを展開させる。普通ならば複数の相手に対して放つ魔法だが、ステインガーでは火力に不安が残る。

精鋭舞台がやられた理由がこれだ。彼らも自分と同じ結論に至っていた可能性はある。恐らく起動条件を満たしたとすれば…総攻撃による魔力蓄積か…いや、もっと吟味してから結論を出すべきか。だがここは敢えて乗るのも戦略…

勿論フェイクだが。

さあどう出る！！

彼女の表情が曇る。そして俯くと…

「…まあ…信じてくれるわけないよね…」

彼女は確かにそう呟いていた…

容赦なく無数のステインガーが放たれる。

防ぐか、捌き切るか避け切るか…直撃か…

考えられるパターンは様々だったが

「…0・0・0…」

次の瞬間、僕には何が起こったのか理解出来なかった。

ただ、視線の先に彼女は健在で爆発も無ければ黒煙も上がっておらず…無数に展開されていたスティングーも無く…

『まるで攻撃の事実が丸ごと無かったことにされたような…!?!』

「な…に…!?!」

どす…

刹那、鈍い音が聞こえる。

見れば、左の脇腹に、短刀が深く突き刺さっており、赤黒い血が、じわりと染み出してきていて…

「…さよなら…管理局のお兄さん。あなたはここでリタイアだ…」

彼女は短刀を勢いよく引き抜く。途端に、脇腹の傷は大量の血液を流し始めた。

意識が遠退く…失血の影響なのは明らかだった…

そして、僕の意識はここで途切れる。

くミッドチルダく

「やれやれ…派手にやりすぎたか？」

『お決まりみたいなベタな台詞やな。さやのん』

私の視界には一人の少女が浮かんでいた。ロングヘアーでエメラルドグリーンに髪を染め、眼鏡をかけている。巨大な大剣を担ぎ、圧倒的な存在感を持つアンノウン。

「シグナム…！！ヴィータっ！！こんな…」

私は地面に倒れて微動だにしない二人に呼びかける。二人共反応が無い。

私とヴィータが到着した時には既にシグナムは撃墜された後やった。私達も迎え撃ったけど結果は見ての通り…

私は知つとる…二人をこんな目に遭わせた力の正体を…

「ユニゾン…そんなんありが…」

『あれ？まだ一人残つとるやん？詰め甘いんとちゃう？さやのん』

「一種の茶目つ気みたいなものだろう。世界の」

「冗談でも笑えへんよ…！！痛うつ！？」

あかん…ダメージが重すぎて立てへん…この二人は戦闘慣れしとる…対する私は魔導士成り立てのひよっ子…いくら魔力が高くて実力がこんなに開いとつたら太刀打ち出来へん…！！

「そうか…残念だ…君もかなりの逸材なのだが管理局の者なら仕方あるまい。せめて苦しまずに…本当なら喘いで欲しいけど」

『煩惱と雑念は心の中に閉まるときいや…!』

「まだや…まだ…私はっ!!」

こんな所で終われへん!!…こんなやつたら…リインフォースに合わせる顔があらへん!!

「その通りです…主はやて…!!」

え…? シグナム…!?

「はやてを…守らないと…!! 鉄槌の騎士は…はやての騎士は!!…こんな位で音を上げる程やわじゃねえんだ!!」

グイータ!?

「二人共!! 大丈夫なん!？」

私はボロボロの二人に声を掛ける。二人共、とても戦えるダメージではあらへん…せやけど…

「ご心配をお掛けしてしまい申し訳ありません。ですが…ここで主を守れなければそれこそ守護騎士の名折れ!!」

「大丈夫…これ位の傷…どうってこと無いよ…何よりはやてを失うのなんて嫌だ!! 絶対嫌だ!! もう…主が消えるのも…誰かが居なくなるのも嫌なんだ!! だから絶対負けない!!」

「シグナム…ヴィータ…二人共…おおきにな…せやけど無理だけは
させたくあらへん…せやから私も戦う！！一緒に戦わせて欲しい！
！」

二人共一瞬驚いたようやけど顔を綻ばせて頷いてくれた。そうや…
この戦い…負けられへん！！

「…なんと言うか…すっかり悪役だな…私ら」

『もう板に付いてきたよ？どうする？なんや…あれだけ決意に満ち
てると忍びないと言うか…』

「んー…だがまあ捕まるわけにいかない以上…やるしか無いだろう
…しっかし熱いねえ？彼女ら…嫌いじゃないがな…！！」

来る！！全身が痛くて悲鳴を上げとるけどやるしかあらへん！！

敵は容赦なく斬り込んできた。シグナムもヴィータも構える。考え
ろ…考えるんや…この状況をひっくり返す策を…！！

導き出した答え…！！それはーっ！！

「シャルつー！！」

「お任せ下さい！！はやてちゃん！！」

後方から姿を現したシャルが、私達の前に降り立つ。

「風の護盾よ！！」

シャマルは両手を前に突き出すと旋風の障壁を生み出し、それが相手の刃を阻んだ。

「っ！？新手か！！」

私は追撃の手を緩めない！！

「ザフィーラっ！！」

「鋼の軛よ！！」

私の声に呼応するように相手を挟み込むように地面から大量の柱が突き出す。

ザフィーラは上空で魔力を制御して…確実に相手を捕らえた！！

「っ！？何だこれはっ！！」

チャンスは今しかあらへん！！

「シグナムっ！！ヴィータっ！！」

「飛竜…一閃！！」

シグナムはレヴァンティンに炎を纏わせるとそれを衝撃波に乗せて放つ。

「テートリヒシュラーっクっ！！」

ヴィータは衝撃波と併走するように加速し、グラーフアイゼンを握

る手に力を込める。

「ちっ！？」

シグナムの飛竜一閃が相手の障壁を傷付け、ヴィータがそこへ渾身の一打を浴びせる。

「ぐっ！？」

「今度こそ…ブツ飛ばす！！うおおおおおおあーっ！！」
ヴィータは障壁をブチ抜くと、下から上へ相手を打ち上げる。

「ごっああああああっ！？」

余りの衝撃にユニゾンが空中で解けたらしい。せやけど…

「私は言っただけや…家族に手を出したら許さへんって…！！」

「ちよっ！？いつの間に空に！？ってそれってまさか…！？」

「高出力魔力砲撃…！？しまった…体制が立て直せな…！？」

私は魔法陣を展開させ、夜天の力を解放する…！！

「響け終焉の笛！！ラグナロクっ！！」

私の持つ最大威力の魔法！！これで…っ！！

「にゃあああああああああああーっ！？」

「死亡フラグ…乙！！私…みぎゃあああああーっ！？」

ラグナロクは空中で逃げ場の無い二人（涙目）に容赦なく直撃する。

勿論、非殺傷スタン設定で。

こうして戦いは一先ずの決着を迎える。

或いは勝利で。

「…ごめんなさい…それでも私は…」

負けるわけにはいかないんだ…

或いは敗北で…

第十九話：決着（後書き）

実は現段階でなつきの攻撃魔法はヴァニティランサーだけしか公開されていません。ただ、本人も言っている通り、大威力魔法もないのも確かです。そういう点でははるかの方が優れているのですが…
彼女は彼女で頭が弱いかも…

いやゝ守護騎士動かすの楽しいですねゝ

第二十話：伝えたい想い（前書き）

ついつい長くなってしまつと…調整が大変ですね

それではどうぞ

第二十話：伝えたい想い

く海鳴市海上へ

クロノとの連絡は未だに取れない。念話も通じないし…エイミィとも通信できない。

「…通信が妨害されてる…やっぱり何かあったんだ…」

「クロノくん…無事だよな？フェイトちゃん!!」

なのはが不安そうに話し掛けてくる。

「大丈夫…クロノは強いんだからきつと無事だよ!!」

「あ!!あそこ!!人影が見えますよ!!」

はるかが誰かを見つけたようだ。

けれど…クロノじゃ無かった…

其処に居たのは…

「…もう少し早くケリを付けていられたら…良かったかな…」

あの子だった。

まさか…クロノは…!?

「クロノさんっ!？」

はるかが叫ぶ。はるかの視線の先には、脇腹を血に染めたクロノが海岸で倒れている。

「クロノっ!？」

「そんな…クロノくんっ!？」

私となのはも叫ぶ。クロノが負けた? そんな…

「…金色の髪に優しい瞳…やっぱりあなたは…」

彼女は私から視線を逸らさずに語り掛けてくる。

「っ!？」

そう…か…彼女はやっぱり…

「…はるか、クロノをお願い…なのはは二人を守って!! 此処は私が抑えるから!!」

「でもっ!! フェイトちゃん!!」

「早くしないと手遅れになるかも知れない!! だから!!」

「…良いよ。行って」

え…?

「…行くなら早く…大丈夫、仲間は一人もいないから」

「…ありがとうございます。私、信じます！！あなたを！！」

はるかにはクロノを抱えると飛び去っていく。

少女ははるかの姿が見えなくなるのを見届けた後で、ホッと胸を撫で下ろした様子だった。

「…危なっかしい位純粹だね…あの子」

「…でも嘘は吐いてないよ。そうだね？」

なのはは少女に同意を求める。

少女はぷいと横を向くと「…まあその必要は無いし」と呟いていた。

なのはは「にやはは」と苦笑すると少女に語り掛ける。

「…ありがとう…で良いのかな？えっと…」

「なつき…」

「そう…！なつきちゃん…！…って…フェイト…ちゃん…？」

私がポツリと呟くとなのはは不安そうに私の顔を覗き込んできた。

「…フェイト…テストロッサ…出来ればこんな形で再会したく無かった…」

「…『藤咲 なつき』…君であって欲しく無かった…」

どうして…世界はこんなにも残酷なの…？

どうして…っ！！

「…それで…私を捕まえるのかな…フェイトは」

「っ！？それは…」

私達は管理局の囑託魔導士だ…だけど！！

「…話を聞かせて。全部…それからだ」

私がそう言うとなのはが満面の笑みで同意してくれた。

「フェイトちゃん…！！うん…！！」

なつきは私達から視線を逸らし、俯く。

「…調子狂うなあ…」

不意になつきが、そうポツリと呟いた。

そしてなつきの足元に魔法陣が展開される。

「っ！？なつきちゃん…！！」

なのはは必死に呼びかけるが彼女の意志は揺らがない。

フェイトはなのはを庇うように立ちはだかる。

「なつき！！話を」

「だからっ！！無駄なのっ！！そんなこと！！」

「っ！？」

「（私の願いは管理局には許容されない…わかり合える筈も無い…無駄なのよ…話し合いなんて…）」

なつきは震えていた。それが意味するものは『私となのはの想いをわかっている上での拒絶』だ。

けれど

「無駄なんかじゃないよっ！！」

なのはは引き下らない。

勿論…私も！！

「そっだ…絶対に…無駄じゃない！！無駄であつてたまるものか…！！」

「……………」

なつきは一瞬だけ驚くがそのまま黙り込む。

「…なつき、私もそうだった…」

「え…?」

「私も…そうだったんだ…以前の私は母さんに喜んで貰いたくて…必死だった…ロストログアは…ジュエルシードは母さんの夢で…私は、夢を叶えてあげたくて…それしか無かった。あの日、なのはに出会うまでは…」

「フエイトちゃん…」

「私にもなのはにも…戦う理由があつて…お互い、譲れない信念があったから…ぶつかり合った…それこそ血みどろの戦いだ…なのははずっと私に呼びかけてくれていた。何度も何度も何度も、私の名前を呼んでくれて…私と真っ直ぐに向き合ってくれた…なのに私は…周りが見えてなくて…だから、向き合っていかなきゃって思ったんだ。なのはと、自分と、母さんと、現実と…!」

なつきは無言で私の話を聞いている。

その表情はとても苦しそうで…昔の私を思い出す…

「現実には確かに甘くないよ…都合良く救いなんて無いかも知れない。でも、だからこそ乗り越えていかなきゃいけないんだ…!」

私はなつきに伝えたい…この想いを…迷わず、真っ直ぐに…!

私は微笑み、自分の気持ちを伝える。

「私はなつきと…ともだちになりたいんだ…」

「っ！？…と…もだ…ち…？」

「うん…ともだち」

伝えた。自分の気持ちを。きっと…なのはもあの時、こんな気持ちだったんだ。すごく切なくて…けれど温かくて、優しい…気持ち…

「フエイトちゃんっ！…うん！…うんうんうんっ！！」

私の言葉になのはは満面の笑みで何度も頷いてくれた。そう…私達の想いは一つだ。

「フエイト…それに…」

「なのは。『高町なのは』だよ。なつきちゃん」

「…私は…」

なつきは口を開く、が

突然、現れた何かが、彼女の体を縛り付けた。

「えっ！？」

「これは…！？蛇っ！？」

見れば空が切り裂かれ、そこから伸びた夥しい数の蛇がなつきを締め上げている。

そして、切り裂かれた空の向こうから、煌びやかなドレスを纏った

女が現れる。

「ごきげんよう？管理局の魔導士さん」

「何者だ…っ！！」

私はバルディッシュを構える。この女は危険だ。そう、体が訴えている。

「ロー…ザ…？」

なつきは驚愕の表情で女の顔を見つめていたが

「…あら？私とあの子の区別もつかないなんて…お仕置きが必要で
すわね？なつきさん？」

ドレス姿の女は不適に笑うと、蛇達に命令を送る。と、

「あっああああああっ！？」

途端になつきの四肢に巻き付いた蛇達が彼女を締め上げ始めた。

なつきは内臓を圧迫され、血を吐き出す。

「なつきっ！？」

「なつきちゃん！？止めて下さい！！どうしてこんなことするの！
？」

「何故？私にはその権利があるからですわ。故のお仕置きです。そ

れに…」

ドレス姿の女が指を鳴らすと空間が裂け、更に現れた蛇の群れが私となのはへと襲いかかる。

「くっ！！」

群れの動きは変則的で読めない。個々が完全な生物として機能している。

「フェイトちゃん！！これは…」

「気を付けてなのはっ！！この子達、一つ一つに意志がある！！！」

なのははアクセルシューター、私はプラズマランサーを放ち、蛇を捌くが、捌いた直後、

小さな爆発が起こった。

爆発は他の個体へと連動し、大爆発が起こる。

その爆発は二人の魔導士を、粉々にするには十分な威力だった。

嘘…

デタラメだった。まるで、街一つを焼き払って尚余りある程の大爆発…

如何に魔導士と言っても、この爆発に絶えられる筈は無かった。

この黒煙の向こうには既に誰もいない。私の視界には二度と、フェイトとあの白い魔導士の子…なのはの姿は映らない。

この女は何なんだ？何の為に現れて…何のために二人を殺した？

二人は何故死ななければならなかった？

どうして…ただ、敵にすら映っていなかった相手にこんな感情を抱く？

『ともだちになりたいんだ』

未だに耳から離れないその言葉。

私は…どう答えるつもりだったんだろう？

よろこんで…違うな。嫌だ…いや、そうじゃない気がする。答えるならそう…

『それはできない』

うん。多分これが正しい。なりたくないじゃない。できないんだ…
どうしても…

だって…私は…

けれど今となってはそう答えるべき相手も失われてしまった…

結局、この感情はわからずじまいなのか…

いつそ…私も殺してくれたら良かったのに。奇しくも爆発は女には届かず、女の近くにいた私にも届くことは無かった。

黒煙が晴れる。何も無い空間が見えてくる。

その筈だった。

「え…？」

果たして、黒煙の向こうには、二人の姿があった。

そして…空間の中央。二人を庇うように、一人の少女が立っていた。

初めて見る人では無い。けれど…どうして忘れていたんだろう？一度は警戒していた筈なのに…

『あの、白い魔導士の存在を』

よくよく見れば、それは先刻までフェイト達の横にいた、あの子だった。

でも…

『本当にあの子？』

そう思わせる程の印象を目の前の少女は与えている。

「…何処まで規格外なのかしら？貴方は…！！」

淑やかに微笑んでいた女が声を荒げる。

俄には信じられない。あの白い魔導士はあの一瞬で介入しつつ、二人を完璧に切り切ったのだ。

本当に…馬鹿げている…

「貴方は…何者なの？」

思わず口から毀れた、本心からの言葉。

少女は即答した。

「何者でもありません。ただの女の子です…!!」

そんな、全く閉まらないような答えを、返してきた。

「はるか…!?どうして此处に!？」

「はるかちゃん!？」

私の登場にはなのはちゃん達も流石に驚いたらしい。まあ私も同じ立場だったら驚くだろうけど…

「詳しい話は後で。今は…この状況を何とかします」

私のやったことのカラクリは恐らく彼女達は理解出来ていないと思う。

「はるかちゃん！！クロノくんは！？」

「…とりあえず無事です」

本当は厄介な事になっているんだけど…これ以上困惑させたくない
ので要点だけ言っておく。

「アスト、あれってさ…」

『同一人物ではないですが…間違い無いですね。何よりあの風貌…
魔性と悦楽愉しむ蛇帝…彼女に他なりません』

「うん。美人さんだよな」

なのはちゃんとフェイトちゃんは啞然として私達を見ているが…説
明はちよつと時間かかるし…

「はるかちゃん！！後ろ！！」

突然、なのはちゃんがそう叫んだ。

どうやら彼女が私の背後から攻撃を仕掛けてきていたらしい。

「もうっ…いきなり乱暴ですね！！」

私は振り返ると右手を突き出し、

「はあっ！！」

右拳を握り締める。と、悲鳴も上げずに蛇は息絶えた。

私は彼女に振り向くと両手を前へと突き出し、そのまま、横へ凪ぐ。
次の瞬間、少女を縛り付けていた蛇達が引き剥がされ、私が拳を握り締めるとやはり息絶えた。

「…この程度の使い魔で私を止められると思ったなら大間違いです」
「…この力…流石と言うべきですわね…これは私程度では及びそうにもありません…『力では』ですが」

彼女には焦燥の色すら見られない。

「ですが、寧ろ安堵しました。貴方はそうでなくては…私も力を見せ付けられて怖じ気づきは致しませんが」

間違いない。彼女は知っている。私の正体…その真実の姿を。

「手っ取り早く決めます。アスト！！コード…メサイア！！」

「『静草 はるか』…イメージを現実にする希有な能力の持ち主…」
ピクリと体が震えていた。わかつてはいたけれど反応せざるをえない。

ダメだ！！知られたくない！！言わないで！！

一種の脅しのつもりで余裕ぶつては見たものの、内心では気が気ではいられなかった。正体は看板されている。能力まで露見していた。予感される次の一言…

嫌だ！！嫌われたくない！！

だって…『あんなもの』の存在を誰が好き好んで迎え入れてくれる
だろうか？

なのはちゃん達が知らない私の裏の顔…もし口にされたら…正気を
保てないかも知れない。

思い起こされるのはあの夢の光景…血にまみれた私…私を責め立て
るのはちゃん達…

『いないね？はるかちゃんなんて…』

頭から離れない…なのはちゃんからそんなこと言われたことないの
に…

「人としては必要ない存在」

私の中で力チリとスイッチが入る。

守らなきゃ…全部、自分もなのはちゃん達も…名も知らないあの子
も…

次を言ったら…多分私はあの人を殺す。殺してしまう。いや、殺せ
てしまう。

「聖女伝説の最後を知っていますか？聖女と呼ばれた者の末路…そ
れは…」

「アストっ!!」

「待って下さいマスター!!今のマスターは変です!!マスター、自分の使命をお忘れですか!!」

「っ!？」

私の使命…

「マスターは全てを救済する者。故のメサイア…その救済は善や悪等という概念を超越する筈です。マスターにとって彼女は救済対象では無いというのですか？」

あ…

バカだ…私…一番大切な事を見失うなんて…

何を焦っていたのか…また…あいつを目覚めさせる所だった。

『ごめんね。もう少し眠っててね』

「…ごめんアスト、もう大丈夫だから。なのはちゃん、フェイトちゃん、驚かないで…っていうのは無理だと思うけど…本当の私がどんな姿だったとしても…それでもともだちでいてくれますか…？」

不思議と声は震えていなかった。

「もちろんだよ…!!」

「うん。何があっても私達は…ともだちだ…!!」

ホッと安堵する。それならもう迷う必要はない！！

「アストラディア！！」

「モード・サタ」

え…？

視界の隅を何かが横切った。何が起こって…

見れば、赤い何かが宙を舞っていた。よく見ればそれは血だった。

そして…悲痛な悲鳴…

「はるかちゃあああああああああああああんっ！
？」

なのはちゃんの声だった。

次いで聞き慣れない声が聞こえてくる。

「悪いが墮落しなければ意味が無いのでな。聖女よ」

声は男のものだった。黒い袴を身に纏う男の手には日本刀が握られており、その刃は私の胸の中心を刺し貫いていた。

「あっ…か…は…！？」

私は口から血を吐き出すと、肉を裂き、血に濡れた刀身を掴むとそれを渾身の力を込めて砕く。

「…そのような力を残していたとは…」

男は全く動じていないらしい。

「忍足、外見はそれ以上破壊しないでね」

「御意に」

「っ!？」

男は大きく両腕を開くと、刺さったままの刀等、気にも留めず私を抱え込むと万力のように体を締め上げ始めた。

ボキリ、ゴキッ、メキゴキヤと、体が嫌な音を立てる。一瞬の出来事過ぎて声も上げられなかった。

それ程鮮烈な衝撃で、私の意識は断絶した。

第二十話：伝えたい想い（後書き）

能力が無ければクロノの実力なら圧勝してたんだろうなあ…

なんだかんだで囑託含めてメインメンバーはやっぱり強いですよね
！
…

第二十一話：共闘（前書き）

お久しぶりです

第二十一話：共闘

「さて…体よく器は手に入りましたし…後は…」

ドレス姿の女の人は私達を見ている。私は背筋に寒気を感じながらその光景を見ていることしか出来なかった。

骨を砕く音は余りにも衝撃的すぎて…目の前ではるかちゃんが殺されてしまったという現実を受け入れ難くて…

呆然としているしか無かった。全身の力が抜けて、自身の四肢が自分のものであるという感覚さえも鈍らせる程…追い詰められる。

何よりおぞましさを感じさせるのは…あの『まばたき一つしない女の姿』だ。

ドレスはとても煌びやかなのに…あんなに整った顔立ちだというのに…その姿が信じられない程の恐怖を煽る。

これ以上、一分一秒足りともこの場所にいたくない。

「なのは！…しっかりして！…弱気になっちゃダメだ！…」

「っ！…？フェイトちゃん…」

私の変化に気付いたのか、フェイトちゃんが私に声をかけてくれた。

「…ごめん。そうだね！…弱気になっちゃいけないよね！…」

そつだ。ここで引き下がるわけにはいかない！！目的はわからないけど、あの人達はなつきちゃんを狙っているみたいだし、はるかちやんだって死んだと決まったわけじゃない……！！

「助けよう！！なつきちゃんもはるかちちゃんも！！」

「うん！！」

「…如何致しましょう…？」

「…この場合は貴方に一任します。くれぐれも私を失望させぬよう…良いですね？」

「御意に」

そう言うドレス姿の女は狭間の向こうへと消えていった。

「…とは言え…さて…どうしたものか…」

「…なつきは解放して貰う！！」

フェイトちゃんが凜と言い放つ。

「…何故其処まで固執する？それ程の覇気…確たる理由が無ければ出せるものではないと思うが」

男がなつきちゃんを見るとなつきちゃんは顔を伏せた。

「…ほう？ではこうしよう。この女は解放しても構わぬ」

「「「えっ！？」「」」

三人同時に驚きの声を上げる。

ただ、その驚きの度合いは明らかになつきちゃんが一番大きい。

「但し…貴様らの仲間が捕らえた私の部下を解放するなら…だが？
どうだ？悪い交渉では無かろう？」

それはとても辛い宣告に思えた。

フェイトちゃんは奥歯を噛み締めていた。

だつてこの交渉は私達にとって

「成る程…下船の者らしい卑しい考えだ。浅ましいな。外道」

耳を疑った。初めて聞く声じゃない。けど口調からして有り得ない人物だ。

「見るに堪えぬ交渉だが、これもまた戯れよ。続けよ。下船の輩よ」

「はるかちゃん…！？」

「はるか…！？」

それは紛れもなくはるかちゃんだった。但し、その姿は漆黒に染まり双眼は赤く揺らめき、不適に笑みを浮かべている。私達の知るはるかちゃんとは明らかに違っていた。

「うん？どうした？交渉相手は余では無いであろう。余が直々に立ち会ってやろうと言うのだ。幼子ならば非礼を赦さぬわけでも無いが…余り待たすな」

…なんか…明らかに違う。

「…目覚めたか…黒き魔王よ」

はるかちゃんは呆氣に取られたように男の人を見ていたけれど

「…ぷっ…くっ…あはははははっ…！」

突然お腹を抱えて笑い始めた。

「なーんだ。お見通しじゃ高貴な口調しててもつまないじゃん。あー無理して偉ぶって損した」

呆氣に取られる私達。一体何がどうなって…？

あれははるかちゃんなの？

「あの…はるかちゃん？」

「んー？なあに？なのはちゃん？」

意を決して尋ねてみたけど、やっぱりはるかちゃんだった。けど…

「はるか…その姿は…？」

フェイトちゃんのはるかちゃんのバリアジャケットを見つめながら

尋ねる。その漆黒に染め上げられたジャケットは明らかに異様だ。

「んー？これはねー…どす黒く染まった私の心のカタチ。所謂その具現ってやつってのが一番しっくりくるのかなあ？」

声も姿もはるかちゃんんだけど…明らかに違う所が一つある。

「それで…交渉はどんなの？もしかして決裂？」

「どうだろうな…承諾はし難いのは勿論だが」

私達は沈黙するしかない…だってこれは私達個人で決めていい問題じゃ…

「…そんじゃああんなつまないやつらとじゃなくてさ…私と交渉しない？」

「何？よもお前までこの女を解放せよと言うのか？」

男の人の言葉を受けてはるかちゃんは口の端をひきつらせて笑う。

「間違ってはいないけど私が望むのは完全解放じゃあないよ。前からこいつの抱える闇には見所があると思ってたんだよね？だから、こいつを私の眷属にしたいなあって…」

「ほう？条件は変わらないが…それでも良いならだが…？」

「要は、そのお仲間ってやつを捕まえてるやつらをみんな殺して助けてくれば良いんでしょ？軽い軽い…けどさ…」

はるかちゃんはにこにこ笑いながら物騒なことを言い出す。そして顔を伏せると

程なくして鈍い音が聞こえた。

「な…に…？」

私には全く見えなかった。それはフェイトちゃんも同じらしく、彼女も目を見開いている。

男の人の胸には、魔力で精製された槍が突き刺さっていた。

彼は驚愕の表情で、自身の胸を見て、口から血を流す。

「あいつを殺したのは許せないかなあ…ダメじゃん？ 獲物の横取りは」

はるかちゃんはにこやかに微笑みながら…けれど彼女の口から出てきたとは思えない言葉を口にした。

「あんたさ…邪魔だから殺すね？」

瞬間、男の人は声を上げることも出来ずに消し飛んだ。槍の魔力が爆発的に膨張し、内側から肉体を爆散させたのだと、思考が戻ってきてから気付く。

「…はるかちゃん…？」

「ふん。やっぱり侮れないのはあいつか…今の段階で手の内を晒すのは危険ね。どれだけ人形を張り巡らしてるかわかったもんじゃない

いし…」

はるかちゃんは少しだけ思案すると「んっ」と背伸びをすると飛び去ろうとする。と、

「待つて！！何処へ行くの？はるか」

それをフェイトちゃんが呼び止めた。

「あれ？フェイトちゃんって割と鈍感さん？決まってるじゃん。あの男のお仲間の所よ。解放しなきゃ交渉成立にならないし…？」

「…でも一緒に管理局の人達もいるんだよ？」

「…うん。それが？」

はるかちゃんは意味がわからないといった風に首を傾げる。

「それがって…だって私達も管理局の協力者なわけだし…」

「なのは…さっきはるかが何て言っただか思い出して…」

はるかちゃんが言っただこと…？

「フェイトちゃん？……っ！？」

それってまさか…！？

「はるか…どうやって管理局の人達を引き離すつもりなの？」

「変なこと聞くのね？そんなの」

「ダメだよっ！！殺すなんて！！」

はるかちゃんは私の言葉にぽかんとしていた。

「…じゃあどうする？私を止める？それはそれで面白い提案だと思うけどさ」

はるかちゃんは不敵に笑みを浮かべる。悪戯っぽくも見えるがそれでいておぞましいものも感じさせる…そんな表情だ。

「…止めるよ。そんなこと…はるかちゃんにして欲しくないから…
！！」

「たった二人で止められると思ってるんだ…ふうん…まあフェアじゃないのは何時ものことだけど…んー…よし、良いこと考えた」

はるかちゃんは指を鳴らすと、魔力で精製した矢をなつきちゃんに向かつて放つ。矢は彼女を縛っている蛇を切断し、彼女を解放した。

「はるか…？」

フェイトちゃんははるかちゃんに呼びかける。はるかちゃんはにんまりと笑うと

「力で屈服させてこそ王というもの。三対一で適わないと知れば『止める』なんて考えが如何に愚かな選択か…理解するよねえ？」

魔法陣を展開させた。

周囲の風景が全て闇に溶け、目の前に広がったのは…

「…お庭…？」

「噴水…」

「……………」

そして巨大なお城だった。但し、影みたいに真っ黒だ。

「フエイトちゃん、これって…？」

「結界…だけど私達の使ってるのとは違う。広域結界はこんな風に風景までは変わらないし…そもそも此処は全く別の場所みたいだ…」

『当然よ。一緒にたにされては困るわ』

突然、頭の中にはるかちゃんの声が響いた。次いで、影の城の扉が開かれ、彼女が姿を現す。

「ようこそ？『我が庭園』へ」

はるかちゃんは黒いドレスを纏っていた。彼女はそのドレスのスカート両裾を摘み、上に上げるとお辞儀をする。その姿はさながら一国の王女のようなだった。

「…此処はあなたの庭ってわけね…」

今まで黙っていたなつきちゃんが口を開く。その目は陰しく、はる

かちゃんを睨んでいる。

「貴女…良い目をしているわ。その凜とした双眸…壊れたらどんな色になるのかしら？」

はるかちゃんは心底楽しそうに私達を眺めている。

「フエイトちゃん!! なつきちゃん!!」

「うん。はるかは何とかしないと…」

「あんなになってもまだはるかと呼ぶんだ…」

「当たり前だよ!! 友達だもん!!」

「なつき…」

「…状況位理解してる。一時休戦ね」

「なつきちゃん!! なつきちゃんだって友達になれるよ!!」

「…ないよ…友達なんて」

え…?

「先に仕掛ける…」

なつきちゃんはそう言つと、両手に剣を出現させる。

「あれが…なつきのデバイス!!」

私もフェイトちゃんも彼女のデバイスを見るのはこれが初めてだ。

なつきちゃんは剣の柄を握る指を緩めると、はるかちゃんに向けて剣を投擲する。

はるかちゃんは表情1つ変えずに首を右に傾げるだけで剣を避けたが、放たれた剣は分身して、三つに増えると、背後から彼女に襲いかかってきた。そして前方からはなつきちゃんが剣を構えて走ってきている。

「ふうん…」

「はあああつ!!」

なつきちゃんの剣がはるかちゃんを捉えたかに思えたが、

「そんなっ!?!」

はるかちゃんは低く屈むと右手で一本掴み、左足で一本踏みつけ、右手で一本防いでいた。そしてなつきちゃんが振り下ろす剣をバックステップだけで避けている。結果、彼女には1つも刃は届かず、なつきちゃんの剣は何も無い空間を切っただけだった。

「お返しする?これ」

「っ!?!」

はるかちゃんは握っていた剣を宙に浮かすと、それを殴ることで射出する。

「っあああつ!？」

至近距離から放たれた剣はなつきちゃんの左肩に勢い良く突き刺さり、彼女の体を庭園の噴水まで吹き飛ばす。

「なつきちゃん!？」

「なつき!？」

なつきちゃんはヨロヨロと体を起こすと、駆け寄ろうとする私達を片手で制する。

「…問題ない…それより…その服まさか…」

「気付いたのかしら？」

「服…？服に何か仕掛けがあるの…？」

「違う…その逆だ。なのは…あれは…あのドレスはバリアジャケットじゃない…ただのドレスだ…」

「っ!？フェイトちゃん…それって…」

「もしかしてバリアジャケットじゃないから戦えない…なんて甘いことは考えてないよね？」

「「「っ!?????」」」

「図星だった？ダメよそんなんじゃ…殺しちゃっよ?」

はるかちゃんは左手を上に掲げると

「さて、何秒耐えられるか…割と面白い見せ物になると嬉しいのだから？」

無数に光が煌めく星空が出現した。

「まさか…！？あれ全部が…！？」

フェイトちゃんの表情が驚愕で固まる。

「『無慈悲なる星空』」

フランクスシフト所の数ではない。圧倒的に規模が違い過ぎる。あれは紛れも無く星空であの無数に瞬く星全てが彼女の弾丸なのだ。

防ぎきれはしない。避けきれもしない。直撃すれば命は無い…

「（スターライトブレイカーなら…）」

或いは全てを弾いて彼女に届くかも知れない。

但しリスクは大きい。周辺の魔力を集められない分、充分な力を発揮出来ない上に確実に届くという保証が無い。

危険な賭けになるのは間違いないが…

「（けど、それしか…！！）」

私はレイジングハートを見つめる。

レイジングハートは光ること意志を示した。私の考えに賛成してくれたようだ。

けれど

「『止めた方がいい』」

私を止めに入っただのはなつきちゃんだった。

「え…？」

「『大技を撃つつもりなんだろうけど…手の内を晒すのは今の段階じゃ得策とは言えない。第一、通用しなかったら切り札を失うことになる。確実に仕留められる時が来るまで温存するべきだ』」

「『でも…でもっ！』」

「『…状況を考えて切り札に成りうるのは多分君だ。言えた義理じゃないが、お互い生き延びる為に役割を決めるべきだと思う…』」

「『なつきちゃん…やっぱり良い人なんだね！』」

「『っ！？…あくまでも合理的に考えるなら…よ。それにフェイトには借りがあるし…君にも…酷いことを…』」

「『なつき…ひょっとして引け目感じてるの？』」

フェイトちゃんの問い掛けになつきちゃんは俯くと小声で『そんな

ことはない…けど』と言っていた。わかりやすいなあ。なつきちゃん。

「『私もなつきの提案には賛成だ。なのはは？』」

「『もちろん！！大賛成！！』」

「『少しも疑わないなんて…脳天気ね…』」

でも騙す必要はないわけだし…と言うか気難しい子なのかな？なつきちゃん。

「作戦会議は済みまして？」

と、痺れを切らしたのかはるかちゃんが語りかけてきた。

「…寧ろ攻撃が無かったのが不思議な位よ」

なつきちゃんはじめと目ではるかちゃんを見る。

「そのような下劣な真似をするように見えて？」

「はるかならない…絶対に」

「やるならば徹底的に正々堂々圧倒してこそ…まあ彼女には理解されないけれど」

はるかちゃんがそう言うと、空の星々が一斉に眩い光を放ち始める。

「さあ…死にたくなければ耐えてみせて…そして私をもっと愉しま

せて!!」

直後、無数の光が降り注いだ。

その姿はさながら流星のようだが…あの光一つ一つが私達を一瞬で消し飛ばす威力を有しているのだ。美しさに見とれている場合ではない。

「それで、どうするの?!」

私は傍らのなつきちゃんに尋ねる。

「…何が起るか…という経緯はこの際忘れて。私が動き出したら…あなたは魔力をチャージ。但し切り札は温存。合図したら攻撃して」

「わかった…!!」

私の返事に小さく頷くとなつきちゃんはフェイトちゃんに振り向く。

「フェイトは彼女のフォローを…」

「うん。でもなつきは…?」

「…やれることをするしかない。生き延びるために」

なつきちゃんはそう言ってはるかちゃんへと向き直る。

そして

「…行動…開始!」

彼女は自ら『無慈悲なる星空』へと突っ込んでいった。

第二十二話：一つの終わり（前書き）

やっと決着。

第二十二話：一つの終わり

暗い…ここは真つ暗だ。見渡せど見渡せど何も見えない。荒野とかの方がまだ景色に色がある。一寸先所ではない…これでは三日三晩歩いてても何も見えない。

何も見えない…

何も無い…

ここには生も死も無くて…誰一人存在しない。

私以外は…

「・・・えーと…何があつたんだっけ？」

うーん…よく覚えていない。いや…曖昧なのか？

『ばーか。此処はお前の心ン中だろ？平和ボケしたか魔王様？』

心の中…

「平和ボケって…私はそこまで殺伐とした世界には…って!？」

其処まで言つて私は前にもこんなことがあつたことを思い出す。

確か私が元居た世界で…私が一度目の死を迎えた時だったはず…

「え？じゃあ私また死んだの？」

『相変わらずの鈍さだなあ…お前』

目の前の『静草春香』が呆れた表情で言う。

「ううー…そうやって言うけどそう簡単に理解出来るものじゃないと思う…」

『ダメ魔王』

カチーン。

「魔王じゃないもんっ！！それを言うならあなたの方がよっぽど魔王っぽいじゃん！！このっ・・・魔王っ！！」

『悪口になってねえじゃんか。まったく…何処まで良い子だよお前…大体、お前と私は根源は同じなんだぞ？お前は私。私はお前。わかっただろ？』

それは…そうだけど…

「わかってるよ…それに…私が此処に居るってことは表には今、あなたが居るんでしょ？」

『あの状況でお前を生かすにはこれしか手段が無かったんだ。まあついでに遊ばせてもらってるけどな』

…この子が表に出ている…その状況下で、私は最悪の可能性を思い浮かべる…あの夢の光景…あれが現実になるかも知れないのだから。

「…なのはちゃん達に手を出したら、許さないから…」

『ゴメン。それもう手遅れだわ。今絶賛戦闘中』

最悪だ…

「今すぐ私を出して!!」

『嫌だね。だってお前死んだら私も死んじゃうだろ？私に死ねって？』

ドシユッ

「…え？」

其処まで言つと彼女は私の胸に何の前振りもなく手刀を突き刺す。

「っあつ!？」

ぐじゅりと、彼女は傷口を広げて、傷口の中の手を広げる。

激痛と同時に確かな感触があつた。

彼女が何かを鷲掴みにした感触が。

『今お前がしようとしてることは、このまま心臓を握り潰すことよりも…』

「っあつあああああつ!？」

『心臓を引きずり出して踏み潰すことよりも酷いことだ。冗談じゃない。何もしてないのに表のミスで死ぬなんて絶対に御免だね。それとも聖女様は全てを救つて見せるとかぬかしておいて私の命は見捨てるって言うんですかあ？ああん？何とか言ってみろよ聖女サマあ！！』

「そ…そんなことは…」

「大人しく指でも加えて待ってな。お前の大事なもの……全部メチヤクチャにブチ壊してやるよ……取りあえずミンチ決定かなあ？」

それは……それだけはっ！！！！

「駄目えっ！！それだけはっ！！」

『ざーんねーん。もう手遅れって言つたろ？無慈悲なる星空ももう使っちゃってるよ』

「そ……そんな……」

[illegible]

異空間・魔王の庭園

状況は最悪と言つて良いだろう。正直、既に他人に頼らざるを得ない時点で結果は決まっているも同然に思える。

白い魔導士の女の子の切り札：恐らくは大技なんだろうが、それに
したって、あの悪魔の星空を蹴散らしてあの少女に届くという保証

は無いのだ。

ならば…その可能性を少しでも上げることが、今の私に出来ること…

あの星空は少々無茶をすることにはなるがどうにかなる。この子の力があれば…

手の内をこんな所で晒さなければならぬなんて…一体何を何処で間違えたのか…いや、私の考え自体がそもそもの間違いなのかな…

滑稽だ…管理局に散々楯突いた挙げ句、その管理局の人間に頼らなければならぬなんて…

あの二人もお人好しが過ぎると思うが…気持ちはわからなくもない。

けれど…

『ダメだよ…眩しすぎる』

あの二人の真つ直ぐさは私には眩しすぎるんだ。私はそんな救いが与えられて良い人間じゃない…

そしてきつとあの二人はこんな所で死んで良いはずは無い…それだけは断言できる。

理由なんて簡単だ。本当に、良い子達なんだから…

『収束砲！！準備して！！』

「はい!!」

何偉そうに指示してるんだろう私…

「フェイトはその子を守って!!」

私は際限なく繰り出される魔力の雨を必死に切り払いながらフェイトに叫ぶ。

「わかった!! けどなつきは!？」

「私は道を作る!! 大丈夫… 手は考えてあるから」

そう… 私には手がある。 もう直ぐそれも整う。

だから…

「セイヴ… もう少しだけ頑張って!!」

『all right my master』

セイヴゼフィルスにはもう随分無理をさせてしまっている。 もう数えるのも嫌になる位の魔力弾を切り払ってきた。 デイスヴァニティの準備が整うまでは彼に頑張って貰うしか無い。

「守るのが精一杯かしら? 思ったよりつまらないわね」

魔王は呆れ顔で眼下の私達を眺めている。

「余裕ね… そんなだと足元救われるよ!!」

「そんな展開があるなら是非見たいわねえ？」

彼女はにんまりと口の端を吊り上げて笑う。

「…なら見せてあげるよ」

私は光輝く彼の姿を安堵しながら見つめ、告げる。

それが意味するものは…

「デイスヴァニティ！！」

私はデイスヴァニティを待機モードから武器モードへと変化させると、それを少女に向けて構える。

「コード…000！！」

『コード認証、ゲート構築…無限光…発射します』

対象空間への直撃と同時に一瞬で『無慈悲なる星空』が消し飛ぶ。全てが無かったことにされる。

それが例え圧倒的な力を持つ魔王であろうと…時間の逆行によってその力自体が生まれる前に戻ってしまえば…

「っ！？私の星空が！？」

その力は初めから無かったことになり…それが行使されることも無い。

「今！！フェイト！！バインドで拘束を！！」

「何が起こって!？」うん、うん!」

フェイトはバインドで魔王を空間に縛り付ける。

「くっ!?」のっ!」

やれる… 今なら!!

そう思った瞬間だった。

何か、鈍い音が聞こえたのは……

「えっ……？」

何が起ったのかは明白だった。胸を貫かれていたのだ。彼女の手にある魔力の槍で……

まるで「空間を繋げて」切っ先を届かせた様に……

「残念。面白かったけど此処までね」

彼女がぐりんと腕を捻るとそれに伴って、傷口も広がる。

「?!?!?!?!?!?」

あまりの激痛に声すら失った。

「因果の逆転…発想は面白いけど、まあ所詮は其処までね。その力に関して言えば悪いけどこっちの方がプロフェッショナルよ。願望…欲…想像の実現…叶えられなくて魔王が務まるとでも思っていたの？」

「・・・叶える？」

「そう…自分の中のイメージを現実のものとして叶える…あなたはもう二度は見ている筈じゃない？」

「…っ!？」

そうだ、この子と初めて会った時、普通なら私の攻撃を受けて串刺しになっていた筈の状況…それをこの子はあることが無傷で防ぎ切った。

もっと早く気付くべきだった。あの不自然な状況のカラクリに…

「…撃って」

「え…?」

私と同じように声も出せずに放心していた、白い魔導士の子が呆けたように声を出す。

「なつき!?!何を言って!?!」

フェイトは動揺しているが時間は無い。

「早く撃ってっ!?!チャンスは今しか無い!?!」

効くかどうかなんてわからない…けれど今撃たなければもう勝ち目が無い！！

「…レイジングハート…最大出力なら…この空間…壊せるかな？」

『of course・master（勿論です）』

「あつ…あなたどういつつもり！？勝つなら今しか」

「…違うよ」

彼女は私の言葉を否定する。

「勝ちたいんじゃない…助けたいんだ！！はるかちゃんも…なつきちゃんもっ！！」

「…そうだね、その通りだ」

フェイトが彼女に同意する。

「今はあなたの命が優先だ。どっちも助けるならそれしかない！！」

「…何を甘いこと言って…私は大丈夫だから…っ！！」

「だって…なつきちゃん、全然大丈夫そうに見えないもん…見捨てるなんて、出来ないよ！！」

この子達はまだ信じてるんだ…どっちも救う…そんな夢物語みたい

な未来を…

「…もつと絶望的な状況突き付けないと駄目かしら？」

目の前の魔王は口の端を吊り上げると更に手をねじ込んでくる。

「あぎ…く…あああっ！？」

「なつきっ！？」

「なつきちゃんっ！！」

傷口を刺激される度に鮮血がまき散らされる。衣服は真つ赤に濡れて、意識が今にも跳びそうだ。

けれど…

「くっあ…全く…私じゃ無きや失神してあの世逝きじゃないの…これ…」

何故だろう…不思議と耐えられる…

「…何でまだ耐えてるの？あなた」

「…あの子達がまだ諦めてないから…かな…」

彼女は、私を一瞥すると

「…予定変更。そんな表情のあなたなんて要らないわ」

徐に、傷口から手を引き抜いた。

「っあっ!？」

「なつきちゃんっ!？」

あ…れ…力が入らな…い…？

全身の力が抜けていく…まるで今まで在ったものがごっそり抜き取られたみたいだ…

そして…私の意識は急速に落ちていく…

今度こそ…深く深く…底へと…

私は落下するなつきを受け止める。彼女はぐったりしていて動かない。傷口からは今もまだ朱い血がとめどなくあふれ出てきている。

「なつきっ!!！」

呼びかけるが反応は無い。とにかく、ここじゃ満足な治療も出来ない。早く脱出しないと…

「フエイトちゃん!？」

なのはが心配そうに私に声を掛ける。

「急いでなのは…!!」

「うっうん!!」

なのはは頷くと魔力の収束を再開する。

「次はフェイトちゃんが相手かなあ？」

あれが…はるか…？いや、かけ離れ過ぎている…

「っ！？それはっ!!」

私は彼女の手のひらに浮かぶ光る小さな球体に気付く。

「ああ…魔力の源ってやつかしら？」

リンカーコア！？そうか…なつきは魔力を失って…

「成る程。これは利用出来そうね」

ぱくっ

「なっ!？」

食べた！？リンカーコアを食べちゃった！？

もごもごと口を動かすはるか。私は突然の事に声も出ない。

あれも一種の吸収だろうか…

いや、油断は禁物だ…今はああやって間の抜けた感じになっているが…何を仕掛けて来るかわからない。

「けふつ。さてと…」

来るっ…！

「なのはっ…！」

「準備できた…！行けるよ…！」

『No Problem.（問題ありません）count…10…
9…8…7…6…5…4…3…2…』

なのはの魔法陣がより一層の輝きを放つ…その桃色の魔力光は、これまで幾多の困難を打ち破ってきた。

それは言わば『勇気的光』

希望の一手。

『1…0』

「全力全開っ…！」

『star light breaker』

「スターライトっ…！」

解き放つ…切り札…！！

「ブレイカアアアアアアアアアアーっ!!」

それは…これまで一度も見た事の無い程、強烈な輝きを放っていた。なのはの放った収束砲は空間の壁に直撃すると、貫通し、根刮ぎ粉々に砕いていく。

やがて、全てを粉碎した桃色の光は消えていき…視界にやっと風景が戻る。

「…やったあっ!!外だよフェイトちゃん!!」

「うんっ!!これで…!?!」

直後…はるか魔力が急激に膨れ上がるのを私は感じ取る。

「…弱点を突かれたか…やってくれたね…二人共…!!」

あれは…マズい…なのはは消耗しているし…この場は私が何とかしないと…!

私はなのはに肩を貸しながら思案する。何とか離脱する方法を…

「お前ら…いきなり出て来るなり…この状況は何なんだ?」

「ルシア!?!」

気が付くと、ルシアが来ていた。彼女はなのはの消耗に気付いているらしく、私とは反対側からなのはに肩を貸してくれている。

「ごめんルシア。なつきもお願い!!」

「は？なつき？って誰だよおい!？」

「今は説明してる暇が…!!」

「お前だって模擬戦の後で消耗してるだろ!!って言うか…こいつって…それにあれ、静草？」

ルシアはかなり困惑している。

「フェイトちゃん…」

なのはが私を心配そうに見つめている。

「大丈夫。なのはは休んでいて!!はるかは私が!!」

「っ!？なつ…おいっ!？一体何がどうなって…!？」

「「えっ?」」

身構えていると、いきなりはるかが胸を押さえて苦しみ始めた。苦悶の表情は演技には見えない。が、何が起こっているのか…

「まさか…あいつ…!?!退魔師の血を!?!あの魔力の源か!?!くそっ!!一時撤」

「なら、此处で不要な物を棄てていくべきだよね!!」

突然の声…そして刹那、水色の魔力光がはるかへと直撃する。

「つあああゝっ!？」

落下していくはるか…私達は突然の事に動けない。

黒煙が消え去ると、そこには黒いバリアジャケットを纏う少女が佇んでいた。脇には、『はるか』を抱えている。

えっ?はるかが二人!?

「…無闇に突っ込み過ぎです。あなたは」

そして、背後からも声。ちょっと待て!?!この声って!!

「別に分離には成功したんだしいーじゃん?相変わらず頭固いなあ」
「」

「あなたが無鉄砲なだけでは?それに回収対象は」

嘘…これは…どういう…?

「ボクのやり方にケチつけないでよね!!」

「…いや…ですから落ちた方なのですが」

なんで…私となのはがいの!?

第二十二話：一つの終わり（後書き）

そして…

追加キャラ登場なの

クライマックスに向かってdrive ignition!!

ふいゝ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0492o/>

魔法少女リリカルなのはA'S Little Guardian ~ 小さな守護者 ~

2011年11月3日02時03分発行